
流星のロックマン - Re : COSMOs -

ホワイトエース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン - Re: COSMOS -

【Nコード】

N7662U

【作者名】

ホワイトエース

【あらすじ】

ロックマンの活躍により、地球は3度の危機を乗り越えて来た。しかし、電波の身体を持つ敵の襲来が、新たな戦いの始まりを告げる。彗星の名を持つ者が地球侵略を企む中、密かに動く影……その「目的」とは、一体何なのか……

プロローグ（前書き）

意外と早い始まりですが、新しく連載始めます。

注意

- 1．キャラ名など一部変更あり。
- 2．登場キャラに一部削除あり。
- 3．登場オリジナルキャラに追加あり。
- 4．ストーリーの大幅変更あり。
- 5．作者の奇妙な企みあり。

では本文を見ていただく前に、みなさんへのメッセージを。

これは『SHOOTING STAR ROCKMAN / COSMOS /』のリメイクです。

リメイクの**は**ずです。

プロローグ

F M星。そう呼ばれる星が、宇宙に存在していた。

そこにはF M星人という、電波の身体を持つ生命体がいる。

この星の王であるケフェウスは、かつてF M星が壊滅させたA M星の復興を手伝った。全ては自分が犯した罪を償うため、そして、地球に住む友のため。

しかしある日、事件は起きた……

『なん……だと……!?!』

F M王ケフェウス。彼の前には、6人のF M星人がいる。

1人は、丸みを帯びた白い電波の身体、緑色の瞳、頭の両側に付いた黄色い角が特徴の、羊のような見た目の電波体。

1人は、人型の上半身は白い電波、牛の胴体のような下半身は茶色の電波でできている他、赤い瞳や弓に変化した右腕が特徴。

1人は、見た目は人で、青い電波の身体、黄色の瞳、銀色の翼が特徴。また、水色の表紙の本を両手で抱えている。

1人は、黒いアーマーを全身に纏い、姿はサソリそのもの。アーマーの奥の瞳は不気味な赤い光を放っている。

1人は、見た目は魚で青い瞳を輝かせ、身体は背中側が黄色、腹側が白の電波でできている。

そして1人は、見た目は人で、全身が銀色の電波でできている他、上半身に纏う白いアーマーやオレンジ色の瞳が特徴。また、銀色のホウキを右手に持っている。

『コメット……今、なんと……!?!』

『あなたには従えないと言ったんだ、FM王』

コメットという、ホウキを持つFM星人が言った。ここにいるケフェウス以外の6人は反逆を試みているらしい。

『ふざけるな！ 余は許さんぞ!』

『あんたみたいな甘ったれの王様には、命令されたくないんだよ』

『ピスケス……!』

次に言葉を発したのは、魚のような姿の電波体。名前はピスケスというらしい。

『あんたの下にいたら、戦いを忘れてしまう。そんなの、つまんないよ』

『クツ……余に逆らったところで、お前達ごときに何ができる!?!』
『地球を我が物にする。ニンゲンという生物を滅ぼし、新たなFM星にするのだ……!』

ケフェウスの問いに、コメットが答えた。その返事を聞いて、ケフェウスは驚いている。コメットは、人間が住む地球を攻撃しようと言っただ。

『地球を……? お前達も知らないわけではあるまい。あの星には、星河スバルという少年がいる。あいつがいる限り、地球を手に入れることなど不可能だ』

『あなたが何を言おうと、私の意志は揺るがない。それに……アクエリアス!』

コメットに呼ばれ、大きな本を抱えたアクエリアスという電波体が前に出る。

『あれをFM王に見せてやるんだ』

『ふふ〜ん 王様あ? これ、な〜んだっ』

『……ッ! それはアンドロメダのカギ! いつの間!?!』

ケフェウスは、自分が肌身離さず持っていたはずのそれを見て、動揺をかくしきれずにいた。

アンドロメダのカギは、その名の通りアンドロメダという巨大な電波兵器を召喚するためのカギだ。それには生物が持つ負のエネルギー

ギーを溜める必要があり、そのためにコメットは地球を攻撃しようとしているのだ。

『これが無ければ、あなたは何もできなくなるでしょ？ 私の手にかかれば奪うことなんか簡単なのよお？ フフッ！』

カギを盗んだ張本人であるアクエリアスは、焦るケフェウスの顔を見て微笑んでいる。

『アクエリアス！ そのカギを返せ！』

『嫌よ。せっかく手に入れたものを返すなんて、そんなのバカがすることよお？』

アンドロメダのカギが済むまで見せびらかした後、アクエリアスはケフェウスから逃げるようにしてコメットの後ろに隠れた。

『じゃあコメットさん、そろそろ行きます？』

『そうだな、ピスケス……さらばだ、FM王！』

ケフェウス1人を残し、コメット達は宇宙へ飛び立った。行き先はもちろん、多くの人間が住む青い星、地球だ。

『まずい……スバルに、このことを伝えなくては……！』

数分後、ケフェウスもコメット達と同じく地球へ向かった。

第1話 新学期

コダマタウン。この町には、地球を何度も救った少年が住んでいる。

少年の名は星河スバル。ウィザードはFM星育ちのAM星人、ウォーロック。この2人こそ、地球を何度も救ってきたロックマンの正体だ。

そんなスバルは、ロックマンに変身できること以外は普通の小学6年生。無事に新学期を迎え、コダマ小学校に通っていた。

「……なあ、スバル」

「何？ ウォーロック」

ある日の休み時間、ウォーロックはハンターVGの中から学校の教室でスバルに話し掛ける。ハンターVGは現在普及している携帯端末だが、スバルが持つハンターVGは最新型。見た目こそ変わらないが、他の生徒達が持つものより性能が良いらしい。

「このガッコウっての、いい加減飽きねえか？」

「そんなこと無いよ。友達に会えるし、勉強できるし！」

『俺は退屈で仕方ねえんだよ!』

ハンターV Gの中で怒鳴るウォーロックを見て、スバルは溜め息を吐く。

「……だったら、ハーブと遊んでれば？　なんだかんだで仲は良いんだし、きつと楽しいでしょ」

『誰があんなヤツの所に行くかっての』

『あら、失礼しちゃうわね。仲良しさんな私のことを、あんなヤツ呼ばわりなんて』

スバルがハーブの名前を出すと、タイミング良くハーブ本人がスバルのハンターV Gに来た。ハーブはFM星人で、今は響ミソラというアイドルのウィザードとなっている。

『げっ……なんでテメエがいるんだよ!』

『ウフフ……お久しぶりね、スバル君。1ヶ月ぶりかしら?』

『オイ、俺は無視か』

ハーブはウォーロックを無視し、スバルと話し始めた。

「久しぶりだね、ハーブ。ミソラちゃんは元気?」

『ええ、元気すぎるくらいよ。それで、今日ここに来た理由だけど……どうやら休み時間みたいね。また後で来るわ。放課後、屋上に

来てちょうだい。他のみんなも連れて、ね……」

「……？ うん、わかった……」

結局、最後までウォーロックを無視したまま、ハーブはスバルのハンターV.Gから去っていった。

『ケツ！ 何しに来たんだ、あいつは！』

「なんだろうね……まあ、放課後わかるよ」

そう言って、スバルは次の授業の準備を始めようとする。

「スーバールー君っ！」

突然、誰かがスバルの両肩に手を乗せた。驚いたスバルが後ろを振り向くと、そこでは縦ロールが印象的な委員長こと白金ルナが微笑んでいた。6年生になっても、ルナは変わらず委員長だ。

「い、委員長！ どうしたの？ な、なんか……」

『なんか気持ちワリイな！ 変なモンでも食ったか？』

「失礼ね！ 私は笑っちゃダメなの！？」

ウォーロックに怒鳴ってから、ルナは再び笑顔で話を続ける。

「あなた、今度の日曜日は暇かしら？」

「う、うん、特に予定は無いけど……何？」

「ちょっと私に付き合いなさい」

ルナが笑顔で言い放った一言。それを聞いて、スバルの思考は一瞬だけ停止する。

「…………え？　そ、それは俗に言う…………デート、ですか？」

「な、なんで敬語になるのよ！　それに、そんなんじゃないわよ！」

「じゃあ、何に付き合えば良いの？」

「フフフ、それはね…………」

第1話 新学期（後書き）

リメイク前に比べると進行スピードは遅いです。

逆に言えば、それだけ全体話数が多くなるということでもあります。

第2話 強制参加

「……ウェーブバトルーナメント?」

「そう! けっこう前から年に4回、季節ごとに開催されてるらしいわ。それで、今年の春の大会が今年の日曜日に開かれるわけ。あなた、それに出てみなさい!」

「そ、そんな、いきなり言われても……大会って言うくらいだから、参加登録とかも必要だろうし……」

「大丈夫! 1ヶ月前にスバル君の参加登録は済ませてあるから」

(まさかの拒否不可能……!?)

ルナが笑顔で言い放った一言は、スバルにトーナメントに出ることを勧めるものだった。しかしスバルの参加登録は1ヶ月前に済ませてあるらしく、スバルは既に断れない。

「ほらほら、そんなに落ち込まないのっ。私も応援に行くから。ねっ?」

「わかったよ……」

(僕が日曜日に何か予定を入れてたら、どうしてたんだろっ……)

スバルとルナの会話が終わると、タイミング良く次の授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。

『スバル、スバル！　なんか面白いことになってきたな！』

「せっかく平和になったと思ったのに、また戦うことになるなんて……まあ、悪意のある相手と戦うわけじゃないから良いけど……」

それから数時間後。全ての授業が終わり、スバルにとっては待ちに待った放課後がやって来た。ルナ達に先に帰るように言うと、スバルはハーブが待つ屋上へ向かう。

「なんだろうね、話って……」

『ミソラが会いたがってるとかじゃねえのか？』

「そう、なのかなあ……」

その後、エレベーターで屋上に来たスバルは、辺りを見回してハーブを探す。

「ハーブ、まだ来てないのかな……」

『スバル君っ！　……あら、あなた一人で来ちゃったの？　みんなも連れて来て良かったのに』

背後から聞こえてきた、スバルの名前を呼ぶ声。その声が聞こえた方を見ると、そこにはスバルが探していたハーブの姿があった。

「あ、ハーブ。話って何？」

『……久々に、ミソラに会ってこないかしら』

『予想通りだ』

ウォーロックの予想通り、ハーブの話とはミソラがスバルに会いたがっているというものだった。もう1ヶ月以上も会っていないのだから仕方ない。

「ミソラちゃんに？ もちろん良いよ。いつ？」

『オフの日が入るのよ。今度の日曜日』

「に、日曜日……!？」

ここでスバルの表情は凍りつく。ルナが言っていたウェーブバトルーナメントは日曜日に開催される。参加登録をした以上、トーナメントには必ず出場しなければならない。つまり、日曜日にミソラに会うことはできないのだ。それでも、スバルは迷っていた。

(どうする……委員長を取るか、ミソラちゃんを取るか……)

『スバル君……? もしかして、日曜日は忙しい……?』

「えっ? あ、ああ、うん。まあ、ね……よし! とりあえず、先に入ってた予定の方を優先させるよ。それで時間があったら、ミソラちゃんに会いに行く! それでも良いかな……?」

『ありがとう。でも、無理しないでね？ 時間が無かったら、また別の日でも良いのよ？』

「うん……じゃあ、時間があつたら会いに行くからね！」

その後、ハーブは微笑みながらコダマ小学校の屋上を離れていった。

「……新学期早々、大変なことになったなあ……」

『本当に会いたくなったら、勝手に抜け出して来るだろうよ。あんまり気にすんな』

「うん……帰ろうか」

スバルは家に帰るため、再びエレベーターに乗った。

スバルは歩きながら、ハンターV.G.の中のウォーロックとトーナメントについて話していた。

「ウェーブバトルトーナメント……電波変換できる人が集まるトーナメントか……どんな人が来るんだろうね」

『強いヤツがたくさんいるんじゃないか？ もう今からワクワクだぜ！』

「戦うのは僕なのに……」

スバルが溜め息を吐きながら校門をくぐった、その時だった。

「ふわああっ!?!」

「うわっ!?!」

左の方から誰かが走ってきていることに気づかずに歩いていたスバルは、その走ってきた人とぶつかってしまった。

「いたたた……ご、ごめん、大丈夫!?!」

「うっ……ああ、はい。大丈夫だと思います」

スバルとぶつかったのは、スバルと同じくらいの歳の少女だった。

その袖の無い白のワンピースを着た少女は、長い茶髪を大きな赤いリボン2つで縛ってツインテールにしている。また、腰を強く打ったようで、緑色の瞳は涙で潤んでいる。

スバルが手を差し延べると、少女はその手を握ってゆっくり立ち上がった。

「はああ………周りをよく見ない。私の悪いクセですっ………」

「僕も悪かったよ、よそ見してたから………」

「あー、そーなんですかあ? じゃーあなたの方が悪いですねえ」

クセと不注意じゃ、不注意の方が悪いんですよ」

「い、いきなり強気な態度に……?」

スバルが苦笑いしていると、ハンターV.Gからウォーロックが出てきた。ウォーロックは、まっすぐ少女を睨みつけている。

「な、なんですかぁ……?」

「……ロック?」

『……? 気のせいか……邪魔したな』

少女を僅か数分睨みつけただけで、ウォーロックはハンターV.Gの中に戻ってしまった。

「なんだったんだろ……そういえば、まだ名前を聞いてなかったね。僕は星河スバル。キミは?」

「名前、ですかぁ……私は、波風ランと言います。えっと、あのぉ……私、急いでのので……失礼しますね」

「気をつけてね」

スバルに向かって軽く手を振ると、ランと名乗る少女は再び全速力で走り去っていった。

「……ロック」

『さっきのアレか? ……感じたんだよ。あいつから、強い力を……だが、それは俺がハンターから出てきた直後に消えちまった……』

「強い、力……もしかしたら、あの子も電波変換できるのかもね」

『恐ろくな……』

（あんなフワフワしたヤツが、そこまで強い力を持つてるとは考えにくい……なんだったんだ、あの気配は……）

第2話 強制参加（後書き）

新オリキャラ登場回でした。

けっこう重要な立場？のキャラとなっています。

第3話 初戦の相手は……

ルナがトーナメントの話をしてから数日後、そのトーナメントが開催される日曜日がやって来た。

『ついに来たな日曜日！ 急げスバル！ 遅刻すんぞっ！』

「今は8時、トーナメント開始は10時からだよ。そんなに急がなくても間に合うから」

『どんな強いヤツが来るんだろうなあ！ 楽しみで仕方ねえぜ！』

（だから、戦うのは僕なだけど……でも、まあ……楽しみなのは同じかな……）

ワクワクしているウォーロックを見て溜め息を吐くスバルだが、実は同じくらい楽しみにしていた。理由は、やはりウェーブバトルトーナメントに初めて参加するからだろう。

『そういえば、どこで戦うんだ？ その辺のウェーブロードか？』

「そ、それは危険すぎるよ……ここからウェーブライナーで30分くらいの所にあるウェーブバトルスタジアムで戦うって、委員長は言ってたよ」

『30分か……電波変換すれば大体5分って所か。いつそ電波変換して行くか？』

「それも良いけど、やっぱり委員長と一緒に行くよ。そうしないと怒られそうだし……よし、そろそろ委員長の家に行こうかな」

スバルはハンターV.Gを腕に着けると、家を出てルナの所へ向かった。

「スバル君、出るからには優勝を目指すのよ！ 優勝できれば次の大会でシード枠に入れるの！」

「シード枠？」

ウェーブライナーを待つ間、スバルとルナはトーナメントのことで話をしていた。

「そう、シード枠。このトーナメントでシード枠に入った場合は、いきなり準決勝から始まるの！ それより前は戦う必要が無くなるわけ！」

「へえ、凄いね。じゃあ頑張ろうかな」

それからしばらくすると、スタジアム行きのウェーブライナーがコダマタウンの乗り場に止まる。スバルとルナはスタジアムに行くため、それに乗り込んだ。

「あー……でも、今回はスバル君、優勝は無理かもしれないわね……」

「どっして?」

ウェーブライナーに乗ってから、ルナの表情は暗くなる。今回のトーナメントでは、スバルは優勝できないらしい。当然、スバルはルナの言っていることの意味がわからない。

「今回のトーナメントはね、いろんな人に注目されてるの。なんでも、このトーナメントで無敗記録を更新し続ける女の子がいてね。その子が、約1年ぶりに出場するみたいなの」

「無敗……なんだか面白そうだね。僕、その人と戦ってみたいよ」

「そう……じゃあ勝ち進むしかないわね！ 私も応援するから、頑張りなさいよっ！」

(言えない……その子が、今まで全試合を3秒以内に終わらせてることなんて、今のスバル君に言えるわけない……)

「さあ着いたわ！ ここがウェーブバトルスタジアム！ 名前の通り、ウェーブバトルをするために作られたスタジアムよ！」

「広いね、コダマ小の倍くらいかな」

スバル達の目の前にある白い壁で作られたドーム状の建物がウェーブバトルスタジアム、今回のトーナメントの会場だ。

周りを見ると無数の観客と思われる人々が、スタジアムに向かって歩いている。日曜日ということもあり、観客の年齢層は大人から子供まで幅広い。

「大会参加者は正面の入口から。観客は観客用入口から。とりあえず、ここでお別れね。それじゃあスバル君、優勝目指して頑張りなさいよ！」

「うん、頑張るよ」

ルナが観客用入口からスタジアム内に消えていくのを見送った後、スバルは参加者用の入口からスタジアムに入る。

スタジアムに入ると、スバルは辺りを見回し始めた。無敗記録を更新し続けているのが誰なのかは知らないが、それらしい人を予想することはできる。

「……参加者は僕を含めて8人が……少ないなあ……」

「違いますよお？ まだ1人来てなくて、参加者自体は9人ですよ」

「その声は……波風さん！」

スバルの所に駆け寄ってくる少女が1人。コダマ小学校の前でスバルとぶつかったランだ。

「あはは、ランで良いですよお〜！ へえ〜、あなたも参加するんですかあ……じゃー私達、戦えるかもしれませんねー」

「そうだね、楽しみだ」

(……………！ そうだ、この子……………)

「……………ねえ、参加者は9人だから、今回はシード枠があるんだよね？ まさか……………」

「……………ふえっ？ わ、私は違いますよお。前回のトーナメントは参加してませんでしたしい……………今回は、あの人です。私、勝ち進んだら当たるんですよ……………はあ、1試合多くなるう……………」

「へえ……………じゃあ、お互い頑張ろうね！」

「はいっ」

その後間もなく、参加者の控え室にアナウンスが入る。

『 Aブロック1戦目、Bブロック1戦目の方は、ステージに集まってください』

「始まりましたね……………あのお、私達ですよお？ 一緒に行きましょうか」

「えっ、もう試合？ 早いなあ……………」

Aブロック1戦目にはスバルが、Bブロック1戦目にはランが、それぞれ入っていた。トーナメントはAブロックとBブロックの2つに分かれ、1回戦は各ブロックに2試合が割り当てられる。そして、各ブロック1戦ずつ試合を行うのだ。

「ランさんは、今までに何回くらいトーナメントに出てるの?」

「んー……わかんないですねー。でも、たくさん出てますよお? 去年はお母さんが病気で死んじゃって、全然出ませんでしたけど……」

「……ごめん、そんなことも知らずに……」

「良いですよお、謝らなくて。お母さんは天国で、私が頑張ってる所を見てるはずだから……お母さんのためにも、トーナメントに毎回参加すると決めたいですっ」

しばらく歩くと、スバル達は足を止める。今まで1本道だったのが、AブロックとBブロックで別々の廊下を進むようになった。Aブロックのスバルは右へ、Bブロックのランは左へ曲がって会場へ向かう。

『さあっ! 今年も始まりました、ウエーブバトルトーナメント春大会! 今回も司会は、匿名希望な私が務めさせていただきます! 文句あるヤツは、逆に私が文句言ってやるから出てこーいっ!』

(な、なんか変な司会だなあ……)

ステージに来ると、スバルはテンションアゲアゲな司会の喋る内容に苦笑いしていた。司会のくせに姿を現さず、名前すら明かさな

い。大会参加者も観客も、1度もその姿を見たことが無いという。ちなみに、その声から女性であることだけは判明している。

『じゃあ早速、1回戦行つとく!? Aブロック1戦目は、なんとおっ! 世界を何回か救ってくれたらしいロックマンに変身するって言われてる、星河スバル君だよ! すっごいねえ、みんなのヒーローが初参加だあつ!』

『なんかムカつく』

「ロック、ここは抑えて。ああいう司会だから大会が盛り上がるんだよ。何があっても、そう思わないとダメだからね」

ウォーロックはハンターV.Gの中で、込み上げてくる司会への怒りをなんとか押さえ込んでいた。そんなことも知らずに、司会はハイテンションで話を進める。

『次つ! そんなヒーロー(笑)の相手を紹介するよっ!』

『おい、(笑)ってなんだ』

「ロック、我慢だよ」

『ロックマンこと星河スバル君の記念すべき最初の相手は、ジェミニ・スパークに変身する双葉ツカサ君! なんと双葉君も大会初参加で、しかも星河君のクラスメイトらしいよおっ!!』

「っ、ツカサ君!!?」

スバルが立っている場所から少し離れた場所にスポットライトが

当たる。そこには、スバルもよく知っている緑色の髪の少年が立っていた。

「ツカサ君も出てたの!？」

「うん……そんなに驚いてるってことは、トーナメント表は見なかったの？ 最初は僕も驚いたけど、徐々にスバル君と戦えると思うと楽しみで仕方ないよ」

「トーナメント表……そういえば見てなかった……そっか、最初はツカサ君が相手かぁ……よし、負けないよ!」

「僕だつて!」

スバルとツカサの会話が終わると、ここで再びあのハイテンション司会が口を開く。

『良いねえ良いねえ！ クラスメイト同士の戦い、めちゃくちゃ楽しみだあつ!! ってか話しすぎじゃね!? もうBブロックは終わったらしいよっ! それじゃあ2人とも、電波変換しようか!』

「Bブロック、もう終わったんだ……じゃあツカサ君、僕達も始めようか」

「うん……」

スバルとツカサはハンターV.Gにトランスコードを転送し、ほぼ同時に叫んだ。

「電波変換!」

『イエーイ!!! バトルスタアアアト!!!』

スバルとツカサが戦っている時、ランはハンターV.G.の中のウィザードと話しながら廊下を歩いていた。

『ラン……ブランクを感じさせない、美しい勝利でした』

「いえいえ、天使様のおかげですよ。でも、今回のバトルタイムは4.6秒……やっぱり、少し戦わないだけでも腕は鈍るんですねえ……」

『復帰戦で5秒を切っただけでも良しとしましょう。焦らず、ゆっくり……以前のあなたを取り戻しなさい……』

ランのウィザードは、金色の光を放つ白い電波の身体と水色の瞳、大きな白い翼が特徴。優しく微笑みながらランと話している。その姿が天使のようにも見えることから、ランはそのウィザードのことを「天使様」と呼んでいるようだ。

『それで、ラン……今回の大会、悪意のある者も参加しているようです。気をつけなさい……』

「はぁい。悪意、かぁ……大会を潰しに来たりしたら怖いねえ。何が目的なんだろう……」

『いざとなれば、私達が排除するまで……私達なら、負けることは無いでしょう』

「そーだねー……よし、次も頑張るよおっ！ 目指せ、バトルタイム3秒以内！」

第4話 ジェミニ・スパーク

ツカサが電波変換するジェミニ・スパークは、白いジェミニ・スパークと黒いジェミニ・スパークの2人がいる。白はツカサの人格、黒はヒカルの人格が変身したものだ。一見2対1のようにも見えるが、ジェミニ・スパークは2人で1人。白と黒の2人が合わさって初めて、1人分の力を発揮できるのだ。

「ジェミニ・スパークは2人の連携が凄かった……いきなり強い相手と当たっちゃったなあ……バトルカード、ウイングソード！」

スバルはバトルカードを使い、両手に鳥の翼に似た形の銀色の剣を装備する。スバルは、相手が2人いる以上、武器も2つあった方が良く考えていた。

「行くよ、ヒカル」

『……エレキソード』

ツカサは左腕が、ヒカルは右腕が、それぞれ指先から電気を放つ武器の腕に変化している。2人はその指先から電気を放出して剣を作ると、ほぼ同時にスバルの方へ走り出す。

「僕らの連携、キミに崩せるかな!？」

ツカサがスバルの前で電気の剣を振ると、ヒカルは進行方向を変えてスバルの背後に回り込み、そこで電気の剣を振る。それに対して、スバルは両腕の剣で2人の攻撃を受け止めた。

「前より速くなってるね……でも、強くなってるのはツカサ君だけじゃないよ!」

『チツ……!』

スバルは受け止めていた2つの剣を跳ね返すと、両腕の剣でヒカルを2回斬りつけた。その後、反撃を受ける前にツカサ達から離れる。

「バトルカード、ツインスナイパー!」

さらなる追撃のため、スバルはバトルカードを使う。するとスバルの頭上に電気の弾丸が2発現れ、ツカサ達に向かって1発ずつ飛んでいく。

「エレキシールド!」

『リフレクトプラス!』

ツカサが目の前に巨大で丸い電気の盾を作り出し、さらにヒカルがその盾に黒い電気を当てる。その盾はスバルが放った電気の弾丸を受け止め、スバルの方に跳ね返した。

「バトルカード、リフレクトミラー!」

スバルも負けずに次のバトルカードを使う。これによりスバルの目の前に現れた縦長の長方形の鏡は、跳ね返された電気の弾丸を受け止めてツカサ達の方へ跳ね返す。

「クツ……そんなもの、また跳ね返して……ッ!？」

「何……!?!？」

再び電気の盾で防ごうとするツカサ達。しかし、スバルが跳ね返した弾丸は電気の盾を貫き、ツカサとヒカルに1発ずつ命中した。

「……そうか、リフレクトミラー……あいつで跳ね返した攻撃は、威力が倍になる……弾丸の攻撃力が、俺達のエレキシルドの防御力を上回ったってことだな……」

「やっぱり、スバル君はバトルカードの扱いに慣れてるなあ……ヒカル、まだ行けるよね？」

「当たり前だ!」

ツカサとヒカルは互いに背中を合わせ、同時に武器化した腕も合わせた。そして、その指先をスバルに向けて電気を溜める。

「来る……あの2人の必殺技……」

「ネオ・ジエミニ……」

「サンダアアッ!」

武器化した指先から、レーザー状の電気が放たれる。スバルの知っているジエミニサンダーは一直線にしか進まないため、スバルは攻撃を避けようと上に大きく跳ぶ。しかしツカサ達が放ったのは、スバルの知っているジエミニサンダーではなかった。

「…………ツ!?」

『な、なんだあ!?!?』

ジェミニサンダーの軌道を見て、スバルとウォーロックは驚いた。一直線にしか進まないはずのジェミニサンダーが、スバルを追って進行方向を変えているのだ。

「僕達が新たに編み出した必殺技……狙った相手1人を追い続けるジェミニサンダー……」

『ネオ・ジェミニサンダー!?!』

「クツ……バトルカード、マジックウォール!」

スバルがバトルカードを使うと、スバルとジェミニサンダーの間に、煉瓦で作られたような見た目の正方形の白い壁が現れる。その壁はジェミニサンダーを受け止め、消滅させた。

『今度は、どんな攻撃でも相殺する壁を出すカードか! へっ、面白いじゃねえか……ここに来て正解だったな、ツカサ!』

「そうだね、さっきから楽しくて仕方ない! これが、ウェーブバトル……!」

スバルとツカサ達の戦いは、まだまだ続く。

『一般人は、やはり弱いな……』

「……なあ、アリエス。お前は、何が目的なんだ？」

控え室で、ウィザードと話す少年がいた。この少年はBブロック1回戦の2戦目に割り当てられていて、控え室のモニターからスバル達の戦いの様子を見ていた。しかし今は、ウィザードと話すためにモニターから目を離している。

少年は白い半袖シャツに黒い長ズボンという服装で、短めの黒髪と茶色の瞳が特徴。曇った目で、ハンターV.G.の中にいるウィザードをじっと見ている。

『お前が知る必要は無い……お前は、私の言う通りに動けば良い……見返してやりたいんだろ？ お前の夢を笑うヤツらを……』

「そうだ……みんなは笑ってるけど、僕は本気なんだ。本気で、宇宙飛行士になりたいんだ……みんなが笑うのは、僕が弱いからだ……僕が強ければ、みんなは僕を認めてくれるんだ……！」

『そうだ……この大会は私の目的を果たすだけでなく、お前の強さを証明することだってできる……自信を持って、カイト……お前は、強い！』

第5話 多くの謎

「サンダーバレット！」

「バトルカード、レイブレイド！」

バトル開始から30分以上が過ぎても、スバルとツカサ達の戦いは続いていた。

ツカサが武器化した指先から撃ち出した小さな電気の弾丸を、スバルは光の剣で斬ることで打ち消した。

「攻撃と防御の両方に使える、レイブレイド……スバル君、防御は完璧だね……これは、体力のある方が有利だ……」

『ツカサ、もうバテちまったか？』

「そう言うヒカルだって……もう少し、体力をつけておくべきだったね……」

ツカサとヒカルの体力は、限界に近づいていた。それに対してスバルは、まだまだ余裕がありそうだ。

「僕はツカサ君とは比べものにならないほど戦ってる。だから、体力は僕の方が多いんだ……バトルカード、セイントキャノン！」

スバルはバトルカードを使い、左腕を大きな白いキャノン砲に変える。猛スピードで一直線に進む光を放つセイントキャノンなら、

今のツカサ達には確実に当たる。勝利を確信したスバルが攻撃を繰り出そうとした、その時だった。

「これで……ッ!？」

「な、なんだ……!？」

『壁が……!!!』

Aブロックの試合会場とBブロックの試合会場を仕切る壁が、大きな音を立てて壊れた。スバル達が驚いていると、壁に空いた大きな穴から1人の電波人間が姿を現す。

『……失礼。必要以上の力を出してしまったか……Aブロック1戦目の諸君、怪我は無いかな?』

「だ……誰だ!」

明らかに普通の電波人間ではない。そう考えていたスバルは思わず声を上げる。すると、Bブロック側から歩いてきた電波人間はすくなく口を開いた。

『Bブロック2戦目の者だ。名はアリエス・ブレイブ……』

『アリエス……!?!? テメエ、FM星人のアリエスか!?!?』

『ほう……その声はウォーロック……やはり、お前だったのか……』

その電波人間は、ウォーロックも知っているFM星人だった。白いアーマーを胴体、両腕、両足に装備し、頭の左右には渦を巻いた

ような形の黄色い角が1本ずつ付いている。また、指先は鋭く尖って爪のようになってる。

『FM星人が、今さら地球に何しに来た!』

『お前が知る必要は無い……私は、私の目的を果たす。それだけだ……』

「……そうだ、司会者さん! さっきから、なんで黙ってるんですか! こんな、壁まで破壊したのに……!」

スバルは司会が黙り込んでいることを疑問に思い、それを本人に尋ねる。するとAブロックの司会は、しばらくしてから言葉を発した。

『……まあ、良いんじゃない? アリエスみたいなFM星人がいたって。壁が壊されたって。トーナメント自体が中止になるわけでもないし』

「そ、そんな……あれ? 司会者さん、アリエスのこと知ってる……?」

『……えー、Bブロックの結果をお知らせします。勝者はアリエス・ブレイブこと白雲カイトさん。Bブロック2回戦は波風ランさんと白雲カイトさんが戦います』

その時、物静かなBブロックの司会が試合結果を伝える。Bブロックの試合も女性ということ以外は不明で、その姿を見た者はいない。

『波風ラン……聞いたことの無い名だ……面白い。このトーナメントというヤツは実に面白い。だが、相手が弱すぎる……次の相手は強いと良いのだが……』

アリエスは溜め息を吐きながら、Bブロックの試合会場の方へ歩いていった。

「……ロック」

『ああ……新手的FM星人だな。何しに来たんだ……それより、今はツカサとのバトルだ』

「あー……そのことなんだけど……僕達、降参するよ」

スバルが戦闘を再開しようとした時、ツカサは電波変換を解いてから「降参する」と言った。

「……え？」

「やっぱり体力が、ね……もうまともに戦えそうにないから、降参するよ。少し残念だけど……」

『うおつとお！？ 双葉君が降参しちゃったぞおつ！？ つまり、このバトルは星河君の勝利！ 星河君は2回戦進出だあつ！』

(うわつ、最初のテンションに戻ったよ……)

スバルは苦笑いしながら電波変換を解除し、すぐにツカサの側に駆け寄る。

「ツカサ君、本当に良いの？」

「うん。新たな課題を見つけられることができたし、スバル君と戦えたから。じゃあ、僕は帰るよ。頑張ってね、スバル君」

ツカサはスバルに向かって手を振り、会場から去っていった。

『えー、ここで重要なお知らせだよっ！ Aブロック2戦目の椎名さんと志場君が棄権しちゃった！ 参っちゃうよねー、だから星河君は一気に決勝まで行ってもらいます！ Bブロックの2回戦とシード戦は見といたら良いんじゃない！？ どうせ暇なんですよー！』
『？』

「な………何、この急展開？」

『こいつはラッキーだな。戦う数が減るのは気に食わねえが、これでランのバトルが見られるじゃねえか』

「そう、だけど………」

(さっきのFM星人といい、司会者さんといい、棄権した人といい……この大会、何かがおかしい………気のせいだと良いけど………)

第6話 天使と牡羊

『では、Bブロック2回戦を始めます。この2回戦では、波風ランさんと白雲カイトさんのバトルとなります。不正をせず、正々堂々と戦ってください』

Bブロックの試合会場では、2回戦が始まるうとしていた。スバルは、観覧席で合流したルナと並んで座っている。

「スバル君……あのカイトって人、様子がおかしくない？」

「確かに、さっきから表情も変えないでランさんの方を見てるね……」

『……？』

(こっちに近づいて来る波長、これは……！)

スバルとルナがカイトのことを気にしている時、ウォーロックは別のことを気にしていた。まだ遠いが、この会場に向かって来ている電波体がいるようだ。

「あら？ あの子、何か話してるわ」

「ランさん……？」

「白雲さん、でしたっけ？ 今日にはよろしくお願いしますねえ」

「……キミは良いよね、そんなに笑っていられて……」

「ふえ？ 何か言いましたかあ？」

観客の声で、カイトの呟くような声はランの耳には入らなかった。

「キミ、夢はあるかい？」

「夢？ 私は……絶対負けないウェーブバトラーになることですね。死んだお母さんを、喜ばせたいから……みんな応援してくれるから、なんだか頑張れそうな気がしますっ」

「応援、か……良いよね、応援してくれる人がいて……僕なんか、笑われてばかりだ……僕が弱いから、みんなは僕の夢をバカにする……叶うわけないって。でも、もう笑わせない。僕は強くなった……僕は、強いんだああっ……！」

その時、カイトの身体が白い光に包まれ、次第に姿を変えていく。そして数秒後には、ついさっき壁を破壊したアリエス・ブレイブへの電波変換が完了した。

『さあ、お前も電波変換しろ。カイトと……私と、勝負だ！』

「この人、電波体に身体を乗っ取られてる……！？ 天使様！」

『悪意のある電波体と見て、間違いありませんね……ラン、全力を』

持って勝ちなさい』

ランは軽く頷くと、ハンターV.G.にトランスコードを転送する。そして、ハンターV.G.を着けた右腕を掲げて叫んだ。

「トランスコード047、ステラ・エンジェル！」

ハンターV.G.が放出する金色の光が、ランの全身を包み込む。その眩しい光で、スバルとルナも含む観客の全員が思わず目を閉じてしまった。

『ほう、シンクロ率は97パーセントか……この戦い、なかなか楽しめそうだな……』

アリエスは目を閉じながら、ラン達の電波変換のシンクロ率を測っていた。そうしている間にランの電波変換は完了し、金色の光も完全に消えた。

「……あれが、ランさんの変身した姿……」

「か、かつこいい〜……！」

スバルとルナは、既に変身したランの姿に魅了されていた。それは1回戦でもその姿を見ていた他の観客も同じで、全ての視線はランに向けられていた。

茶色だった髪は金色になり、リボンは光の輪に変わっている。目は水色のバイザーで守り、白い身体に銀色のアーマーを装備し、胸部全体、両腕の肘から先、両足の膝から下を覆う。背中からは金色の光を放つ白い翼が生えていて、右手には全体が銀色の両刃の長剣

を持つ。また、腰に大きな白いマントのようなものが着いていて、下半身の後ろ側を隠している。

「天使様。一気に決めます」

『そうなさい……』

ランは深呼吸を繰り返しながら、右手に持つ剣を構える。さっきまでの、頭のネジが数本抜けているようなランの姿はどこにも無い。

『……面白い。さあ、どこからでも』

「っ！！」

アリエスが喋っている途中、ランは姿を消した。その直後だった。

『……ッ！？』

ランがアリエスの後ろに姿を現すと同時に、アリエスは右脇腹を押さえながら体勢を崩した。

『なっ……なんだ、何が起きた……！？』

「硬い……すみません、天使様。一撃で仕留められませんでした……」

『あの電波人間の防御力、なかなかのものですね……一撃で終わらなかつた場合の、その後の戦い方は教えてあるはず……覚えてますか？』

「はい。天使様の教えを忘れることなど、絶対にありえません……」

ランはアリエスの方を向き、剣先をアリエスに向けて呼吸を整える。

「ククク……面白い。面白いぞ……我が名はアリエス！ おひつじ座のFM星人だ！ 我が目的のためには、観客どもの負のエネルギーが必要！ 目的を果たすためにも……お前を倒す！」

「一撃で仕留められなかった場合……いつまでも引きずらず、その後も全力を持って！ 戦いの主導権を握り続ける！！」

第7話 負のエネルギー

「どこの誰だか知りませんが、悪いことを考えてるなら黙ってられません。私が、あなたを止めてみせます！」

ランはアリエスへの先制攻撃に成功したが、アリエスは高い防御力を持っているようで、その攻撃が致命傷となることは無かった。

それからランは一旦呼吸を整え、剣を構えながらアリエスと話し始める。

『ふん……勝手にすれば良い。私の目的はトーナメントで優勝することではない……観客から負のエネルギーを集めること、そして力イトの強さを人々に教えてやること』

「……それが、目的ですか……負のエネルギーというのが何かは知りません。でも、なんだか良いものとは思えません」

『だろうな。悲しみや恐怖といったマイナスの感情が生み出すエネルギーだ、お前達人間にとっては良いものではない。だが私達にはそのエネルギーが必要だ。この大会というヤツは人がたくさん集まるから……負のエネルギーを集めるのに、ちょうど良いんだ』

「恐怖……ますます邪魔したくなってきました。いざ勝負です！」

『フツ……我が力、思い知るが良い。ラッシュランスー!!』

アリエスが右手を頭上に伸ばすと、試合会場の床から巨大な角が

何本も突き出てくる。それはランを狙うわけでもなく様々な方向に伸びていて、観客席の方にも何本か届いている。

「うわあっ!?!? こっちまで来たぞ!?!?」

「あつ! 観客のみなさんが……今すぐやめなさい!」

『負のエネルギーを集めるのが目的と言ったはずだ!』

「くっ……司会者さん! 黙ってないで観客を避難させてください!
! それかアリエスを強制退場に……司会者さん?」

ランの声は聞こえているはずなのに、Aブロックの司会もBブロックの司会も何も言わない。ランがそれを疑問に思っていると、Aブロックの司会が言葉を発した。

『……観客は逃がさないよ。出入口は全て塞いだ。負のエネルギーを集めるためにも、人は減らしたくないんだよね』

「し、司会者さん……!?!? さっきから、何か変です! あなた、なんなんですか!?!?」

『バトル中だけど……仕方ないか。良い機会だし、自己紹介でもしておこうかな』

その時、アリエスは大きな角による攻撃を中止し、全ての角を消滅させた。それから数秒後、スタジアムの天井付近が白く光る。

「……………!?!?」

「やあやあ、みんな元気かな？ 司会者様の登場だよっ」

「ごめんね、アリエス……バトル中止させちゃって」

『気にするな。まだ始まったばかりだ』

スタジアムの天井付近の光が消えると、そこには刃が付いた銀色のホウキに跨がる2人の少女がいた。

ホウキの前の方に跨がる金髪ストレートの少女は、セーラー服を彷彿とさせるアーマーと短めのスカート、右側に羽飾りの付いた青いバイザーが特徴。

ホウキの後ろの方に跨がり、金髪の少女に抱き着いている茶髪ポニーテールの少女は、黒いアーマーと短めのスカート、左側に羽飾りの付いた青いバイザーが特徴。また、両腕の肘から手首までを覆う装甲と、胴体を覆うアーマーの背中部分には、それぞれサメの背ビレに似た形の黒い刃が付いている。

「だ、誰ですか!?!」

「Aブロック司会のアリス!」

「Bブロックの司会、董だよ」

(し、司会!?! あんな小さな女の子が……?)

ランは、ホウキに跨がって浮いている2人を見て驚いていた。トナメントの司会だというのに、その少女2人は明らかにランより年下なのだ。

「ネタばらししちゃうとね？ 今年から、このトーナメントは全て私達が開くものになったの。前までのスタッフさんや司会者さんはー、お星様になりましたー」

「抵抗する方が悪いんだよ？ おとなしくすれば、命だけは助けてあげたもん」

「まさか、トーナメント全体を乗っ取るなんて……」

「波風さん、まだアリエスとの戦いは終わってないよ？ あなたの相手は私達ではなくアリエス。目の前の敵を見たら？」

董がアリエスを指差すと、ランも視線をアリエスの方に動かす。

「さっさと決めてしまいます……！」

『私は女が相手でも手加減しない。だが、女を傷つける趣味は無い。矛盾しているようだが、要するに……お前と真面目に戦う気は無いんだ！』

アリエスは再び右手を上には伸ばし、巨大な角を床から生やして観客を襲う。

「あぁっ……」

『観客を守りながら戦っても良いが……無敗記録は消え去るぞ？』

「あなたに……用は…… ツー！！」

ランは一瞬で姿を消し、その直後にはアリエスの後ろに姿を現した。その数秒後、アリエスは再び体勢を崩す。

「……ありません」

『ぐ……あ……っ！』

「おおー……アリエスなら、もう少し行けると思ったんだけどなあ……仕方ない。アリエス！ 一旦退きなさい！」

アリエスの指示に従い、アリエスはゆっくりと立ち上がって会場から去っていった。それを見送ってから、アリエスは視線をランに向ける。

「その戦い方は悪くない。でも上には上がいるってこと、知っておいた方がよいね……次のシード戦、実は私なんだ。ちょっとだけ遊ぼうね」

その後、アリエスは董とともに会場から去っていった。恐らく司会として喋っていた部屋に戻ったのだろう。

「……天使様、少しだけ休憩しますか？」

『ええ、そうですね……今のうちに、星河さん達の安否確認も済ませておきましょう』

ランは翼を使って空中に舞い上がり、観客席にいるスバルとルナの前まで移動する。

「あの、スバルさん……大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。それより驚いたよ！ まさかランさんが、無敗記録を更新し続けてる人だったなんてね！」

「えへへ……天使様がいたからこそその無敗記録ですよ……」

「天使様？」

スバルが首を傾げると、ランの隣にウィザードが現れる。

『初めまして。私がランのウィザード、名前はステラと言います。以後、お見知り置きを』

「天使………あつ、よろしく。僕は星河スバル。こっちは友達の白金ルナさん」

(いきなり名前で呼ばれると一瞬ドキッとするわね………やっぱり委員長って呼ばれる方が良いわ)

「それで……」

ルナが顔を赤らめていることにも気づかずに、スバルはラン達と話し続ける。

「さっきの女の子、なんだったの？」

「アリエスの仲間みたいでした。あと金髪の方は、シード枠みたいですよ。あんな人、大会では1度も見たことなかったのに……」

「じゃあ、さっき控え室で見た女の子が……ランさん、気をつけて

ね

「はい……では、お邪魔しました」

スバルとルナに向かって軽く手を振ると、ランは観客席から離れて控え室に戻っていった。

「お邪魔、しました……？」

第8話 終止符が打たれる時

『……では、これよりシード戦を行います。この試合の勝者は決勝に進出、Aブロックの星河さんと戦います』

ランとアリエスの戦いが終わってから数分後、Bブロックの会場ではシード戦が始まるうとしていた。

会場には、既にランとアリエスの姿があった。お互いに電波変換した状態で、相手の顔をじっと見ている。

『1回戦、2回戦と勝ち抜いてきた波風さんと、シード枠のアリスさんの試合となります。不正などが無いよう、正々堂々と戦ってください』

「天使さん……あなたの無敗記録も、ここで終わりだよん」

「正義は、悪には負けないんです……絶対に倒して」

『その少女とは戦うな!!』

「……え?」

ランとアリスがバトルを始めようとした、その時だった。静まり返った会場全体に、誰かの声が響き渡る。

「この声は……!」

その声に聞き覚えのあるスバルは、後ろを振り向いて声の主を探
す。すると、観客席の後ろの方に緑色の光を放つ電波体を見つけた。

「ケフェウス！」

「だ、誰？ ……あの電波体のこと？」

「FM星の王様だよ。どうしてここに……」

スバルやルナ以上に、ランが驚いていた。いきなり現れて、突然
「戦うな」と言ってきたのだから、驚くのも無理は無い。

「た、戦うなって……どうして!?!」

『お前が勝てる相手ではない！ そいつは、コメットは……アリエ
スとは比べものにならないほど強いんだ!』

『どうやら彼は、先程の戦いを見ているようですね……どうしま
すか、ラン？ 戦うな、とのことですが……』

ステラの問いに対してランはしばらく考え込み、数秒後には軽く
微笑みながら答える。

「……挑発されっぱなしは嫌です！」

『そうですか……わかりました。行きましょう』

結局ランは、ケフェウスの言葉を無視して1歩前に出る。それを
見たケフェウスは、焦りながらも諦めずに大声を出す。

『何をしている！ やめろと言っているのが聞こえないのか！？』

「ケフェウス！」

『す、スバル！ お前も何か言ってくれ！ コメットは本当に強いんだ！』

スバルに話し掛けられると、ケフェウスはスバルにランを止めるのを手伝うように言う。しかし、スバルは首を横に振った。

「……戦わせてあげて。ランさんも、相手の子が強いことぐらい知ってるはずだよ。でも、ランさんにもプライドがある。無敗のランさんが戦わずに逃げるなんて、できるわけが無い」

『……ああ、わかった。静かに見守るとしよう。お前も見っておけ、スバル。コメットの力を……』

ケフェウスが黙り込んでから、改めて司会の董は声を出す。

『えー……では、試合開始！』

董が「試合開始」と大きな声で言っても、ランとアリスは動かない。強い者同士の戦いとなると、ほんの一瞬のスキが命取りとなるため、お互い下手に動けないのだ。

しかし、この2人には大きな違いがあった。

「……」

「」

ランは真剣な目でアリスを見ているが、アリスは目を閉じて鼻歌を歌っている。

「……………どしたの？ 眠くなっちゃった？」

「クツ……………ここで踏み込むと負ける……………落ち着いて……………」

どう考えてもスキだらけなアリスだが、実際は全くスキが無いように、ランは踏み込めずにいた。

「……………一瞬のスキを突けば勝てるって、思ってるんだね？ じゃあ、どうぞ？ やってごらんよっ」

アリスはランに背を向けて両手を左右に軽く伸ばし、足も肩幅くらいに開いた。わざとスキだらけな状態になることで、ランの攻撃を誘っているようだ。

『……………ラン、行きなさい』

「はい……………」

ランは深呼吸を繰り返しながら剣を構え、アリエスの時と同じように目に見えないスピードの低空飛行で移動する。そしてアリスが攻撃範囲内に入った所で剣を振り、そのまま横を通り過ぎていった。最高スピードで移動しながら攻撃するため、ここまでで1秒程度しか経過していない。

「……………ッ！？」

「……王様の言うこと、聞けば良かったんだよ」

「なん……で……!?!」

ランは、アリエスを2度に渡って斬りつけたものと同じ攻撃を繰り出した。しかしアリスは全くの無傷で、逆にランが反撃を受けていた。いつの間にか、ランの持つ剣がラン自身の右胸を貫いていたのだ。

「どーしようねえ、出入口は全部塞いじやったから……お医者さん入れないねえっ!?!」

『アリス……助けてやろう。まだ、この少女に死なれては困る』

「コメット……はいはい、わかりましたよー」

アリスは溜め息を吐きながら、ランの胸に刺さった剣を抜いて放り投げる。その後、傷口に手を当てて小さな声で何かを呟いた。

「……………つと。これで、よしっ!」

アリスが手を離すと、ランの傷口は何も無かったかのように消えていた。それから間もなく、ランはゆっくりと上半身を起こす。

「あ、起きた? 頑張ってたけど、結局あなたは私の挑発に乗っちゃった……完全に、あなたの負けだね」

「そんな……! ここまで頑張ったのに……」

「まあ、また次から頑張りなよ。じゃあね、無敗だった天使さん」

ランに向かって手を振ると、アリスは会場から去っていった。

「ま、負けた……私が……!？」

第9話 FM星人

「負けた……」

『ラン……控え室に戻りなさい。そこで、話があります』

変身を解いた後も、ランは試合会場の真ん中に座り込んでいた。ステラはそんなランの前に現れ、控え室に戻るように言う。

「天使、様……？」

『……早く戻りなさい』

「は、はい……」

ランは急いで立ち上がり、駆け足で控え室に戻っていく。その後ろ姿を、スバルは心配そうに目で追っていた。

「ランさん……」

『……あの少女には、悪いことをしてしまったな……余がもう少し早く来ていれば、あるいは……』

「……ケフェウス。アリエスなんてFM星人、今まで会ったこと無いよ……一体、何が起きてるの？」

ランの姿が見えなくなると、スバルはケフェウスにアリエスやコメットのことについて尋ねる。するとケフェウスは、少し黙り込ん

でから問いに答えた。

『……コメット達は、地球を侵略するつもりらしい。アリエスとコメットを含めて6人いる。それだけではない。アンドロメダのカギも、今はコメット達が持っている』

「アンドロメダのカギ……！　じゃあ、まさかアリエスが言っていた負のエネルギーって……」

『アンドロメダを復活させるためのエネルギー……それがカギに一定量溜まると、アンドロメダが復活するんだ』

『おい、FM王』

その時、スバルのハンターV.Gからウォーロックが出てきた。どうやらケフェウスに話があるようで、相手の返事も待たずに話を進める。

『その裏切り者どもは、今どこにいる？　コメットはここにいる。アリエスは逃げちまった。他のヤツらは？』

『やめる。お前達では勝てない。どういうわけか、裏切り者の全員が波長の合う人間を見つけている。コメットのオペレーター少女もそうだ。ウイザード単体なら、勝てたかもしれないのだが……』

『……別に構わねえよ。俺とスバルが、そのバカな裏切り者どもを倒す！』

『無理だ。コメット達の實力は、お前達が今まで戦ってきた者の比ではない……そう言っても、聞かないか。わかった。余は、これ以

上何も言わない。この件は、お前達に任せても良いか……？』

ケフェウスが尋ねると、スバルとウォーロックは力強く頷いた。

『……ヤツらは本当に強い。半端な気持ちで挑まないことだ……』

「わかった。忠告ありがとう、ケフェウス」

『地球は俺達が、何度でも守ってやるぜ！』

『……では、余はFM星に戻る。コメットのヤツ、FM星に電波ウイルスをバラ撒いていったようだからな』

その後、ケフェウスはFM星に戻っていった。スバルはそれを見送ってから電波変換し、観客席から試合会場に飛び降りる。今も会場の全ての出入口が塞がれているため、試合会場に行くには観客席から飛び降りるしかないのだ。

「ランさんの様子、見に行ってみる？」

『そっとしておいてやれよ。それに、あいつにはステラがいる』

「……うん」

その頃、控え室ではランとステラが話をしていた。

『今回の敗北は全て、私の判断ミスが原因です』

「そんな……天使様は何も……」

『だから……そんなに落ち込まないでください。確かに、あなたにとって今回の敗北はかなり大きいものです。しかし、それをいつまでも引きずっていたら、次の戦闘に響きます……』

ステラはランのことを心配していたが、どうやらランは落ち込んでいたわけではなかったようで、ステラに向かって微笑みながら口を開く。

「……さっきの子、すごく強かったですね……目標ができました」

『目……標……？』

「はいっ 私、あの子に勝ちたいです！ だから、もっと強くなつて……リベンジするんです！」

『ラン……そうですね、頑張りましょう』

ランとステラの会話が終わってから数分後、控え室にアナウンスが入る。

『間もなく決勝戦を始めます。試合出場者は準備してください』

スピーカー越しに話すのは、Bブロックの司会を務めている董だった。その声を聞くと同時に、ランとステラは控え室にあるモニターを見る。

『始まりますね……』

「はい……」

第10話 復讐の先にあるもの

『トーナメント春大会、決勝戦を始めます。Aブロックを勝ち進んだ飛び入り参加の星河さんと、Bブロックを勝ち進んだシード枠、アリスさんのバトルです』

司会の董が、改めてバトルする2人を紹介する。その話を聞いて、スバルは苦笑いしていた。

「やっぱり飛び入り参加だったんだ……」

「気にすることは無いよ。アリエスとカイト君も飛び入りだから。それより今は、決勝戦に集中しなよ」

アリスは楽しそうに微笑みながら、スバルに話し掛ける。それでもスバルは警戒を解かず、気になっていたことをアリスに尋ねる。

「戦う前に聞かせて。どうしてコメント達は、みんな波長の合うオペレーターを見つけてるのか……ケフェウスから聞いたんだ。コメント達がここに来たのは、一昨日のことだって……この広い地球の中から、たった2日で波長の合う人を見つけるなんて、まず不可能だ！」

「ふうん……コメント、答えてあげて」

アリスはハンターV.Gから、ホウキを持った人型の電波体を出した。

『私がコメントだ……では、質問に答えよう。まず、私達が地球に来たのは今回が初めてではない。1ヶ月前に、既に来ていたんだ』

「1ヶ月前……じゃあ、その時に……？」

『ああ。それぞれが、波長の合う者を見つけた。その後、見つけたオペレーターを地球に残してFM星に帰り、そこで待ったんだ。この、トーナメントが開かれる時期まで……！』

ここまでが、スバルの質問に対するコメントの答えだ。しかしスバルは、また別の質問をする。

「……もう1つ。なぜFM星に電波ウイルスをバラ撒いた！ FM星を襲う必要なんか無いじゃないか！」

『電波ウイルス……？』

「地球だけでなく、FM星まで襲うなんて許せない……絶対に勝つ！」

スバルに睨みつけられても、コメントの表情は変わらない。そのままコメントはアリスのハンターVGに戻り、アリスと話し始める。

『……始めよう』

「地球のヒーローさんに、敗北と絶望のプレゼントを…… 電波変換。アリス、オン・エア！」

アリスは電波変換すると、早速ホウキに跨がって空中を飛び回り始める。渦を描くようにして少しずつ高度を上げ、ある程度高い場

所まで来るとピタリと止まった。

「コメット・ギャラクシー……行きます！」

『飛べるのか……面白いじゃねえか！ スバル、相手が女だからって手加減すんなよ！』

「わかってる。さあ勝負だ！ バトルカード、ライトアロー！」

スバルはバトルカードを使って左腕を光る弓に変化させ、アリス目掛けて光る矢を放つ。

『アリス、彼は先程の少女とは違う。最後まで油断するな』

「任しといて！ キラボシソニック！」

アリスは刃が付いている方をスバルに向けるようにしてホウキを持ち、落下の途中で大きく振る。刃は白い光を放っていて、その光の残像が巨大な三日月型の衝撃波となり、地上にいるスバルに襲い掛かる。

「いきなり凄いな……バトルカード、マジックウォール！」

スバルは再びバトルカードを使い、どんな攻撃でも1度だけ打ち消す壁でアリスの巨大な攻撃を防いだ。

『そういえば、あんなバトルカードも持っていたな……』

「へえ……これじゃあ私、負けちゃうかもー ……なんて、ふざけてる場合じゃないね。よく考えたら、邪魔者を排除する良い機会

だよ！ よーし、勝つぞー！」

先程の攻撃のために地上に降りていたアリスは、ホウキを両手で強く握り、スバルがいる方へ走り出す。やはり地上での接近戦も可能らしい。

「やあつー！」

「バトルカード、ウイングソード！」

アリスが振り下ろしたホウキを、スバルはバトルカードで装備したソードで受け止める。

「えへへ……初めましてだね。私はアリス……アメリッパで生まれて、すぐにニホンに来た。ちなみに10歳です。よろしく！」

「10歳の女の子が、どうしてコメントに協力してるのさ？」

スバルはアリスのホウキを受け止めながら、なぜコメントに協力しているのか尋ねる。すると、明るかったアリスの表情は一気に暗くなった。

「……憎いからだよ、大人達が……私が生まれてすぐにニホンに来たのは、親に捨てられたから。とても誰かに話せるような内容じゃないから、詳しいことは聞かないで。とりあえず、後から捨てられたことを知った私は、もう大人は信用しないと決めたわけ」

「……そのまま時が流れて、1ヶ月前……キミの前にコメントが現れたんだね……？」

「コメットは、私に復讐するための力をくれた。ついでに、この腐りきった世界も変えてやろうと思った」

「……復讐からは、何も生まれない……僕は、何かに復讐しようとする人を何人も見てきた。でも、その全員が最後には泣いていた……キミだって、同じ結果になる。だから、バカなことは考えない方が良い！」

スバルは、ホウキを受け止めていない方の腕に装備したもう一つのソードで、アリスの身体を斬りつける。

「うっ……」

「キミみたいな子供が、犯罪に手を染めちゃダメだ！」

「違う……犯罪なんかじゃない……私が正しいと思ったら、それは正しいことなんだよ！」

『アリス、もう何も話す必要は無い。敵を倒すことに集中するんだ』
アリスは小さく頷き、ホウキに付いている刃の先をスバルに向ける。

「私、負けないよ。あなたみたいな、幸せに包まれてそんな人には……」

第11話 友達

『ロックマン……その活躍は聞いている。地球を何度も救ったヒーロー……我々の計画の、一番の障害物……』

「コメット……あの人が、ここで仕留めた方が良いかな」

『……考えておこう。今は、勝つんだ』

アリスは小さく頷き、ホウキに跨がって再び空中に浮かぶ。

「コメットライト！」

次にホウキから手を放し、その両手を開いてスバルに向ける。するとアリスの側に青白い光を放つ星が複数現れ、それら全てがスバル目掛けて急降下を始めた。

「広範囲に渡る攻撃！ これなら、そう簡単には避けられないはず！」

「……！」

スバルはその場を動かさず、ギリギリまで星を引き付ける。広範囲に広がる攻撃でも、ギリギリまで待てば自分の所に集まってきて避けやすくなるのだ。

『よし……今だ！』

ウォーロックの合図と同時に、スバルは横に大きく跳ぶ。星による攻撃を全て避け、ここから反撃に出ようとしたスバルだったが……

「バトルカード……ッ!？」

「……戦う相手は、常に視界に入れておくべきなんだよ。戦闘経験なら私よりも豊富なのに、そんなこともわからないのかな？」

「ぐっ……」

アリスは、後ろからスバルの身体にホウキの刃を突き刺していた。その後、アリスがホウキを引き抜くと、スバルはその場に倒れ込んでしまう。

「……コメント、どうする?。」

アリスがコメントの名前を呼ぶと、コメントはアリスの隣に現れる。

『ふむ……このまま殺すのも良いが……やはり生かしておこう。この少年は、まだまだ強くなる』

「強くなった星河君を見てみたいんだね。わかった。董ちゃん!」

アリスは上を向いて董の名前を呼ぶ。すると、董は咳払いしてから喋り出す。

『えー……決勝戦、勝者はアリスさんです。おめでとございませう。では、優勝賞品を……』

「トロフィーと賞金だっけ。どっちも董ちゃんにあげるー！」

『トロフィーいらないから、賞金だけ貰うね』

「なぬっ!?!」

(まあ当たり前だな)

アリスと董のやり取りを見ながら、実体化しているコメットは溜め息を吐いていた。

『では、次は夏のトーナメントでお会いしましょう……出入口の口ツクは解除してあります。気をつけて、お帰りください……』

「……手当てくらはしてあげるよ。トーナメント以外の場所でも会えるかもね、星河君……」

アリスはランの時と同じようにしてスバルの傷を治し、電波変換を解いた後、会場から去っていった。

「なんて速さだ……」

『完全に気配を消してたな……今回は完敗だが、次は勝つぞ!』

「うん……!」

スバル、ルナ、ランの3人は会場の外で合流し、ウェーブライナー乗り場の前に来ていた。後から、ランもコダマタウンに住んでいることがわかり、3人一緒に帰ることにしたのだ。

「あ、あのお……さっきの決勝戦、見てましたよ？ 凄いですねえ、私は一瞬で負けちゃったのに……本当に、スバルさんは凄いです……」

「負けちゃったけど……そうだ、委員長。アリエスが観客席を攻撃した時、怪我しなかった？」

「え、ええ……大丈夫よ……」

「そっか……良かった」

それからしばらくすると、乗り場の前にウェーブライナーが止まる。スバル達3人はそれに乗り、コダマタウンへ向かう。

「……そうだ。波風さん、だったかしら？ 改めて自己紹介するわね。私は白金ルナ。スバル君のクラスメイトよ」

「私は波風ランです。えつとお……今年で11歳になります」

その時ルナは、ランの自己紹介の中の「11歳」という所に反応し、新たに質問する。

「11歳……5年生？ それとも6年生？」

「8月生まれなので、5年生だと思います」

「な、なんか微妙ねえ……」

「まあ、今は学校行ってませんからねえ……」

「ど、どうして?」

ルナが尋ねると、ランは窓から外を見ながら答える。

「……転校です。前の学校がある町から、コダマタウンに引っ越してきたのが先月のことで……来週から、コダマ小学校に通うんです」

「あら、そうなの? じゃあ、毎日一緒に登下校できるわね」

「ふえっ!? わ、私なんかが、良いんですかあ!?!」

「もちろんよ! 今日話したのも何かの縁ってことで、これからも友達として仲良くしましょうね」

ルナが笑顔を向けると、ランは口元を両手で覆い、その直後には涙を流していた。

「ええっ!? な、なんで泣き出すのよ!」

「あの……私……ずっと、友達いなくて……だから、友達って言うてくれるのが嬉しくて……」

「……寂しかったのね。私とスバル君には、いろんな友達がいるのよ! 身体は大きいくせに弱いのか、背が伸びなくて困ってるのとか! アイドルのミソラちゃんとも友達なんだから! みーんな、あなたの友達になるのよ?」

(ゴン太とキザマロ、なんか可哀相だなあ……)

スバルは隣で苦笑いしながら、ルナの話を黙って聞いていた。「身体は大きいのに弱い」のはゴン太、「背が伸びなくて困ってる」のはキザマロ。どちらもスバルのクラスメイトで、ルナの大親友だ。

「嬉しいです……天使様！　なんか私、すっごく幸せです！」

『良かったですね、ラン……』

その時、スバルのハンターV.Gからウォーロックが出てきた。

『……おい、お前のウィザードに会わせる』

「ロック！　いきなりそれは失礼だよ！」

「いえ、良いんです。やっぱり、天使様は大人気ですねえ……えっと、こうして……ウィザード・オン」

ランはハンターV.Gを前に出し、ステラを外に出した。すると、いきなりウォーロックとステラは何も言わず睨み合う。

『……』

「……で、天使様？」

『……ふう』

ステラは目を閉じて溜め息を吐き、もう一度ウォーロックの目を

見てから口を開く。

『そんなに私が珍しいですか？』

『ああ珍しいな。女のくせに、俺と同じくらいの戦闘能力を持つて
るみてえだからな』

『確かに、私は高い戦闘能力を持つバトルウィザードですが、あなたには負けますよ……やはり、最後は性別ですね』

悔しそうに俯くステラを見ても、ウォーロックは特に慰めたりはしなかった。そんなことをしても、恐らくステラは喜ばない。

『やっぱ、初めてランに会った時に感じた強い力は、気のせいじゃなかったか……なんか興味湧いてきたぜ。お前みたいなヤツは初めてだ！』

『惚れても無駄ですよ。私のガードを甘く見ない方が』

『そういう意味じゃねえし』

(なんか、良いコンビになりそうだなあ……)

ウォーロックとステラのやり取りを見て、スバルはそんなことを考えていた。

第11話 友達（後書き）

そろそろプロローグの前書きに書いた「作者の奇妙な企み」の内容
明かそうかな……

第12話 ワガママ天使

ウェーブライナーがゴダマタウンの乗り場の前で止まると、スバル達はウェーブライナーから降りて町全体を見渡す。毎日見る風景は、沈みかけた太陽でオレンジ色に染まっていた。

「ところで、波風さんの家はどこなの？」

「ランで良いですよ。私の家は……あそこですね。あの青い屋根の家……」

ランは自分の家がある方を指差す。その先にあるのは青い屋根の家、つまりスバルの家だった。

「ええっ!?!」

「……の、隣の黒い屋根の家です」

「……あ、ああ、隣ね……」

当然、スバルは驚いて声を上げてしまう。しかし、ランが実際に指差していたのはスバルの家の隣にある家だった。

「あれ？ スバルさん、どうかしましたかあ？」

「え？ ああ、うん……あの青い屋根の家、僕の家なんだ」

「本当ですかあ!?! 良かったあ……」

「…………良かった？」

ランの最後の一言に疑問を抱いたスバルは、そのことをランに尋ねる。

「良かったって、どういうこと？」

「私、この町に1人で来たんです。お父さんは仕事で忙しくて……隣に住んでるのが知ってる人で安心しました」

「家に、1人……」

ルナは微笑むランの顔を見ながら、小さな声でそう呟く。ルナの両親も仕事が忙しく、今も家にいないことが多い。家に1人でいることの寂しさを知っているルナは、どうしてランは笑っていられるのかと疑問に思っていた。しかし、それに気づかずにランは話を続ける。

「天使様、私って本当に運が良いですねえ　天使様に会えたし、友達ができたし……………これで、お母さんがいたら……………」

『ラン……………』

「今の私にとっては、天使様がお母さんです　だから大丈夫ですよ？」

心配するステラを安心させようと、ランはハンターV.Gの画面に映るステラに向かって微笑む。

『私は、あなたの母親にはなれません……私は……』

「……天使様？」

『いえ……ラン、ちょっと町を見て回ってきます。先に帰っていただきます。あと……ウォーロック』

ステラはハンターV Gの外に出ると、スバルの方を向いてウォーロックの名前を呼ぶ。すると、ウォーロックはスバルのハンターV Gから出てステラの目の前に現れた。

『なんだ？』

『ボディガードをお願いします』

『はあ！？』

ステラはウォーロックの右腕にしがみつき、そのままスバル達から離れていく。

『おい、待て！ 誰が付いて行くなって言った！？ って聞いてねえし。ラン！ なんとかしろよ！』

『特に忙しいわけでもないんでしょう？ なら来てください。それに……』

そこまで言うと、ステラは腕を引っ張ってウォーロックを前屈みにさせ、自分の顔をウォーロックの顔に近づけた。

『……あなたと、2人きりで話したいんです』

『何？ ……クソツ、なんだってんだ！』

ステラが「2人で話したい」と言うと、ウォーロックは抵抗するのをやめて大人しくステラに付いて行った。

「天使様、スバルさんのウィザードに興味津々ですねえ……無事に帰ってくると良いけど……」

「大丈夫だよ、ロックはそこまで凶暴なウィザードじゃないから」

「いえ、逆です。ウォーロックが、無事に帰ってくると良いけど……って意味です」

「……え？」

ステラは、ウォーロックを展望台前の広場まで連れてきた。近くに人や電波体の姿は無く、ステラが望むウォーロックと2人きりの状況となっている。

『おい、こんな所で何を話そうってんだ？』

『……あなたの全てを、私に見せてください』

『はあ？ どーいう意味だよ？』

ウォーロックの質問に答えないまま、ステラはウォーロックに近づく。なんとなく身の危険を感じたウォーロックは、ステラが近づくのに合わせて後退りする。

『お、おい、なんだよ。何か言えよ!』

『……逃げないで、止まっていてください。すぐに終わります』

『だから、まず何をするのか話せて!』

その時、ステラはその場で止まって溜め息を吐く。そして翼を広げ、低空飛行により一瞬でウォーロックの目の前まで近づいた。

『なっ……!?!』

『あなたの心を見たいのです……少し痛みますが、我慢してください!』

ステラがウォーロックの胸に手を当てると、その手がウォーロックの身体の中に入り込んでいく。その直後、電気を浴びせられるような激痛がウォーロックを襲った。

『ぐああっ!?! な、なんだ……テメエ、一体何を……!?!』

『我慢してください。こうしないと、私は他人を信じる事ができません。ランにも、同じことをしました』

『なん……だと……!?!』

それからしばらくすると、ステラはウォーロックの身体から手を

引き抜く。その直後には、ウォーロックを襲う激痛も無くなっていた。

『……あなたのこと、星河さんのこと、その他、あなた達の知り合いのこと……全て見せてもらいました』

『俺の記憶を、勝手に覗いたってわけか……それで？ 俺達を信じてくれるのか？』

『ええ……そうですね。まず謝ります。すみませんでした。話しても、すぐに理解してくれるとは思っていなかった……星でも見ながら、少し話しませんか』

ステラが展望台の方へ向かうと、ウォーロックもその後を付いて行く。そして、2人は展望台の上で再び話し始めた。

『……お前、なんで他人を信じられないんだ？』

『信じられないというより、知らない誰かと話すのが怖いんです。話を聞くのすら怖くて……でも今では、こうやって他人の話を聞くこともできるようになりました。今みたいに心を見ないと、まともに話すことはできないんですけどね』

ステラは悲しそうな表情を浮かべて俯く。すると、ウォーロックはステラの肩に手を乗せた。

『何があつたかは知らねえが……そんなに落ち込むなって』

『別に、そういうわけでは……私は……私は……ッ！？』

ステラが次の言葉を声に出すことを躊躇っていると、ウォーロックはステラの肩に乗せていた手を今度は頭に乗せて乱暴に撫でる。

『や、やめてください………』

『情けねえ顔してんなあ。カッコ良かったステラは、どこに行っちゃったんだよ!』

『……ラン以外の誰かが、ここまで私に近づいてきたのは、あなたが初めてです……ランの強運が、私にも移ったんでしょうか………』

ステラは頭に乗せられているウォーロックの手を両手で触り、下を向きながら微笑む。

『なんかワケありっぽいけど、俺には関係ねえよ。お前はスバルの家の隣に住む、スバルの知り合いのウィザード。ビビってないで仲良くしようぜ』

『……ありがとうございます』

第13話 お隣りさん

「……じゃあスバル君、また明日ね」

ルナが住む高級マンションの前には道路があり、スバル達は横断歩道の前で立ち止まっていた。そこでルナと別れると、スバルとランは自分の家がある方へ歩き始める。

「委員長さん、あんな高そうなマンションに住んでるんですね……」

「そのことに関して委員長は何も言わないし、周りのみんなも何も言わない。だからランさんも、あまり気にしなくて良いよ」

「ですよねえ。委員長さん、お金持ちのオーラを全く出してませんし」

「お、オーラって……」

それから数分後、スバル達は自分の家の前に辿り着いた。そこでスバルは、ランに1つ提案をする。

「そつだ。ランさん、今日は僕の家で」

「一緒に寝るんですか？」

「晩ご飯食べていかないかなーって思ったんだけど、どうする？」

「評価に値する見事なスルーですね。じゃあ、ご迷惑でなければ……」

ランは、仄かに顔を赤らめながら返事をする。それを聞いてから、スバルは自分の家の扉を開けてランと一緒に中に入っていく。

「ただいまー」

「おかえり、スバル……あら、初めて見る子ね。お友達？」

家に入ると、スバルの母親の星河あかねが迎えてくれた。そして、早速ランの存在に気づいた。話が聞こえていたのか、スバルの父親の星河大吾も、リビングから玄関まで歩いてくる。

「女の子か。こんな時間まで連れ回して、最後には自分の家に連れて来るなんて、なかなかやるなあスバル？」

「と、父さん！ そんなんじゃないよ……とりあえず、詳しいことはリビングで話すから」

スバルはランの腕を掴み、逃げるようにリビングの方へ歩いていった。

「全く、父さんは……あれ、ランさん？ どうしたの？ なんか落ち着かないみたいだけど……」

「……あ、ええ、はい……あの、なんでもないですっ！」

それから間もなく、あかねと大吾もリビングに来て椅子に座る。リビングには白いテーブルがあり、その近くに白い椅子が4つある

ため、全員が問題無く座ることができた。あかねと大吾、スバルとランがそれぞれ隣り合わせで、その2組が向かい合うように座っている。4人全員が座ると、スバルはランのことについてをあかねと大吾に話した。

「……そうか、隣に引越してきた子か」

「それも1人でなんて、大変でしょう？」

「いえ、大丈夫です……毎日いじめを受け続けるより、1人で暮らす方がマシです……スバルさん達と、友達にもなれましたし！」

「お隣りさんなんだから、私達を頼っても良いからね……それじゃあ話も済んだし、スバルの提案通りにしましょうか。ランちゃん、今日はウチでご飯食べていきなさい」

「本当に、ありがとうございます……」

ランが礼を言うと、あかねは微笑みながら台所の方へ歩いていった。

「……いじめ？」

あかねも大吾も触れなかった、ランがいじめを受け続けていたという事実。しかし、どうしても気になってしまうスバルは、そのことをランに尋ねる。

「……はい。天使様に出会う前は、外に出ると毎日のように……小聲の悪口とか、足を引っ掛けられたりとか、突き飛ばされて壁にぶつけられたりとか、階段から突き落とされたりとか、靴の中に画鋲

を溢れるほど詰められてたりとか、机と椅子が落書きされた状態で昇降口に置かれてたりとか……あっ、トイレの中で水を掛けられたこともありましたねえ」

「酷すぎる……原因とか、わかる？」

「いえ……学力とか見た目とか、その辺のことで羨ましがられたことはありましたけど……」

(……いじめの原因、わかったかも)

「まあ、とりあえず……ここにいれば大丈夫だろうけど、いじめられたら僕に言ってね」

「ふわああ……ほえ？」

スバルは「自分が守る」といった意味の言葉でランを元気づけようとする。しかし、その時ランは口を手で隠しながら欠伸をしていた。

「……話、聞いてた？」

「す、すみません！ 疲れちゃって……」

「良いよ。今日は……いろいろあったもんね」

ランが恥ずかしそうに顔を赤らめていると、あかねが台所から戻ってきた。

「眠いの？ じゃあお風呂沸いてるから、入ってきちゃいなさい。」

さっぱりするから!」

「え? でも、良いんですか? お風呂までお借りして……さすがに、そこまでは迷惑かと……」

『では、お言葉に甘えて使わせていただきます』

ランが断ろうとした時、タイミング良くステラが戻ってきた。ステラは腕を引っ張ってランを立たせ、廊下に出る扉の方へ連れていく。

「て、天使様! ダメですよ、迷惑ですう!」

『入れと言われて入らないのは、失礼極まりないことです。私も一緒にいきますから、入りましょう。今、ウォーロックがランの着替えを持ってきますから』

「んなつ!? ウォーロックさんは男性です! まさか、まさか……!?!」

『彼が持ってくるのは服だけです。男性に見られたくないものは全て私が持ってきています』

(天使様、だったら服も持ってきて……)

なぜステラが服だけ持って来なかったのか、疑問に思うランだった。それについて、ステラが理由を話すことは無かったという。

それから数時間後、入浴と食事を終えたランは玄関の前で幸せそうな笑顔を浮かべていた。それを見たあかねの顔にも、自然と笑みが浮かぶ。

「……あの、ありがとうございます。お食事だけでなく、お風呂まで……」

「良いのよ。それより身体が冷えちゃうから、早く戻りなさいね。1人なんだから、戸締まりにも気をつけること！」

「はあい！ では、失礼しますう！」

元気良く返事をした後、ランは隣にある自分の家の中に入っていた。そして鍵が閉まる音を聞くと、あかねも家の中に入る。

「凄いわねえ、ランちゃん……独りぼつちなのに、ずっと笑ってるわ」

「独りぼつちじゃないよ。僕達がいるから……」

「……そうだったわね。お隣りさんとして、ランちゃんは私達で守ってあげなきゃね」

「うん……じゃあ、僕は部屋に戻るよ」

スバルは廊下に出る扉を開け、リビングを出て2階にある自分の部屋に向かう。

『……つたく、本当に散々な目に遭ったぜ……』

「まあ仕方ないよ、ステラだって女の子なんだし……ロックは悪そうな顔だし」

『殴ってやるつか？』

「冗談だって。でも凄いやね、ランさんも同じようなことされてたなんて……ランさんって、もしかして僕やロックよりも強い……？」

第13話 お隣りさん（後書き）

これで、リメイク前の第2話「助け舟」までに相当する部分が終わりました。

大体わかると思いますが、話の都合でカニス登場回はバツサリカットです。

第14話 噂の……（前書き）

作者の奇妙な企み……企みって言うのかコレ？

・全く繋がりの無い自分の他の小説からオリキャラを持ってきて、その小説での出来事もほんの少しだけ語らせる（ドヤッ

いよいよリメイクから離れてきてますが、誰がなんと言おうとコスモス第1部のリメイクです。

とりあえず本編どうぞ。

第14話 噂の……

トーナメント開催日の翌日。月曜日の今日は登校日だが、スバルは朝から元気が無かった。時間があればミソラに会いに行くとハーブに言ったにも関わらず、結局は会いに行くことができなかったからだ。

「ミソラちゃん、怒ってるかな……」

『どうだろうな……まあ、会えないくらいで怒るようなヤツじゃねえだろ。また今度行けば良い』

「そうだね。その時に、ちゃんと謝ろう……さあ、学校に行こう！」

スバルは気持ち切り替え、時間に余裕を持って家を出ていった。

家を出ると、ちょうどルナ達がスバルの家に向かって歩いてきていた。スバルはルナ達のもとへ駆け寄り、ルナに声を掛ける。

「おはよう、委員長」

「あら、スバル君。今日は寝坊しなかったのね」

「ま、まあね……はは……」

(どつやら今日も寝坊したと思われてたらしい)

スバルは苦笑いしながら、合流したルナ達と一緒に学校に向かって歩き出す。

「そついえば、ランさんは？ コダマ小に転校してくるんでしょう？」

「今週の金曜日からみたいだよ？」

「金曜日……じゃあ、金曜日からはランさんも一緒ね」

「そつだね」

その時、ゴン太とキザマロはスバルとルナの話に疑問を抱き、ルナに尋ねる。

「なあ委員長、スバルと何を話してるんだ？」

「ランさん、というの？」

「ああ、あんた達には話してなかったわね。ランさんは、スバル君の家の隣に引っ越してきた子よ。今話してたけど、来週の金曜日からコダマ小学校に通うの。私達の1つ年下よ」

ルナがそこまで話すと、今度はスバルがランのことについて話し始める。

「なんの理由も無く引っ越してきたわけじゃないんだ。家にもランさん1人しかいない。僕達が友達になつてあげないとダメなんだ。」

だから、みんな仲良くしてあげてね」

「理由……？ よくわからないけど、大丈夫よ。みんな友達になっ
てくれるわ。ねえ……？」

先頭にいるルナは、振り向いてゴン太達に笑顔を向ける。なんと
なく身の危険を感じたゴン太達は、もちろんだと言わんばかりに力
強く頷いた。

「それでよし」

「怖いぜ……」

「怖いですね……」

それから間もなく、スバル達は学校に到着した。門をくぐり、昇
降口から教室へ向かう。その途中、ウォーロックはスバルに気づか
れないようにハンターV.Gから出た。

『……気のせいかな。クソッ！ いつまで引きずってんだ、俺は……』

ウォーロックは何かの気配を感じたようだが、辺りを見回して誰
もいないことを確認すると、スバル達の後を追って校舎に向かう。

『ウォーロック……』

校庭の片隅に植えられた大きな木の影から、ウォーロックの後ろ
姿を見ている白い電波体が1人。しかし、ウォーロックがそれに気
づくことは無かった。

『やっと……会えましたね……私だけの、ウォーロック……!!』
そう呟くと、その白い電波体は音も無く姿を消した。

「……ゆ、幽霊？」

「そーなんだよ！ 最近コダマタウンの人の間で噂になってるんだよー」

教室に入ると、早速スバルに話しかけてくる少女が1人。長い赤髪と薄い水色のワンピースが特徴の少女は、コダマタウンで噂になっているという幽霊の話をしている。

「晴れた日の夜、建物の影に白く光る何かがいてね？ 見つけた人が、電波体かなーって近づいてみたら……なんと、消えちゃったらしいの！ ゆっくり、スーって！ まだ実際に見てないからわからないけど……って、あれ？ スバルくん？」

「……ここで問題です。僕の苦手なものは？」

「苦手なもの………あつ、そっかぁ。スバル君、怖いんだね？」

「1名答……」

幽霊が苦手なスバルは、その幽霊の話聞いて顔を真っ青にしていた。身体も小刻みに震わせている。

「それ、本当に幽霊なの？」

「んー……目撃者の証言が曖昧だからねえ、もしかしたら電波体かもしれないね」

「電波体なら良いけど……幽霊だったら、怖いけど興味あるかも……」

スバルが考え事をしていると、ハンターV.Gから出ていたウォーロックが教室に入ってきた。

「あ、ロック。いつの間に外に？」

「……ん？ ああ……学校に入った途端、何かの気配を感じてな……外に出て探してみたが、何もいなかった」

「あれ……なんか、元気無いね？」

ウォーロックは下を向いて小さな声で話していた。ウォーロックがこのような状態になることは滅多に無いため、スバルは疑問に思っている。

『ああ……知ってるヤツの気配だ……だが妙なんだ。そいつは………っと、小鳥もいたのか』

「え、今気づいたの？」

ふと顔を上げた時、ウォーロックはスバルの隣の席に座っている赤髪の少女、灯小鳥の存在に気づいた。

『悪い悪い。考え込んでて周りが見えなかった。とにかく、何かが変わったんだ。スバル……どう思う?』

「どう思っつて、それは……っ!」

その時スバルは隣にいる小鳥を見て、ウォーロックの話と小鳥の今の状況から、ある1つの仮説を立てた。

「……どうしたの? スバル君。そんなに見つめられると、恥ずかしくて爆発しちゃうよお」

「……まさか、ね………そうだ。小鳥ちゃん、今日の放課後は暇?」

「うわー。この人、鮮やかにスルーしたよ………放課後、何かあるの?」

小鳥が聞き返すと、スバルは軽く頷いてから答える。

「ちょっと幽霊を探してみようと思うんだ。でも1人じゃ不安だから」

「電波変換できない私がいても、あまり意味無いような………まあ良いや。じゃあ一緒に幽霊、探そっか」

小鳥との会話を終えると、スバルは自分の机に視線を落として1人で考え込む。

(ロックは、小鳥ちゃんの方を見た直後から様子がおかしかった…

…これは予想に過ぎないけど……ロックが感じた気配っていうのは、小鳥ちゃんとか何か関係があるんじゃないかな……まだ断定はできないけど、その気配の主が小鳥ちゃんの言う幽霊だとしたら……）

スバルがいろいろと考えているうちに時間は過ぎ、教室内にチャイムが響き渡る。スバルはその音を聞いて考えるのをやめ、授業の準備に取り掛かる。

（とにかく、実際に幽霊を見てみないと。問題は、そう都合良く幽霊を見つけれられるか、だけど……）

第14話 噂の……（後書き）

今回はさりげなく小鳥さん登場回。

他にも数人、コスモス以外の作品から出しちゃいます。

小鳥を出してますが、このリメイク（笑）が消えゆく絆の続編を兼ねている、というわけではありません。

前書きに「作品内での出来事を書く」とありますが、詳しく書くことは絶対ありません。

あくまでコスモス第1部のリメイク。話を長くするための追加です。

今回の幽霊話でカニス登場回カットの不足分を補うんだぜっ（、・

）

ちなみに予定としては、この小説の全体話数をリメイク前のそれに近づけるつもりです。要するに100話超えを目指す感じですね。

さて、僕はどこまでリメイク元から離れれば気が済むんだろうか。

第15話 幽霊を探そう

その日の放課後、スバルと小鳥は教室に残っていた。ルナ達にも幽霊のことは話したが、やはりと言つべきか全く相手にしてくれなかった。

「2人だけで探すのかあ……なんだかデート気分」

「はは……もう帰って良い？」

「だめー」

その時、教室の扉が開けられ、廊下の方から1人の少女が肩に届く灰色の髪を揺らしながら入って来た。

「おおっ、誰かと思えば！ なんだかボーイッシュな服装が大好きらしい萌え子ちゃんじゃないかー！」

「光だよ……萌え子ちゃんって何？」

「近年稀に見るボクっ娘を、萌え子ちゃんと呼ばずしてなんと呼ぶ！？」

「普通に名前では呼べば良いと思う……」

光と名乗る少女は、薄い水色のシャツに灰色のパーカーを重ね、炎のような赤い模様が左側に入った黒い半ズボンを着ている。光は小鳥の昔からの親友で、両親がいないため小鳥の家と一緒に住ん

でいる。

「お疲れ。お前達が2人きりでいたから、冷やかに来たよ」

「あ、ああ……そう……でもタイミングが悪かったね……ねえ、小鳥ちゃん？」

「そうだねえ。光ちゃん、ちょっと私達とデートしよっか」

「……え？」

「はあ……幽霊なんて見つからないって。諦めなよ」

「光ちゃんには幽霊を引き寄せる力があるんだよ！」

「いや、無いし。ボクは幽霊なんか信じないよ」

太陽が沈み、コダマタウンがオレンジ色に染まってきた頃、スバル達3人は展望台のベンチに座って話していた。最初は嫌がっていた光も、今では立派な幽霊捜索チームの1人だ。

「とか言って、ついて来てるってことは興味あるんじゃないの？」

「そりゃあ本当にいるって言うんなら見てみたいもん。だから、見づからなかったらお仕置きね」

「はいはい。じゃあ、もう少し暗くなったら探してみようか。スバル君は、お父さんとお母さんに連絡入れてある？」

小鳥は笑いながら適当に返事をする、スバルの方を向いて尋ねる。幽霊は夜に出るため、必然的に帰りが遅くなる。そのため、小鳥と光はスバルが自分の親に連絡を入れてあるのかどうかを気にしていた。

「大丈夫。もうメールで伝えてあるから」

「そっかあ。それなら安心だね！」

「……星河、ちょっと良い？」

その時、光は立ち上がってスバルの方を向き、軽く手招きする。スバルは疑問に思いながらも、小鳥を残して光について行った。

小鳥に話を聞かれない場所まで離れると、光は早速スバルと話し始める。

「星河……小鳥は、やっぱり帰した方が良いんじゃない？ あいつのウィザードは、少し前にデリートされて……今は変身できないんだよ？」

「うん。僕も、そう思ったよ……でも考えてみたんだ。ウォーロツ

クが感じたって言う気配と、幽霊の話で……」

「……何か、あるの？」

光が恐る恐る尋ねてみると、スバルは真剣な表情のまま答えた。

「幽霊の正体は、小鳥ちゃんの……」

「わああっ!!!??」

その時、展望台の方から小鳥の叫び声が聞こえてきた。スバルは話の途中にも関わらず、急いで展望台へ向かう。光も、その後を追って走り出した。

「なあ星河！もしかして、今の叫び声……」

「小鳥ちゃんだね……幽霊が出たのかもしれない。急ごう！」

小鳥の無事を祈りながら、スバルと光は階段を駆け上がる。幽霊に悪意が無ければ良いのだが、もしあれば小鳥が襲われる可能性も考えられる。

「はあ……はあ……星河っ……さっき、何を言おうとしたっ……？」

幽霊は、小鳥の……何？」

「小鳥ちゃんの、ウィザードかもしれないんだ」

「……えっ？」

それから光が聞き返す時間も無く、スバルと光は小鳥がいる展望

台に戻ってきた。

「小鳥ちゃん！」

「こ、小鳥……大丈夫かつ……？」

「……あつ、スバル君、光ちゃん……」

小鳥は特に怪我等は無く、無事だった。むしろ、階段を駆け上がって息切れしている光の方が心配されるべきだろう。

「小鳥ちゃんの声が聞こえたから戻ってきたんだけど、もしかして幽霊が出たの？」

「へっ？ 違う違う！ ほら見て、これ。スカートが破けちゃったの。ベンチに引っ掛けちゃってさあ……けっこう気に入ってたのに……」

小鳥はスバル達に背を向け、スカートの破れている部分を見せる。すると、スカートの後ろに裾から2センチ程度の破れが生じていた。着ても気にならない程度の破れだが、お気に入りということ以小鳥は落ち込んでいる。

「な、なんだ……幽霊じゃないのか……」

「えへへ、ごめんね？ じゃあ、そろそろ探してみる？」

「そうだね。行こうか」

スバル達3人は、幽霊を探すためにコダマタウンへ向かった。

第15話 幽霊を探そう（後書き）

今回も光さんは弄られ役です。

ちなみに、この小説内では出生届の件は最初から無かった設定なので、光は周りから女の子として認識されていて、言動も少しだけ女の子寄りになります。多分

第16話 夜道を照らすのは……

「ねえ星河。幽霊なんて、どうやって探すの？」

「わからない。とにかく、出るまで待つしか無いね……」

「見つかる気がしない……ねえ、帰らない？ 絶対見つからないって」

真っ暗な町を歩いていると、光はスバルの服の袖を摘んで引つ張る。幽霊を信じないと言っておきながら、実は少しだけ怖かったりするらしい。そんな光の心の変化を、小鳥は見逃さなかった。

「光さん、幽霊が怖いのか？」

「そ、そんなこと無いよ。言ったでしょ、幽霊は信じないって……」

「ウラメシヤー……」

「ひゃあっ！？ ……なんだ、小鳥か……」

小鳥は静かに光の背後に回り、光の首筋に息を吹き掛けて脅かす。本気で驚いた所を見ると、どうやら光は本当に幽霊が怖いらしい。

「うへへえ、やっぱり怖いんじゃない もっと幽霊ごっこしようか？」

「や、やめろお！ 来るなあー！」

「やめてあげなよ。光さん、なんか泣きそう………ん？」

じゃれ合う小鳥と光を見ていたスバルは、視界の片隅に白く光る何かを確認した。

「……！！」

探していたものを、早速見つけることができた。今、スバルの視線の先には、白い光を放つ何かがある。

「小鳥ちゃん……光さん……」

「なあに？ ……わっ」

「ええ……？ 幽霊って本当にいるの……！！？」

小鳥の反応はイマイチだが、光は怯えて小鳥の後ろに隠れている。

「なんだろう……こつちを、見てる……？」

『やっぱりだ……あの時、学校で感じた気配と同じ……間違いねえ、あいつは……マグナだ！』

ハンターV.Gから出てきたウォーロックが、白く光る幽霊を見ながら言う。それにはスバルも光も驚いている。しかし小鳥は、その2人以上に驚いていた。

「マグナ……！！？ 嘘でしょ……？」

『小鳥……ショックだろうが、あいつは……』

「電波体も、デリートされたら幽霊になるんだあ！ ビックリだよ
お！」

『……………そっちかよ』

小鳥は、自分のウィザードだったマグナが幽霊になって現れたと知ってショックを受けている。これはウォーロックの考えだった。しかし実際は違うようで、デリートされた電波体は幽霊になるということを知って驚いていた。

「す……………凄い凄い！ 電波体の幽霊だあー！」

『小鳥……………』

「さ、触れるのかな……………？ 幽霊だから、すり抜けちゃうのかな？」

『小鳥！』

「うるさいっ！」

ウォーロックが大きな声で呼ぶと、小鳥も大きな声で言い返す。
今の小鳥はとても悲しそうな表情を浮かべ、目には涙が溢れている。

「嘘だよ……………マグナは、デリートされたんだよ……………もう、この世にはいない……………幽霊なんて、嘘だよ……………」

『だが、あの姿は完全にマグナだぜ。現実を……………受け入れた方が良
い』

「マグナ……こんな形で再会するなんて……」

マグナと呼ばれる幽霊は白い身体に、上半身はオレンジ色のアーマーを、肘から手首までの範囲には黄色のアーマーを、それぞれ装備している。両手には青い炎を纏っていて、目の色は水色。また、幽霊だからなのか全身が半透明になっている。

『見つけた……私のウォーロック……あなたは、私だけのもの……誰にも渡さない……』

「喋った!?!」

『な、なんだ? 俺、何かしたか?』

マグナが喋ったことで、スバル達は驚いている。しかし声を出したのはスバルとウォーロックだけで、小鳥と光は何も言わない。小鳥は驚きと悲しさで、光は幽霊に対する恐怖で、それぞれ声が出せない。

「マグナはロックのことが好きだった。でもロックは、その想いを受け止めてあげなかった。幽霊になったのは、それが原因かも!」

『はあ!?! それじゃあ、まるで俺が全部悪いみてえじゃねえか!?!』

「え、違うの?」

『なぜだ、なぜ返す言葉が思いつかないっ!?!』

そうやってスバルとウォーロックが話している間に、小鳥はゆっ

くりとマグナに近づいていく。それに気づいたスバルは、慌てて小鳥の肩を掴んだ。

「小鳥ちゃん！ 迂闊に近づいちゃダメだ！ あれがマグナでも…今は危険だよ！」

「ありがとう、スバル君……でも大丈夫。私は、マグナのオペレーターだから……もし、私に何かあったら……例えば、取り付かれたりとかしたら……その時は、ちゃんと助けてね？」

小鳥は肩に乗せられたスバルの腕を退かすと、再びマグナの方へ歩き出す。

「小鳥……小鳥！」

「光ちゃんも……怖がってないで助けてね」

「助けるって……待ってよ、小鳥！」

光は小鳥を連れ戻そうと走り出すが、スバルに腕を掴まれてしま
う。

「星河！？」

「小鳥ちゃんには、何か考えがあるみたいなんだ……今は、小鳥ちゃんの好きなようにさせてあげよう……」

「考え……？」

それから間もなく、マグナのすぐ目の前まで来た小鳥は足を止め、

マグナの水色の目をじっと見つめる。

「マグナ……久しぶりだね。私のこと、覚えてる？」

『……小鳥ちゃん』

「そう。覚えててくれたんだね……」

『小鳥ちゃんは何も悪くない……ウォーロックに用があるの。少し、お仕置きするから……どいて欲しいの』

マグナが道を空けるように言っても、小鳥は動こうとしない。それどころか、さらにマグナに近づいて地面に膝をつき、上目遣いでマグナの顔を見る。

「お仕置き、かあ……そうだね。ロック君、全然振り向いてくれなかったもんね……じゃあ、私も手伝う。私だけ幸せになっても意味無いから」

『手伝う……どうやって……？』

「私の身体を使って。あなたの、好きなように……」

小鳥は両腕を広げ、マグナに向かって微笑む。マグナは少し躊躇うそぶりを見せるが、すぐに小鳥の身体を乗っ取ることを決意した。

『……今、私と小鳥ちゃんの心はバラバラ……私が無理やりシンク口率を上げれば、最悪の場合……小鳥ちゃんは身体をスタスタに引き裂かれて、死ぬ……後悔するかもしれないよ……！』

「マグナと一緒に死ねるなら良いよ……」

マグナは小鳥の返事を聞いて微笑み、次の瞬間には小鳥に憑依して身体を乗っ取った。

「うう……！」

「小鳥ちゃん！」

「本当に取り付かれた！ どうする、星河！？」

苦しむ小鳥を見て、光は隣にいるスバルの方を見る。スバルは、少し考え込んでから光の問いに答えた。

「……僕達で止める。戦うんだ、マグナと！」

「くっ……そうするしか無いのか……！」

スバルと光はハンターV.Gにトランスコードを転送し、同時に電波変換した。

第16話 夜道を照らすのは……（後書き）

マグナの姿は最初からポラリス状態だった扱いになります。

もちろん、ポラリスという名前やアステリズムが本編中に出ることはありません。

第17話 未経験の戦闘

スバルと光は電波変換し、今だに苦しんでいる小鳥を心配そうに見る。マグナが無理やりシンクロ率を上げているからなのか、小鳥の身体には無数の切り傷が付き始めている。その時、スバルと光は今の小鳥の状態を疑問に思っていた。

「おかしいよ……オペレーターとウィザードの心が重ならないと、オペレーターはあんなに傷だらけになるの……？ ねえ、星河！」

「わからない。今まで僕は自分自身も含めて、波長が合う組み合わせのオペレーターとウィザードしか見たことが無いから……」

それからしばらく待つと、小鳥はゆっくりと立ち上がり、スバルと光がいる方を向く。その瞳は淡い水色の光を放っていて、小鳥自身は何も言わなくなった。

「小鳥ちゃん……？」

「……小鳥ちゃんは、やっぱり強いね………電波変換」

どうやら小鳥の身体は、マグナに完全に乗っ取られてしまったようだ。意識も心の中に閉じ込められ、今はマグナが小鳥の口を動かして喋っている。マグナは軽く微笑むとハンターV.Gを出し、静かに「電波変換」と呟く。するとハンターV.Gが白い光を放ち、マグナが操る小鳥の身体に纏わり付く。

「光さん……」

「うん……戦って、小鳥を助けよう」

小鳥の身体が白い光に包まれてから数秒後、その光は飛び散るようにして小鳥の身体から離れていく。既に変身は済んでいて、マグナの凍り付いた瞳がスバルと光を睨みつけている。

「リア充は……すり身にして、魚のエサに……」

「な、なんか凄いこと言ってるよ！？ あれってボクも入ってる！？
ねえ星河！？」

「はは……かなり恨んでるね……今回はかりはロックが全部悪い。でも見捨てることもできないわけで……仕方ないから戦おう。僕達が、生き残るためにも……」

「り、リアルすぎる……ボクは絶対に生き残るぞお！ 魚にだけは食われたくない！」

(じゃあ何にだったら食べられても良いのかな、なんて……)

スバルには心の中で冗談を言えるくらいの余裕があるようだが、光の頭の中は生き残ることだけでいっぱいだった。

「それにしても、あの姿……マグナが幽霊だからかな。見た目が、かなり変わってる」

変身したマグナは、胴体にオレンジ色のアーマー、肘から手首までの範囲に黄色いアーマーをそれぞれ装備し、両手は青い炎を纏っている。頭部には防具を装備せず、黄色のバイザーだけを付けてい

る。また、小鳥の赤い長髪はグラデーシヨンの効いた鮮やかな水色に変わり、先に行くに連れてその色は明るくなっている。

ここまでは、スバルの知っている小鳥とマグナの合体した姿、マグナ・フレアと同じだ。しかし、それ以外で違う部分がある。

まず、下半身は不定形の白い光になっていて足が無い。次に、マグナの周りに青白く光る複数の人魂が浮いている。さらに胴回りは肌を露出している。

「ほ、星河っ……小鳥の足が……無い！」

「まさに幽霊だね……それに、お腹なんて出してたっけ？ 斬るタイプのバトルカードで攻撃したら、大変なことになりそうだよ」

「あ……想像しただけで貧血起こしそう……」

光は倒れそうになるが、スバルの肩を掴んでなんとか持ちこたえた。

「光さんが変身するのって久々だよ。戦えるの？」

「もともとサポート寄りの能力だし、大丈夫だと思う」

光が変身するのは、ノース・マグネとサウス・マグネ。サウスとノースという兄妹のウィザードを連れているため、2種類の変身ができる。

光が今変身しているのはノース・マグネ。全体的に赤い身体が特徴で、両腕の肘から手首までと両足の膝から足首までの範囲は灰色

の装甲を装備する。また、両手の手首から先と両足の足首から先は赤い電気を帯びている。他にも、頭にはロックマンに似た防具を付け、青いバイザーで目を覆っている。

サウス・マグネになると赤い身体や手足の電気は青に、青いバイザーは赤に変わる。それ以外の見た目の変化は無い。

この2つの変身は、どちらも磁石の性質を利用する能力を持つ。しかし攻撃力は低いためサポート向きの変身と言える。

「ねえ星河……さっき言ったよね？ 小鳥には、何か考えがあるって……」

「小鳥ちゃんはマグナを逃がさないために、わざとマグナに取り付かれたんだよ……マグナは、もう自分の力で変身を解くことはできない。小鳥ちゃんが強い意志で押さえ付けてるから」

「……なるほど。その後どうするか、大体わかったよ……それなら、さっさと終わらせるしか無いよね！」

光はその場で地面に膝をつき、右手も地面に当てる。すると、コダマタウンの地面全体が赤い光を放つようになった。

「準備完了……シフト、サウス・マグネ！」

次に、光はサウス・マグネに変身し直す。この時、光は電波変換を解かず、ノースとサウスを変更できる。

サウス・マグネに変身すると、光はマグナがいる方へ走り出す。

「私に近づくとはい愚かな……あなたの力は知っています。私にS極の磁気を纏わせ、地面に与えたN極の磁力を有効にして私の動きを封じる……」

「ああそうさ！ 逃がさないよ！」

マグナに考えを見抜かれていても、光は足を止めず走り続ける。そして触れる所まで近づくと、光はマグナの身体に右手を伸ばす。しかし、その手はマグナの身体をすり抜けてしまった。

「……あ、あれ？」

「フフツ……！」

光が戸惑っている中、マグナは手が纏う青い炎を剣の形に変化させ、光の胸に突き付ける。

「今の私は、実体を持たない幽霊……触ることは、できませんよ……？」

「やばっ……！」

「バトルカード、フォトンロープ！」

マグナが炎の剣を光の身体に突き刺す前に、スバルはバトルカードで出した白い縄を光の身体に巻き付け、思いつ切り引つ張る。

「わあっ！？」

「よっと……大丈夫？」

スバルは自分の方へ勢い良く飛んできた光を受け止めると、巻き付けていた縄を解いた。

「くう……身体がビリビリする……」

「当たった相手を麻痺させるカードだからね。でも刺されるよりはマシだよ。それより、問題はマグナをどうやって倒すか、だよ……」

「物理攻撃は効かないかもね。どうすれば良いのかな……くっ、痺れが取れない……」

身体が痺れていて1人で立ってられない光は、スバルに後ろから支えられている。そんな状態でも、スバルと一緒にマグナを倒す方法を考えていた。

「ごめん、光さん。助ける手段が他に無くて」

「ボクなら大丈夫。帯電体質で、よく静電気の被害受けてるから……それより、どうするの？」

光が尋ねるとスバルはしばらく考え込み、少し間を置いてから答えた。

「……光のカードなら行けるかも」

「えっ？」

「だから、光の……あ、光さんじゃないよ？ ほら、僕のフォルダって光系統のカードばかりでしょ？ 小鳥ちゃんから貰ったんだけ

ど、これなら幽霊のマグナにも効くんじゃないかな」

「ああ、そつちね……いきなり呼び捨てにされたと思って、ビックリしちゃったよ」

(なんて紛らわしい……まあ仕方ないよね)

スバルは苦笑いしながら、光の肩に乗せていた両手を放す。どうやら身体の痺れは取れたようで、光は一人で立てるようになっていた。

「光さん、ちょっと働いてもらえるかな」

「働くって……？」

光が聞き返すと、スバルは光の耳元に顔を近づけて何かを囁く。光は顔を赤らめながらも、スバルの話をしつかりと聞いた。そして話が終わると、光は頭上に広がる電波の道、ウェーブロードに乗ってコダマタウンから離れていった。

「逃げた……ようには見えませんね」

「マグナ、僕とロックが相手になるよ」

「スバル君は何も悪くないけど……連帯責任ということでは、一緒に
お仕置きです」

第18話 特殊な属性（1）

「小鳥ちゃんが告白してくれて、僕は頷いて……付き合い始めてから何日か経って、小鳥ちゃんは僕にバトルカードをくれた……それが、この光属性のバトルカード！」

「光……属性……！？ 小鳥ちゃん……いつの間に、そんなカードを……」

「知らないってことは、小鳥ちゃんがこれを手に入れたのはマグナがデリートされた後か……だったら良かった。もし知ってたら対処されやすくなるからね」

スバルは軽く微笑むと、バトルカードを1枚取り出した。

「バトルカード、シャインフィスト！」

バトルカードを使用すると、スバルの左手が厚い装甲に覆われた光る拳に変化する。その状態で、スバルはマグナの方へ走り出した。

「霊体の私に、物理攻撃は効きません！」

「当たれ……当たってくれッ！」

マグナとの距離を縮めると、スバルは光る拳をマグナの腹部目掛けて思いっ切り突き出す。すると、その攻撃はしっかりマグナに当たった。

「うつ……く……な、なぜ……なぜ当たるのです!？」

「当たった……! よし、バトルカード! セイントキャノン!」

光属性のバトルカードが当たるとわかり、スバルは再び光属性のバトルカードを使う。それにより左腕をキャノン砲に変化させ、マグナ目掛けて光を放った。

「あまり調子に乗らない方が良いでしょう……ドレインウィスプ」

マグナは攻撃を避けると、右手を前に伸ばす。すると、マグナの周りに浮かぶ人魂がスバルに纏わり付いた。

「あなたの全てを、私に捧げなさい……」

「くっ……力が、抜けていく……!？」

『スバル! その人魂が体力を奪ってるんだ! 早く振り払え!』

ウォーロックの指示通り、スバルは身体に纏わり付く人魂を手で振り払おうとする。しかし、その手は人魂をすり抜けてしまい、振り払うことができない。

「これも、触れない……!？」

『仕方ねえ……体力を全部奪われる前に、あいつを倒すんだ!』

「わかった! ……ごめん、小鳥ちゃん。バトルカード、レイブレイド……」

スバルは左腕に光る刃を装備し、マグナがいる方へ走り出す。

「なんですか、その光は……全身に纏わり付いてくるような……鬱陶しいですね。スピアリグレット！」

マグナは青い炎で頭上に巨大な槍を作り出し、スバル目掛けて投げつける。しかし、それはスバルにとっては一瞬の足止めにはならなかった。

「こんなもの……無駄だよ！」

スバルが装備しているレイブレイドは、攻撃と防御の両方に使える。振ると目の前に光の壁が作り出され、それが相手の攻撃を1度だけ防いでくれるのだ。

スバルはレイブレイドを振って作り出した光の壁でスピアリグレットの攻撃を防ぎ、続いてマグナ本体を斬りつけた。マグナの腹部に大きな斜めの切り傷が付いたが、その傷口から血が溢れ出すことは無かった。

「出血が無い……斬っても大丈夫ってことかな……？」

「さあ、どうでしょうか……私が変身を解けば、その直後から出てくると思えますよ……変身は、小鳥ちゃんのせいで解けませんけどね……」

攻撃を受けても、マグナは平然としていた。それどころか、傷口を指先でなぞりながら不気味な笑みを浮かべている。その様子を見て、スバルはあることに気づいた。

「……もしかして、マグナ自身にはダメージが伝わってない……？」

「……ええ、そうですね。私は痛くも痒くもありません。痛いのは小鳥ちゃんだけ……今は大丈夫でしょうけど、私が小鳥ちゃんから離れた時には……！」

『スバル！ ダメだ、もう攻撃するな！ 小鳥が死んじゃう！』

「では、今度は私の番ですね……フレ임エンヴィアス！」

マグナが両手を前に出すと、その手に纏わり付いていた青い炎が渦を巻きながらスバルの方へ伸びる。

「バトルカード、マジックウォール！」

スバルはバトルカードで出した壁の陰に隠れ、炎の攻撃から逃れる。その時スバルの背後には、既にマグナの姿があった。

「くっ……！」

「メテオグラッジ……！」

スバルが逃げる前に、マグナは上に伸ばした右腕を振り下ろした。その直後、スバルの頭上に青い炎を纏うドクロのようなものが現れ、低い唸り声を上げながらスバルに襲い掛かる。

「うわあっ!?!」

「レイングリード……！」

メテオグレンジがスバルに当たった後、マグナは両手を上に伸ばし、青い炎を飛ばした。それが無数の小さな槍を形成し、スバルに追撃を仕掛ける。

「バトルカード、ルミナスマント！」

バトルカードを使った直後、スバルの肩に光のマントが付いた。スバルはそれを使って攻撃を防ぐと、急いでマグナから離れる。

「こうなったら仕方ない。少し早いけど……バトルカード、フオートンロープ！」

スバルは光を助けたのと同じバトルカードを使い、光るロープを出してマグナの身体に巻き付ける。その直後にマグナの身体に電気が回り、マグナの全身は一瞬で麻痺してしまった。

「くっ……身体が、動かない……」

「じゅめんね、しばらく止まってもらっしょ……」

第18話 特殊な属性（1）（後書き）

ちなみに気づいてる方もいるかと思いますが、本編中に出てくるバトルカードは全てオリジナルです（、、、）

特に今回、何を血迷ったのか光属性なんて新しい属性を出しましたが、これは後でそれなりに大きな意味を持つようになります。

幽霊マグナ編は次話で終わりです。果たしてマグナはどうなるのか、そして光さんは何をしに行ったのか、次でわかるはずですよ。

第19話 運命

静寂が支配する夜の町。その暗闇は、マグナを捕らえる光の縄で部分的に照らされていた。

「……大丈夫？ マグナ……多分、全身が麻痺してると思うけど……」

「お気になさらず……痛みも何も感じません。ただ、縛られて身体が動かないだけです……」

「麻痺も効かないんだね……」

実際にはマグナの身体は麻痺しているのだが、マグナは身体の痺れなどを一切感じていない。ただ単に、縄が巻き付いているせいで動けないというだけのようだ。

「そろそろ教えてください……光ちゃんは、一体どこへ……？」

「WAXAだよ。ヨイリー博士に、ちょっと聞きたいことがあってね。僕はマグナの相手をするから、代わりに光さんに行ってもらったってわけ」

「博士に、何を聞くと言うのです……？」

「それは……あつ、戻ってきた！」

ふと上を見た時、スバルは光の姿を確認して手を振る。光はウエ

ーブロードから降りると、スバルのもとに駆け寄る。

「星河！ 博士が、できるって！」

「よしっ！ さすがWAXAだ！」

「できる……何が、ですか……？」

喜ぶスバルと光を見て、マグナは何ができるのかと首を傾げる。

「マグナ！ 幽霊のキミを、蘇らせることだよ！」

「えっ……そ、それは、どういう……!？」

スバルの返事を聞いて、マグナは驚いている。そんなマグナを見ながら、スバルは話を続ける。

「詳しいことを話してる時間は無いけど……少し前に、委員長が電波のカケラになったことがあるんだ」

『シーサーアイランドに行った時のアレか……あの時は、どうなるかと思っただぜ』

(そんなことが……って、なぜそんなブツ飛んだ話を掘り返す!?)

光は苦笑いしながら、興奮気味に話すスバルの話を黙って聞き続けた。突っ込みたくなっても何も言わない。突っ込まない。そうすればスバルの話はスムーズに進む。

「その委員長を元に戻すのに使った装置を応用すれば、幽霊のマグ

ナ的人格データと小鳥ちゃんのハンターに残ってるマグナの残留電波から、電波体としてのマグナを再生できるんだ!」

「そうか、そういうことか……良かったね、マグナ! ……あ、あれ? マグナ?」

光は、マグナが悲しそうにしていることに疑問を抱く。マグナは1度深い溜め息を吐いてから、その口を動かして話し始めた。

「……それが叶うとしたら、どんなに良いことか……無駄ですよ。小鳥ちゃんの端末に、私の残留電波はありません。小鳥ちゃんは、ハンターを買い替えているようです」

「ええっ!? な、なんで!?!」

「そういえば小鳥……先週あたり、お風呂入ってる時に悲鳴を上げてたような……ま、まさか、水没……?」

(小鳥ちゃん……そこまでしてハンターを使いたい理由はッ!?!?)

いくらWAXAの技術が優秀でも、マグナを残留電波無しで生き返らせることは不可能だ。もうマグナを生き返らせる方法は無いと、スバルは諦めかけていた。

「もっと早く……マグナを見つけていれば……もしかしたら……っ」

「スバル君……」

「せめて、小鳥ちゃんがハンターを水没させる前まで、戻ることができたら……過去に、行ければ……ッ!?!」

その時スバルは、視界の片隅に何かを見つけ、それがある方に視線を動かす。その視線の先のウェーブロードには、電波体が2人並んで立っていた。

「誰だ……こつちを見てる……!？」

「……こいつが欲しかったんだろ？」

少年の声と同時に、スバルの近くにハンターV.Gが落とされる。それを見て不思議に思っていると、少年は続けて言葉を発する。

「先週の灯小鳥のハンターだ。その中にマグナの残留電波がある。代わりに新品を置いてきたから、本人には返さなくて良い」

「先週の……!？ あの、キミ達は!？」

「……それは、また別の機会に話そう……良いか、運命には逆らえない……過去も未来も、お前1人の力じゃ変えられない……必ず会う時が来る。それまで生き延びてろよ、星河スバル……」

その直後、ウェーブロードに立っていた電波体2人は姿を消した。スバルは少年が投げ落としたハンターV.Gを操作し、画面にプロフィールを表示する。信じ難いことだが、このハンターV.Gは紛れも無く小鳥のものだった。

「そうか……小鳥が悲鳴を上げたのは、風呂場の中でハンターを水没させたからじゃなく……風呂から上がったら、新品に変わってたからだ！」

「過去から、ハンターを持ってきた!？」

「星河、考えるのは後だ! これを持ってWAXAに行こうよ!」

「う、うん。さあ僕達と行こう、マグナ!」

「は、はい……?」

(私が……本当に、生き返る……? また、小鳥ちゃんに触れることが出来るの……!?)

スバルと光がウェーブロードに乗ると、マグナも2人の後を追ってウェーブロードに上がる。そして、3人一緒にWAXAへ向かった。その時、フワフワと空中を移動するマグナの顔には、幽霊とは思えない温かみのある笑みが浮かんでいたという……

第19話 運命（後書き）

最後に喋った電波体については、今はスルーして構いません。再登場はもう少し先になります。

次回からまた別の話に変わります。前にも言ったサジタリウス編です。ね。

第20話 不幸から幸福へ

アリス達は、とある町を拠点としている。コダマタウンからは遠く離れた、ニホン国内の小さな町だ。そこでアリスは、コメットと2人で話をしていた。

「……………ねえ、コメット。次のトーナメントまで時間がありすぎるんだけど、どうする?」

『そうだな……………ロックマンと戦えるのがトーナメントだけというのは、私も不満に思っていた。それではロックマンが戦う機会は減り、いつまで待っても強くならない……………よし、アリス。サジタリウスと、そのオペレーターを呼んできてくれ』

しかし、アリスはコメットの指示に従わず、コメットの目の前から動かない。しかし動かないのには理由があるようで、アリスはすぐに話し始めた。

「ん……………その2人なら出掛けてるよ? 多分、夕方まで戻って来ないんじゃないかな」

『そうか、今日は平日だから学校か……………仕方ない。夕方まで待つか……………』

目を閉じて腕を組み、壁に寄り掛かっているコメットをしばらく見つめた後、アリスは再び口を開く。

「……………その2人に、何か用があるの?」

『まあ、な……あの2人に、最初に働いてもらおうかと思ったんだ。やはりトーナメントだけでは足りない』

コメットは近くにある窓から空を見ながら答える。しかし、アリスの質問ラッシュがここで終わることは無かった。

「ほっほう……星河君に、トーナメント以外でも戦わせるんだね？でも、なんでサジタリウス？」

『あ、ああ……サジタリウスは作戦を練るのが早いから、すぐに動いてくれるんだ』

「へえ……でも」

『も、もう休ませてくれ……！』

このままでは、日が暮れてもアリスの質問に答え続けることになる。そう考えたコメットは、アリスから逃げるようにして部屋を出ていった。

「行っちゃった……仕方ない、お昼ご飯の時間まで寝てよーっと」

一瞬だけ落ち込んだ後、アリスはベッドに飛び乗って昼寝を始めた。

コダマ中学校。コダマタウンにあり、コダマ小学校からは少し離れた場所にある中学校だ。その少女は、今日も2年A組の教室で悶えていた。

「にああ〜……わかんない……」

『そんな簡単な問題もわからないのか？　これは、こんな感じに代入して……こうすれば……』

「ふにやつ！？　答えが1分と待たずに出てきたよ！？　やっぱりサジタリウスは天才だねえ〜」

『コメットには負けるけどな……』

閃堂咲姫とサジタリウス。この2人こそ、コメットが話をしたかったオペレーターとウィザードだ。

咲姫は短めの茶髪と灰色の瞳が特徴で、前髪は黄色いカチューシヤで上げて額を出している。また、服装はコダマ中学校の制服。紺色のセーラー服は胸の部分に赤いリボンが付いていて、プリーツ加工の施されたミニスカートはチェック柄になっている。

サジタリウスは、人型の上半身は白い電波、牛の胴体のような下半身は茶色の電波から成っている他、弓に変化した右腕が特徴。今は休み時間のため、ハンターV.Gから出て咲姫の勉強を見ている。

コメットに協力するようになってからも学校に通い続ける者は、咲姫だけではない。もともと学校に行っていないアリスと董以外は、全員学校に通い続けている。

『咲姫、もう少し勉強したらどうだ？ 部活に熱心なのは良いが、それだと進路が……』

「にはは〜、まだまだ時間はあるんだから良いよお考えなくて〜」

『あるようで無い……と言っても聞かないか』

サジタリウスが深い溜め息を吐いている中、咲姫は数学の教科書にある問題を指差しながら、黙ってサジタリウスの顔を見つめていた。

『はあ……わかった。解けない問題は一緒に見てやる』

「えへへ、ありがとうー」

その休み時間、咲姫とサジタリウスはひたすら数学の問題を解き続けていたという。

そして放課後。咲姫はホームルームが終わると両腕を上にはやし、椅子に座りながらふん反り返っていた。

「んんっ……にゃあ〜！ 終わったあ〜」

『お疲れさん……さて、帰るか？ 今日部活、無いんだろ？』

「まあ、設備交換の日だからねえ……よしっ！ ちょっとだけ遊ん

でから帰ろう！」

咲姫は満面の笑みを浮かべながら荷物を持って立ち上がり、教室を出ていく。楽しそうな咲姫に対して、サジタリウスは溜め息を吐いていた。

『はあ……あまり遅くなるなよ、怒られるのは俺なんだ』

「はーい！ むー、どこに行こうかなー……」

その時、サジタリウスはある一つの疑問を抱き、咲姫に問い掛ける。

『……お前、いつも楽しそうだよ……心に隙間を持つ人間を選んだはずなんだが……？』

「……嫌なこと言うんだね。否定できないんだけどさ……私の心の隙間？ そんなの簡単。独りぼっちだからだよ……それが原因。わかった？」

咲姫には両親がいない。多額の借金を残して、家を出ていった。そのため、咲姫は借金取りに怯えながら生活していた。しかし1ヶ月前、サジタリウスが現れたことで咲姫の生活は一変。借金取りを瀕死に追い込み、コメットの仲間となった。

たくさんの仲間に出会った生活は、いつの間にか咲姫の心の隙間を埋めていた。しかし、だからと言ってサジタリウス達と別れば、また元の生活に戻ってしまう。せつかく掴んだ幸せな日々を手放したくないため、咲姫は今もコメット達に協力しているのだ。

『……どこに行くか決めたか？ 思いつ切り遊んでから帰るんだろ
『？』

「うんっ」

第21話 指名

数時間後。日が暮れるまで遊び尽くした咲姫は、ウェーブライナーを使ってアリス達がいる町に向かっていた。

「くっはあ〜！ 今日もいっぱい遊んだなあ〜」

『帰ったら宿題だな。数学と英語で出ていただろう？』

サジタリウスが言い放った「宿題」という単語で、咲姫の心は一気に現実へ引き戻される。この日、咲姫のクラスでは数学と英語の授業で宿題が出されていたのだ。

「だああ〜、そうだ宿題あるんだったあ……サジタリウス、もちろん手伝ってくれるよね？」

『ああ……お前1人じゃ一生かけても終わらないだろうからな』

「きゃ〜！ ありがとーサジタリウス！ マジで愛してるっ！」

『お前……まだまだ元気だなあ』

手伝ってしまうのは咲姫のためにならない。それはサジタリウスもわかっていた。しかし、できる限り咲姫が悲しむ姿を見たくないため、そうならないように手伝ってしまうのだ。

『咲姫……お前、戦えと言われたら戦うか？』

「相手が、コメントの計画を邪魔するヤツだったらね。無差別に攻撃するのは嫌かな」

『そうか。だったら、今のうち読んでおけ。お前が遊んでる間に受信したメールだ』

そうやって、サジタリウスはハンターV.Gの画面に先程受信したメールを表示する。差出人はアリスで、件名は無い。

「アリスちゃんからだ。なんたる……ああ、コメントからのメールか。えーっと……へえ、なるほどね。早速ご指名が入りましたよ、サジタリウスさん？」

『俺も読んだ……とにかく、今日は休んでおけ。メールにも、明日と書いてある』

メールには、昼間コメントが話したかった内容が全て書かれていた。星河スバルと戦えという命令から始まり、作戦はサジタリウスに任せるといったこともしっかり書かれている。

「星河スバル君……強いのかな。すっごいワクワクしてきた！ うう……にゃあー!!」

『うるさいぞ……他に人がいないから良いもの……』

「たっただいまー！」

「おっ、さっちゃんお帰りー。遅かったねえ、部活？」

「あつ、水野さん！ 部活じゃないよー、今日は遊んできた！」

咲姫が玄関から家に入ると、ちょうど廊下を歩いていた少女が振り返り向いて微笑む。

彼女の名前は水野薫。咲姫より1つ年上の中学3年生だ。しかし通っているのはコダマ中学校ではなく、ベイサイドシティという町の中学校だ。

薫は水色の瞳と、肩にかかる長さの青い髪が特徴で、服装は黄色い半袖シャツに、膝にかかる長さの白いスカート。また、両手首には青いフワフワしたリストバンドを着けている。

「そっか。じゃあ手え洗って、うがいしてきなあ。ちょうど凶哉と一緒に晩飯作る所だからさ」

「わかったー！」

元気良く返事をする、咲姫は洗面所へ向かう。そこで手を洗っている、サジタリウスがハンターV.Gから出て咲姫の隣に現れた。

『食事は今から用意するみたいだな。だったら、コメントの所に行かないか？』

「うん。コメントってアリスちゃんの部屋にいるよね、多分」

咲姫は手洗いうがいの両方を済ませると洗面所から出て、すぐ近

くの階段で2階へ向かう。アリスの部屋は階段の真つ正面にあるため、2階に上がればすぐに辿り着くことができる。

「コメット、中にいるの〜?」

扉を2、3回ノックするが返事は無い。代わりに扉が開き、中からコメットが姿を現した。

「帰ってきたか……ここに来たということは、あのメールの話だね?」

コメットは扉を完全に開け、咲姫が部屋に入ってから閉めた。

「それで……行ってくれるか?」

「もちろん。アンドロメダ復活のためのエネルギーも溜めなきゃだし、私も星河君とは戦ってみたいしっ」

「そうか……それで、サジタリウス。作戦は……さすがに、まだ考えてないか?」

コメットが名前を呼ぶと、サジタリウスは咲姫のハンターV.Gから出てきて、すぐにコメットの問いに答える。

「いや、考えてある。咲姫の行動力と、星河スバルの周りの人間の動きなどから、なかなか良い作戦を思いついたんだ」

「早いな……それで、どんな作戦だ?」

「星河スバルのブラザー、響ミソラを利用する。近いうちにアメロ

ッパでドラマの収録をするらしいんでな、そこを狙うつもりだ……』

その後、サジタリウスが続きを話そうとすると、薫が扉を開いて部屋に入ってきた。

「話し声が聞こえたと思ったら、ここにいたんだね。ご飯もつすぐできるから下りてきな、咲姫」

「はい」

『……詳しいことは後で話そう。これは咲姫にも聞いてもらいたい』

『ああ、わかった』

部屋にコメントを残し、咲姫とサジタリウスは1階に下りていった。

『……響ミソラ、か。あの少女を、どのように利用するんだ……?』

第22話 学校デビュー！

金曜日。今日はランがコダマ小学校に転入する日だ。しかしスバルはそのことを完全に忘れていた。

「色々あったけど……あの後マグナは、無事にウィザードとして生き返った……良かったね、ロック」

『ああ……だが、なんか会いづらいな……』

数日前、マグナは幽霊としてスバルの前に現れた。そして小鳥の身体を乗っ取り、電波変換してスバルと戦った。決着はつかなかったが、WAXAの技術でマグナを生き返らせることができるかわかり、そのまま戦闘は終わった。その後、マグナはWAXAで電波の身体を取り戻し、本当の意味で小鳥のウィザードとして戻ってきた。

「さて、準備もできたことだし……そろそろ出ようかな」

スバルが部屋の扉に手を掛けた時、1階から呼び鈴の音が響いてくる。

「委員長かな……」

いつものようにルナ達が来たのだと思い、スバルは急いで玄関へ向かう。

「おはよう、委員長……あれ？ ランさん？」

「おはようございます……あの、隣だから来てみたんですけど……」

「……ああっ！」

ランの顔を見て、スバルは今日がなんの日なのかを思い出した。

「そうか忘れてた。今日から学校に来るんだったね！」

「あ、はい……え？ 忘れてたんですかあ？」

「いやあ、色々あってね……」

玄関の扉を閉めると、スバルはランと一緒に学校に向かって歩き出す。年下ということもあり、ランは何を話して良いかわからず気まずそうにしていた。そして、やっとのことで発した一言が……

「あの……変わったメガネですねえ」

スバルが頭に乗せているビジライザーを見た感想だった。スバルは軽く微笑むと、ビジライザーを外してランに渡す。

「これを掛けて、上を見てごらん？」

「上？ ……わあっ、ウェーブロードが見えますよあ！？」

さつきまで見えなかったウェーブロードが見えるようになり、ランは感動していた。

「ビジライザーって言って、掛けると電波が見られるようになるんだ」

「わあ〜……天使様、これ凄いですよお！ ほらほら、天使様も！」

『フツツ……私はウイザードなので、もともと見えてますよ』

本来ビジライザーは貴重な品だ。それを掛ければ電波が見えるとなれば、普通なら誰でもランのように感動する。長い間持ち続けているからこそ、スバルは当たり前のようにビジライザーを使っているのだ。

「うっはあ〜……あのっ、スバルさん！」

「ダメだよ？」

「ま、まだ何も言ってないですよ！」

「いや、欲しいとか貸してとか言いそうだったから……」

「はうっ！！!?」

(凶星みたいだ)

ランは残念そうにしながらビジライザーを返す。スバルは苦笑いしながら受け取ると、それを再び頭に乗せた。

「これは父さんから貰った大切な物で、売ってないんだ……」

「そうだったんですか……じゃあ仕方ありませんねえ……ごめんなさい」

「良いよ。実際、これは便利だからね」

それからしばらく歩くと、ルナ、ゴン太、キザマロの3人と合流した。

「あら、2人とも早いわね」

「おはよう、委員長」

「おっ、おはようございます……」

年上が一気に3人も増え、ランはさらに縮こまってしまふ。それから5人は学校に向かって歩き出すが、ランは他の4人の後ろについて歩いていった。

「それで、スバル君。最近の小鳥ちゃん、なんだか機嫌が良いみたいだけど……何があったのかしら？」

「マグナが生き返ったんだ。残留電波と幽霊のマグナの人格データから、電波体のマグナをWAXAで再構築したんだ」

「幽霊って……まさか、噂の!？」

「そう。あれの正体はマグナだったんだ」

スバルとルナが、小鳥とマグナのことで話し始める。まだゴン太やキザマロと話したことの無いランは、ますます話しづらくなってしまっ。

(あうう……スバルさんが、委員長さんとの話に夢中ですよ……)

『ラン……大丈夫ですか?』

「そうだ、天使様がいた! 話し相手になってくれませんか?」

『は、はあ……?』

(慣れるまで、まだまだ時間が必要ですね……)

それから学校に着くまで、ランはステラと話し続けていたという。

第22話 学校デビュー！（後書き）

ちなみにトーナメント以外でのランの活躍は少なめです。

下手するとトーナメント以外の場所じゃ電波変換すらしないかも…
…？

次回からサジタリウス達が動き出します。

第23話 動き出す射手

二ホンから離れ、アメリッパのドンブラー村。幻の生物ドッシーがいると言われるドンブラー湖や、高い展望台などが特徴のこの村に、その少女は来ていた。

『5分休憩で、その後は場所をドンブラー湖に移すわよ』

「うん、わかった」

茜色の長い髪と緑色の瞳が印象的な少女の名前は、響ミソラ。ドンブラー村にはドラマの収録に来ていて、その衣装と思われる薄い黄色のワンピースを着ている。

『少し汗かいてるんじゃない？ タオル持ってくるから、ちょっと待ってなさい』

「ありがと、ハーブ」

ミソラのウィザードのハーブは、ミソラのもとを離れてタオルを取りに行った。

「ふう……次にスバル君に会えるのは、いつになるのかな……」

「あれえ？ おかしいなあ……」

「……ん？」

その時ミソラは、四つん這いになりながら何かを探す少女を見つけた。

「ニホン語……?」

その少女がニホン語で喋っていることに気づいたミソラは、特に警戒もせずその少女に近づき、話し掛けた。

「あー、何をしてるんですか?」

「あのねー、眼鏡を落としちゃって……って、ニホン語? ……あ
あっ! ミソラちゃんだあ!」

四つん這いになっていた少女は立ち上がり、両手でミソラの右手を掴んで上下に振る。

「うわあ感激! 私、閃堂咲姫! ミソラちゃんの大ファン!」

「あ、ありがとうございます。あの……今、ドラマの収録やって、休憩時間だから……眼鏡、一緒に探しましょうか?」

「本当に!? じゃあ、あっちの展望台の方を探してくれないかなあ。私も、この辺探したら行くから!」

「展望台ですね、じゃあ探してみます」

そう言つと、ミソラはドンブラ湖とは真逆の方向にある展望台の方へ歩いていった。ミソラの姿が見えなくなつてから、咲姫も展望台の方へ歩き出す。

実は、咲姫は視力が2.0以上で、もともと眼鏡は持っていない。ミソラはまんまと騙されたというわけだ。

「ハープが離れてくれて助かったよ……さあ、次のステップに進んでみようかな？」

『タオル持ってきたわよー……あら？』

ハープはタオルを持って戻って来たが、既にミソラの姿は無い。ハープは近くを探すが、やはり見つからない。

『ミソラ……？』

ミソラがハープを置いて勝手に行動することは少ない。しかし全く無いわけでもないため、ハープはドンブラー湖に向かう。

『もう、あの子は心配かけてばかりねえ……ミソラ！ 先に行くなら、一言……って、ここにもいないじゃない！』

ドンブラー湖にもミソラの姿は無い。ここに来て焦り始めたハープは、一旦戻って反対側の展望台方面へ向かう。

『あんなに高い展望台があるのよ？ 道を間違えたとは思えないけど……』

この村の展望台はコダマタウンのものとは比べものにならないほ

ど高く、村のどこからでも見ることが出来る。だからこそハーブは、ミソラが道を間違えたとは思っていなかった。

『ミソラ〜……ッ!』

展望台の入口付近に来ると、突然ハーブは物陰に身を潜める。展望台に上がる昇降機の前には咲姫とサジタリウス、そして気を失って倒れているミソラがいた。

(あれは……サジタリウス! どうして地球に……!?)

『意外と早く済んだな』

「ミソラちゃんは良い子だよ。良い子すぎて騙すのが簡単だった。あとはミソラちゃんのハンターV Gから……あった。星河君にメールを送信するだけだね!」

『これで、すぐに飛んで来れば良いんだが……』

ハーブがいることに気づかないまま、咲姫はミソラのハンターV Gを使ってスバルにメールを送った。

「星河君なら絶対来るよ……あとは誰にも見つからないように、ミソラちゃんを隠しておけば良いけど……隠し場所あるかな?」

『隠し場所なんか、いくらでもある……行くぞ、咲姫。スタッフどもを襲って、アンドロメダ復活のためのマイナスエネルギーを集める』

サジタリウスが咲姫のハンターV Gに戻ると、咲姫は電波変換し

てミソラを抱え、どこかへ去っていった。

『どうすれば良いの……私1人じゃ何もできない……スタッフやミソラが危ないのに……!』

第24話 届かない声

「おい、ミソラちゃん見なかったか？」

「私も探してるんですけど……どこにもいないんです」

撮影現場では、スタッフがミソラを探していた。しかしどれだけ探しても、咲姫達に連れ去られたミソラを見つけることはできない。

「参ったなあ……外国での撮影だから、今日中に終わらせたいのに……」

『スタッフさん、今すぐ逃げて！』

展望台から急いで戻ってきたハープは、スタッフの1人に今すぐ逃げるように言う。

「おお、ハープ。どうした？ いきなり逃げるだなんて……それに、ミソラちゃんはどうした？」

『ミソラは……誘拐されたわ！ もうすぐ、誘拐犯がここを襲いに来る。あなた達も危ないの！』

「なんだって！？ くそ……許せん。そいつが来たら、1発ぶん殴って」

『早く逃げなさい！ あなたじゃ絶対勝てないわよ！』

「な、なんだよ……わかったよ……」

最後の1人になるまで残っていたそのスタッフは、ハーブに行く手を阻まれて仕方なくドンブラー村から離れていった。

『これでスタッフさん達は大丈夫……問題は、この後よね……』

オペレーターのミソラがいない今、ハーブに咲姫とサジタリウスを止める力は無い。ハーブ1人では、スタッフを逃がすための時間稼ぎすらできないのだ。

『こんなに恐怖を感じるのは、いつ以来かしらね……それほど、スバル君とウォーロックの存在は大きかったってことなの……？』

それからしばらくすると、電波変換した状態の咲姫がハーブの前に現れた。

今の咲姫は黄色い身体の胴体と左腕には白いアーマー、両足の膝から先は黒いアーマーをそれぞれ装備している。また、右手には銀色の弓を持ち、背後には電気的な矢が数本浮かんでいる。

「……にや？ スタッフらしき人が見当たらないなあ……キミが逃がしたのかな？」

『ごめんなさいね……あなた達の話、盗み聞きしちゃったわ』

電波変換した咲姫を前にして、ハーブは怯えていた。しばらくすると、咲姫の隣にサジタリウスが現れる。

『誰かと思えば……久しぶりだな、ハーブ』

『やっぱり、あんだだっただのね……今さら、地球に何しに来たの！』？

『フツ……知る必要は無いだろう？ お前は今、我々の行く手を阻んでいる。邪魔をする者は……ただ消えゆくのみだ。さあ、咲姫……最初の獲物は、ハーブだ』

サジタリウスが姿を消すと、咲姫は背後に浮かぶ電気の矢を1本持ち、右手に持つ弓を構える。

「キミに罪は無いけど、私達の邪魔をしちゃったからねえ……大丈夫、一瞬で楽になるから」

『あんだ達なんか……スバル君が、必ずぶっ飛ばしてくれるわ！』

「にはは、そりゃ〜楽しみだにゃー……サンダーアローー！！」

ハーブの言葉を聞き流した後、咲姫は弓の弦に掛けた矢を限界まで引き、ハーブ目掛けて放った。

『スバル君……！』

放課後。スバルは教室で帰る準備をしていた。ルナ達が待っているため、スバルは教科書などを急いで鞆に詰めている。

『スバル、ミソラからメールが来てるぜ』

そんな中、ウォーロックがハンターV.Gから出てスバルに話し掛ける。

「ミソラちゃんから？ な、なんだろ……」

スバルは机の上に置いていたハンターV.Gを操作し、ミソラから送られてきたメールを開く。

「えっ……！？」

『どうした？ なんて書いてあるんだよ』

メールの内容で驚くスバルを見て、ウォーロックは首を傾げる。その後、スバルからハンターV.Gを取り上げ、ウォーロックもメールを読み始めた。

『……スバル、こいつは……！』

「くっ……まさか、ミソラちゃんを狙うなんて……委員長、先に帰ってて！ ランさんも連れて行ってね！ 電波変換！！」

スバルはルナの返事を聞かないまま電波変換し、教室を飛び出していった。

「スバル君！？ 一体どうしたって言うのよ……」

第25話 謎の力

「むっ……また増えたよ、邪魔者……」

「……？」

ハーブは、咲姫が放った電気の矢には当たらなかった。ハーブの目の前に現れた1人の白い少女が、手に持つ杖で矢を弾き返していたのだ。

「キミは誰かな。そのウィザードの知り合い？」

「知らない」

「じゃあ、なんで守ったの？」

「知らない」

咲姫の2つの質問に、少女は同じ答えを無表情のまま返す。咲姫は苛立ちを表に出さないようにしながら、次の質問をする。

「……ここに、何しに来たの？」

「知ら」

「もういいッ！！ さっきから、その態度は何！？ 明らかに私の方が年上だよねえ！？ 本ツ当にム力つくんだけど！！」

少女の態度の悪さに、ついに咲姫の怒りが爆発する。普段あまり怒らない人ほど、怒ると意外に怖かったりする。

「……そのウィザード。2分あげるから、その間に消えなさい。響ミソラは展望台に隠されてるから」

『えっ？ ……なんだか、よくわからないけど……ありがとう』

少女の指示に従い、ハープは急いで展望台の方へ向かった。咲姫は特に追うそぶりも見せず、ただ目の前の少女を睨みつけている。

「2分……？」

「そう。ハープは2分で響ミソラを見つかる。正確には2分17秒……だから、それまで私があなただを足止めするの。あとは逃げるだけで私の仕事は終わり」

「ふうん……足止め、ねえ……できるもんなら、やってごらんよ！」

咲姫は再び電気の矢を持って弓を引く。そして少女に狙いを定め、矢を放った。

「……バトルカード」

「……！？」

少女は電気の矢を避けると、1枚のバトルカードを取り出した。それが使用された直後、咲姫はバランスを崩してその場に座り込んでしまう。

「あ……れ……？」

『どうした、咲姫？ なぜ座っている……早く立つんだ！』

「だ、ダメ……力が、入らない……！」

『なんだと？ ……お前、一体何をした！？』

少女がバトルカードを使った直後に、咲姫は全身の力が抜けて座り込んだ。何か攻撃を受けたわけでも無く、身体のどこにも痛みは無い。

「ここで教えたら、私達の未来が崩れる……だから教えない」

「私”達”……？」

「私達は見たまんまの行動をして、見た通りの未来を消化していくだけ……少しでもズレたら、すぐ脱線する……ここでの私の仕事は、もう終わり……2分経った。じゃあね……」

最後まで表情を変えないまま、その少女はドンブラー村から離れていった。

しばらくすると力が入るようになり、咲姫は立ち上がって少女が走り去っていった方を見る。

「なんなの、あれ……あのバトルカードのせい……？」

『思わぬ邪魔が入ったな……メールを送ってから、かなりの時間が経った。星河スバルが来る前にハープを始末してしまいたい所だが』

……どうやら、それは無理みたいだ』

咲姫の頭上に広がるウェーブロード上には、既にスバルの姿があった。スバルはウェーブロードから飛び降り、咲姫の前に着地する。

「ロック、あの人かな」

『ああ、そつだな……サジタリウス、お前なんだろ？』

『ウオーロック……意外と早かったな。飛ばして来たか？……まあ良い。響ミソラはハーブが探しに行っている』

ウオーロックとサジタリウスは、それぞれのオペレーターの隣に出てきて話を始めた。ハーブと同じで、ウオーロックもサジタリウスのことを知っているようだ。

『しかし、理解できんな……お前達は、なぜコメットと戦う？』

『なぜって、そりゃあコメットが地球侵略なんて考えてるからだろうが』

『……お前達に、コメットの真意は読み取れないか……俺達と勝負だ、ウオーロック。今、お前に邪魔されるわけにはいかないんだ！』

サジタリウスは姿を消し、その後で咲姫が弓を構える。

「キミのせいで、私達の計画がうまく進まないんだよ。せつかく地球を……うつん、なんでもない。とにかく、私達の邪魔をしないで！」

咲姫は限界まで弓を引き、スバル目掛けて電気の矢を放つ。バチバチと音を立てながら迫って来る矢を避けると、スバルは咲姫がいる方へ走り出す。

「オペレーターは、操られてるわけじゃないみたいだ……自分の意志で、FM星人に協力してるのかな。バトルカード、インビジブル！」

スバルの身体はバトルカードを使った直後に透明になり、咲姫からは場所が確認できなくなる。

「き、消えた!?!」

「バトルカード、ダミースパイダー！」

スバルの声とともに、上から3匹の黒い蜘蛛が咲姫の周りに落ちてくる。

「ひゃっ！ 蜘蛛!?!」

『落ち着け、バトルカードで現れた蜘蛛だ』

「こんなもの！ グランドループ！」

咲姫は真上に跳ぶと、真下目掛けて電気の矢を放つ。矢が地面に触れた直後、その矢を中心として円を描くように電気が発生し、3匹のダミースパイダー全てを同時に破壊した。

「完全破壊っ！」

『小細工は効かないぞ、ロックマン……!』

第26話 敵か味方か

スバルは電気属性の相手に有効な木属性のバトルカード、ダミースパイダーで攻撃を仕掛けた。しかしダメージは与えられず、咲姫によって簡単に破壊されてしまう。

「ダミースパイダーは効かないか……じゃあ、これだ！ バトルカード、ブレイクサーベル！」

『……咲姫、右だ』

透明になっているスバルは、気づかれないうちに咲姫の近くまで来ていた。そのままバトルカードで左腕にブレイクサーベルを装備し、咲姫に斬りかかる。しかし声で気づかれてしまい、咲姫は身体を右に向けて左腕を前に出す。咲姫の左腕は厚い装甲に覆われていて、ガードを破って攻撃できるブレイクサーベルでさえも簡単に受け止めてしまった。

「見い〜つけたっ」

咲姫は左手でスバルのブレイクサーベルを掴み、弓を持つ右手で電気の矢も持った。

「この辺に……いるのかなっ!?!」

「なんだか当たりそうな雰囲気……そうはいかないよ!」

咲姫は電気の矢をスバルの身体に突き刺そうと、矢を持つ右腕を

振り下ろす。インビジブルで透明状態になっている間は、ほとんどの攻撃が当たらない。咲姫がそれを知らないとは考えにくい。それでも攻撃を仕掛けてくるということは、この電気の矢は透明状態の相手にも当たるのではないか。そう考えたスバルは、振り下ろされる咲姫の右腕を空いている右手で掴んで止めた。

「よし、止め」

「うー、にゃあッ!!」

「ぐっ!?!」

スバルは咲姫の右腕を掴んで安心していた。インビジブルの効果が切れたのは、その直後のことだった。咲姫はその一瞬を見逃さず、スバルの腹部に至近距離から膝蹴りを決める。

「よく見えるよ……星河君ッ!!」

咲姫はスバルのブレイクサーベルから手を放すと、再びスバルの腹部に膝蹴りを入れる。スバルはバランスを崩しながらも、近くのウェーブロードに着地した。

「ひ、膝蹴りつて……」

「サンダーアロー!」

「うわっ!?! バトルカード、バリア!」

スバルは、咲姫が放った電気の矢をバリアで防ぐ。やはり敵は待ってくれないのだと、スバルは改めて認識した。

「早く倒れちゃいなよ。さあ早く！」

「あれ……なんか、焦ってる？」

「当たり前だよ！ キミと響ミソラが並んだら、今の私に勝ち目は無いんだから！」

（さっきの変な子に体力を半分近く持っていかれた直後なのに、2対1はキツすぎる！）

見た目では平然としている咲姫だが、実際は体力を約半分失っている。そんな状態で、あまり体力を消耗していない2人を相手にするのは、あまりにも無謀なことだ。

「どうする……さっさと終わらせないと、ハーブが響ミソラを連れて戻ってきちゃう……！」

「2人並んだら勝てない、か……違うな。お前は、星河スバル1人が相手でも勝てない」

突然どこからか聞こえてきた少年の声。それと同時に、近くの建

物の壁に大きな円形の黒い穴が空いた。その奥には、ずっと見続けていると気分が悪くなりそうな奇妙な空間が広がっている。

「な、何……!?!」

「ロック……あの黒い穴、なんか見覚えがあるんだけど……」

『そりゃそつだろうな……気を付けるよ。あいつが……来る!』

しばらくすると、黒い穴の奥から1人の少年が出てきた。

逆立った白い髪や紫色の大きなバイザー、黒い身体が特徴の少年は、咲姫を睨みつけながら口を開く。

「群れを作らなければ生き残れない人間……お前は、いつまで経っても弱いままだ。そこにいる星河スバルにも勝てない」

「ムカツ！　なんだか生意気な少年だねえ！　キミも星河君の仲間!?!」

「俺には仲間など必要無い……俺は孤高を貫き通し戦う。だからこそ、仲間との絆を大切にする星河スバルが憎い」

その少年の正体は、スバルもウォーロックも知っていた。ある出来事から絆を嫌うようになった、「ムー」という一族の生き残り。彼とスバルはそれぞれの力を信じて戦い、お互いをライバルと認め合うようになった。

「星河君の味方でも、私の味方でもないみたいだねえ。キミ、名前は何?」

「シロ……」の姿の名は、ブライだ」

第27話 孤高の力

「ソロ……！」

「お前の波長を感じたから来てみれば……苦戦しているようだな……？」

スバルと咲姫の前に突然現れたのは、ムー族の末裔であるソロだった。

「波長を感じたから来たって……また戦う気？」

「それも良いが……」

そこまで言うと、ソロはスバルに向けていた視線を反対側にいる咲姫に向ける。そして、再び喋り始めた。

「まずは、余計な邪魔が入らないようにするのが先だ」

「やっぱり戦う気だよ……もしかして、一緒に戦ってくれるの？」

「勘違いするな。お前の力など必要無い……」

ソロは、炎のような紫色の電波を纏う右手を上には伸ばす。すると、ソロの頭上に紺色のウィザードが現れた。

『……………』

「この程度の相手なら、俺1人で十分だ。行くぞ、ラプラス」

その後、ラプラスと呼ばれた紺色のウィザードは剣に姿を変える。ソロはその剣を右手で持つと、咲姫の方に向けた。

「ウィザードが……武器に変化した!？」

「こいつはウィザードでもあり、武器でもある……せいぜい俺を退屈させないことだな」

「全く、どいつもこいつも私達の邪魔ばかり……そこまで言うなら、キミから倒してやる!」

ソロはラプラスブレードを、咲姫は弓をそれぞれ構えた。その様子を見て、スバルは後ろに数歩下がる。

「ロック……」

『ああ……俺らは、下がってた方が良さそうだ』

間もなくソロと咲姫の戦いが始まり、スバルはそれを黙って見守ることにした。

『ミソラ……どこ……?』

その頃ハーブは、今だにミソラを見つけられずにいた。突然現れ、

すぐに去っていった少女は、ハーブがミソラを見つけるまでに2分ほどかかると言っていた。しかし、そこから既に5分以上が経過している。

『も〜……どこにいるのよお……ミソラー！ いるなら返事しなさいー！』

「はいー！」

『はあ、やっと見つけ……って、ええっ!?!』

ハーブが大きな声で呼ぶと、ミソラはタイミング良く昇降機で展望台の上に来た。

『み、ミソラ……?!』

「私ね、気がついたら昇降機に乗ってた！ それで、ハーブの声が聞こえたから上がって来たの」

『……全く隠してないじゃない、サジタリウスのヤツ……!!』

サジタリウスに対する怒りを抑えながら、ハーブはミソラのハンターV.Gに戻る。

『ミソラ！ 村の方に戻るわよ!』

「え？ う、うん……」

ミソラは今の状況を理解できないまま、スバルとソロ、そして咲姫がいる村の方へ向かって走り出した。

「ねえ、何が起きてるの？ 女の子が落とした眼鏡を探しに展望台に行つて、そこからの記憶が無いんだけど……」

『敵よ！ サジタリウスっていうFM星人が攻めてきたの！』

「FM星人！？ どうして今になって……とにかく、急がないと！」

それからしばらく走り、ミソラは村に戻ってきた。そこにいた3人の姿を確認するのは、そう遅いことではなかった。

「あつ……スバル君！」

「ミソラちゃん！ 無事だったんだね……」

「うん。それより、どういうこと？」

ミソラはスバルの側に駆け寄つた後、スバルに向けていた視線をソロに向ける。

「あれって……ソロ、だよな？」

「また僕と戦いに来たみたいなんだ。それで、あの女の子は邪魔だからって……」

「そう、なの……？」

「1人で戦うみたいだから、邪魔しない方が」

スバルがそこまで言った、その時だった。ソロと咲姫がいた方が

ら、何かが勢い良く地面に叩きつけられるような激しい音が響き渡る。ソロがラプラスブレードを地面に叩きつけた音のようだ。しかし、その攻撃は避けられてしまったらしく、咲姫の身体には傷一つ付いていない。

「外したか……」

「な……何、今の……無理でしょ！ 勝てるわけ無いって！」

『なんだ、あの力は……星河スバルとは、性質が違う……？ 咲姫、距離を取りながら攻撃だ。接近戦では勝ち目が無い！』

サジタリウスの指示通り、咲姫は急いでソロから離れる。ソロは接近戦がメインのため、逃げる咲姫を追う。

「やっぱり追いかけてくるよね……サンダーアロー！」

咲姫は後ろを向き、ソロ目掛けて電気の矢を放つ。しかし、その攻撃は突如現れた青く光る円形の壁で防がれてしまう。

「甘いな……孤高の力が生み出す電波障壁は、どんな攻撃でも防ぐ」

「まあ、めんどくさいなあっ！ クイックトライデント！！」

次は電気の矢を3本持ち、それらを同時に放つ。3本の矢は、それぞれが別の方向からソロに襲い掛かる。

「狙いを1つに絞らせない！ これなら……」

「少しは考えたようだが……無駄だ」

ソロは電気の矢を十分に引き付けた後、ラプラスブレードを大きく振るう。その時の風圧により、電気の矢は3本とも吹き飛ばされてしまった。

「行け、ラプラス！」

電気の矢が消滅した後、ソロはラプラスブレードを咲姫目掛けて投げる。ブーメランのような軌道で咲姫の横を通り過ぎると、ラプラスは剣からウィザードの姿に戻った。

「わっ!?!」

『……………』

ラプラスは咲姫の両肩を掴み、動きを止める。その間にソロは距離を縮め、攻撃へと繋げる。

「にゃッ！ 女でも容赦しないって目だ！ 離せー!！」

「ブライバースト！」

ソロは拳を振り上げ、紫色の衝撃波を放つ。咲姫はラプラスによって動きを封じられているため、その攻撃を避けることができない。

「くっ……………後ろに自分のウィザードがいるのに……………」

「俺もバカではない……………ラプラスには当たらないようにしている」

「へえ……………やっぱりウィザードは大事なんだ。じゃあ、キミもウイ

ザードとの絆を大切にしてるってことじゃない？」

「その考えも、全て間違いとは言えないが……やはり、少し違うな」

ソロは再び攻撃しようと、紫色の電波を纏う右手に力を込める。その時、咲姫は何かに気づいて笑みを浮かべていた。

「人間とウィザードの連携、なかなか良いね……2対1か。ちょっとキツイのかなあ……2対2だと良いのかな？」

「何が言いたい……？」

「そのまんまの意味だよ……1人じゃダメでも、もう1人増えれば勝てる……」

その数秒後、ドンブラー村の周りに無数の水の柱が立つ。自然現象でないということは、誰が見ても明らかだ。

「……？」

「よおー、さっちゃん！　なんだかピンチだねえ、助けてやろうかあ？」

「やっぱり水野さんだー！」

水の柱のうちの1本が、蛇のようにうねりながらソロと咲姫に近づいてくる。その柱の上には、咲姫の仲間である薫が立っていた。

薫は電波変換していて、青い身体に、胴体は紺色のアーマー、両腕の肘から手首までの範囲と両足の膝から先は水色のアーマーをそ

れぞれ装備している。また、黄緑色のバイザーで目を覆い、水色の表紙の大きな本を持っている。

「さあーで、少年。私の仲間をずいぶん可愛がってくれたようだねえ」

「邪魔をするなら、お前も斬る……!!」

「……誰に向かって言ってるのかな？ さっちゃんを逃がしてくれらるってんなら、私は何もしないんだけど？」

「ブライバースト！」

薫の言葉を無視して、ソロは咲姫に繰り出したのと同じ攻撃を仕掛ける。それを見て薫は溜め息を吐き、手に持つ本を開いた。

「……ミラージュー！」

薫は攻撃を避けようとせず、本を見ながら叫んだ。すると、ソロの攻撃は薫の身体をすり抜けてしまった。

「何……!!?」

「星河君とのバトルもあるし、あまり手の内明かしたくないんだけど……まあ良いか。スラッシュー!!」

その時、水の柱が全て剣のような形に変わる。何十メートルもの大きさを誇る水の剣は、その大きさに似合わず猛スピードでソロに襲い掛かる。

「ほらほらあ！ さっちゃんを逃がしてやりなよあ！ 串刺しにして海に沈めちまうぞー!?」

「チツ……ラプラス、そいつを放してやれ！」

攻撃を避けていたソロは、無限に増え続ける水の剣を見て仕方なくラプラスに指示を出す。ラプラスは咲姫の肩から手を放し、それと同時に咲姫は薫の側に駆け寄る。

「ありがとうー！」

「良いつてことよ！ それじゃあ帰るか。なんか失敗してばかりだなあ、次は上手く行くと良いね」

薫は水の剣を全て普通の水に戻し、咲姫を連れてドンブラー村から離れていった。

「……この俺が、手も足も出ないだと……?」

第28話 戦う目的

「ソロ！ 大丈夫？」

「お前ごときに心配される筋合いは無い」

薫と咲姫が去っていった後、スバルはソロのもとへ駆け寄る。ソロは傷を負っているわけでは無いが、電波変換した薫に手も足も出なかった。それが悔しいのか、今のソロは機嫌が悪い。

「さっきの人、強かったね……」

「次に戦うことがあれば、必ず勝つ……だが、まずは……」

ソロは再び剣に変化したラプラスを右手に持ち、スバルから離れる。

「もう1度勝負だ、星河スバル」

「どうして……一緒に戦おうよ！ 今だって、あの2人と戦ったじゃないか！」

「俺はただ、ムーの遺産があるこの地球をヤツらに奪われたくないだけだ。お前と肩を並べて戦うつもりは無い」

ソロはFM星人達と戦う意志はあっても、スバルとともに戦うつもりは無いようだ。

「お前に負けて、俺は絆の力を認めたのかもしれない。だが、俺が認めたのは力だけだ。馴れ合うことまでは認めていない」

「力だけ……でも敵の目的まで知ってるなら、やっぱり一緒に戦った方がよいよ！」

「そこが甘いと言っている。さあ勝負だ、星河スバル！」

ソロは剣を強く握り、スバルがいる方へ走り出す。もう何を言っても聞きそくに無い。

『クツ……スバル！　ここは戦うしか無さそうだぜ！』

「ソロ……」

「……忘れられてる」

『一番の被害者はミソラなのに……』

その頃ミソラとハーブは、スバルとソロの戦いを遠くで見ている。2人の戦いを何度も見ていて興味が沸かなくなってきているのか、たまに欠伸をすることもある。

「もうどっちも正しいってことで良いと思うんだけど。あんなに戦って何かが変わるのかな」

『まあ、少なくとも……戦っただけじゃ、どっちが正しいなんてわかるわけ無いわね』

「でも……なんとなく、楽しそうに見えるよ?」

ミソラはスバルとソロの動きを目で追いながら微笑む。戦う2人の表情は真剣そのものであったが、ミソラには2人が戦いを楽しんでいるようにも見えていた。

「何回も戦ってるのに、いつでも真剣に本気で戦えるっていうのは……やっぱり、その相手との戦いが楽しいからなんだと思うの」

『そうねえ……これだけ戦って飽きないんだから、そうなのかもしれないわね……』

戦い自体に興味が無ければ、それ以外のことで盛り上がる事ができる。今のミソラとハーブの場合、スバルとソロが楽しそうに戦っていることで盛り上がっていた。こちらは表情まで楽しそうにして話している。

そんなことも知らず、スバルとソロは戦い続けていた。

「バトルカード、インパクトキャノン!」

スバルはバトルカードを使い、ソロに攻撃を仕掛ける。インパクトキャノンは前方を攻撃するキャノン砲で、着弾すると大爆発を起

こす。しかし、その攻撃はソロの電波障壁によって防がれてしまう。着弾時の爆発でもダメージを与えられないが、スバルの狙いは攻撃以外にあった。

「爆発で視界が……！」

「バトルカード、プラズマガン！」

「何ッ！？」

着弾時の大爆発で視界を遮られ、ソロからはスバルの位置が確認できなくなっていた。スバルはそれを利用し、当たった相手を麻痺させるプラズマガンでソロに当てる。

「バトルカード、コガラシ！」

「チイツ……」

次に、スバルは木属性の竜巻を発生させるコガラシで攻撃する。電波障壁はソロの意思とは関係無しに一定時間で復活するため、スバルは続けてバトルカードを使う。

「バトルカード、ワイドウェーブ！」

「甘いッ！」

麻痺から解放され、ソロは剣を振ってワイドウェーブによる水の衝撃波を打ち消す。

「油断したか……」

「ソロは強い。でも強い分、弱点も多いんだ」

「ならば、弱点を突かれる前に叩き潰すのみ！」

ソロはラプラスブレードを振り上げ、スバル目掛けて三日月型の衝撃波を飛ばす。

「バトルカード、レイブレイド！」

バトルカードのレイブレイドは、攻撃にも防御にも使える。何も無い所で振ると、その斬撃が一定時間残り続け、相手の攻撃を防ぐ壁になる。それを利用して、スバルはソロが放った攻撃を防いだ。

「変わったバトルカードを持っているな……ならば、これはどうだ？ グラウンドブレイクソード！」

レイブレイドを見て驚きながらも、ソロは剣を構えて高く跳ぶ。そして、落下の勢いを利用してながら剣を振り下ろした。

「これは無理か……バトルカード、インビジブル！」

「チツ……消えたか」

ソロの攻撃が当たる直前に、スバルはバトルカードを使って透明になり、その間にソロから離れる。

「バトルカード……アイスメテオ！」

「電波障壁の存在を忘れたか……？」

スバルは氷の塊を降らせて攻撃するが、電波障壁のせいでソロには当たらなかった。

「簡単に勝てるとは思わないことだな……」

第29話 殺気

「連続で攻撃しないと、電波障壁が復活して攻撃が当たらない……でも、近づくと反撃を受けやすい……かと言って、遠距離攻撃の武器も当たりにくい……」

『ソロのヤツ、また強くなったな……どうする、スバル？』

スバルはインビジブルで透明になり、ソロから離れた。しかし、いつまでも逃げていてはソロには勝てない。体力面で勝るソロ相手に長期戦は危険であり、スバルはなるべく早く勝ちに行かなければならない。

『エースPGMが使いモンにならねえ今、こっちはバトルカードで攻めていくしかねえってのに……！』

「仕方ないよ、メテオGはもう無いんだ……インビジブルの効果が切れるまで、ひたすら攻撃だ！バトルカード、ヘビードーン！」

スバルがバトルカードを使うと、ソロの頭上に巨大な立方体の石像が現れた。

「……………！！」

ヘビードーンによる攻撃も電波障壁で防がれてしまう。しかし石像自体は消えず、そのままソロにのしかかる。

「クッ……………」

「バトルカード、テイルバーナー！」

動けないソロ目掛けて、スバルは一直線に伸びる炎の攻撃を繰り出す。その炎は、ソロが石像を退けて立ち上がるのと同時にソロに当たった。

「麻痺、だと……！？」

（……マヒプラスか！）

スバルはテイルバーナーと一緒に、マヒプラスというバトルカードも使っていた。マヒプラスは、直前に転送した攻撃カードに麻痺効果を与える。これにより麻痺効果が付いたテイルバーナーを受け、ソロは麻痺してしまった。

「勝てる！ バトルカード、ウイングソード！」

ソロがいる方へ走りながら、スバルはバトルカードを使う。インビジブルの効果が切れていないために、ソロからはスバルの姿が確認できない。その間に一気に距離を詰め、両手に装備したウイングソードで斬りかかった、その時だった。

「……！ ハアッ！！」

「ッ！？」

麻痺から解放されたソロが、スバルの方を向いて剣を振る。いつの間にかスバルのインビジブルの効果が切れていて、ソロの攻撃はスバルに当たってしまう。

「ぐっ……!?」

「グラウンドブレイクソード!!」

スバルがバランスを崩した所に、ソロは続けて攻撃を仕掛ける。しかし、その攻撃はギリギリの所で避けられてしまう。

「おかしい……効果が切れるのが早すぎる……」

『……スバル! バトルカードのことで、小鳥が何か言ってたはずだ!』

「小鳥ちゃんが……そうだ、光属性のバトルカード! 使ったらインビジブルが強制解除になるんだ!」

スバルが小鳥から貰った、光属性という特殊な属性を持つバトルカード。それは苦手とする属性が無く、無属性の相手には通常より大きいダメージを与える。しかし、使うと自分のインビジブルの効果失われるという共通のデメリットを抱えている。それによりスバルのインビジブルの効果は切れ、ソロの攻撃が当たるようになってしまったのだ。

「すっかり忘れてた……そうだよ、だから光属性のバトルカードを使う時はインビジブルを使わなかったんだ!」

『もう忘れんなよ! ほら、また来たぜ!』

前を見ると、ソロが剣を強く握ってスバルの方へ走ってきていた。

「デメリットがある分、強いはずなんだ！」

スバルは片方の剣でソロの剣を受け止め、もう片方の剣でソロの身体を斬りつける。

「チイツ……！」

(2本の剣……こちらが不利か……)

「いや、違うな……有利不利など無い!!！」

ソロは右手に持っていたラプラスブレードを左手に持ち替え、空いた右手を前に出す。するとソロの目の前に電波障壁が現れ、さらにそこから何かの柄が出てきた。ソロはそれを右手で掴み、一気に引き抜く。

「そ、それは……!?!？」

「ブライソード……！」

ラプラスを従える前も、ソロは剣を武器に戦っていた。それが、この銀色の刃や薄紫色の柄が特徴のブライソードで、ラプラスブレードよりも素早い攻撃ができる。

「お前は、剣で俺に勝つことはできない……それを思い知らせてやる」

『スバル、負けんなよ』

「わかってる。絶対に勝つよ」

2つの刃を持つ2人は、それぞれ前方へ走り出そうとした。しかし、その足は数歩進むだけで止まってしまふ。

「……？」

「……誰かが、いる……？」

何かの気配を察知して、スバルとソロは辺りを見回す。しかし、特に目立った変化は無い。

「気のせい、かな……」

「いや、僅かだが殺気を感じる……何かが近くにいる証拠だ……」

(電波体の気配は無い……人間が放つ殺気だとしても、何かが変わり……)

「……チツ。邪魔が入ってばかりだな……」

ソロは真上に大きく跳び、近くのウェーブロードに乗った。そこから地上を見下ろし、殺気の正体を探し始める。

「……ロック」

『さつきから波長を探ってみてるが……近くに電波体の気配は無いぜ』

ウォーロックも電波体の波長を探っていたようだが、それは全く感じられないようだ。

「電波体がないなら、コメットの仲間じゃないのかも」

「スバル君、後ろー!!」

突然聞こえてきた、ミソラの声。それに驚きながらも、スバルは後ろを振り向く。そこには、見慣れない1人の電波人間が立っていた。

全身に黒いアーマーを纏うその電波人間は、頭にはサソリのハサミに似た形状の防具を着け、顔が見えない。そしてその防具の奥の目は、不気味な赤い光を放っている。また、後頭部にはサソリの尻尾に似たものが付いている。

「い、いつの間に……!!? 誰だ!!」

「……やめておけ。武器は下ろした方が良い……」

「え……?」

その電波人間は、どうやらスバルと戦うために来たわけではないらしい。しかし、その声が聞こえていなかったソロは両手の剣を強く握り、ウエーブロードから飛び下りた。

「……聞こえていなかったか……」

「お前が殺気の正体か。俺の戦いの、邪魔をするなッ!!」

ソロは落下の勢いを利用しながら、紫色の光を纏う2つの剣を振り下ろす。しかし、その剣は両方とも片手で止められてしまった。

「な、何ッ!？」

「……バトルスタイルの改善が必要だな……何の考えも無く敵に近づくのは危険だ……結果、お前はいつ殺されてもおかしくない状況に陥ってしまった……」

「クッ……お前は何者だ……!？」

ソロが尋ねると、電波人間は剣から手を放す。そして、ソロが十分に離れたことを確認してから再び喋り出す。

「俺は……コメットの仲間だ……」

第30話 実力の差

「コメットの仲間……」

突然現れた電波人間は、やはりコメットの仲間だった。

「薫と一緒に、閃堂を助けに来たが……薫1人で良かったようだな……」

「薫……さっきの、水を操る人？」

「あんな派手な技を見せるヤツだ、離れていないと俺まで巻き込まれる……だから隠れていた」

その電波人間は咲姫を助けるため、スバルとソロが戦う前から薫と一緒に村に来ていた。しかし薫の攻撃に巻き込まれないように、さっきまで離れた場所から見ていたようだ。

「さっきの2人は帰ったよ。なのに、どうして残ってるの？」

「敵の実力を見るのも必要だろう……俺がいるとも知らずに、お前達は出し惜しみせず全力で戦っていた……」

「……!!」

「ソロとか言ったか……その電波障壁は厄介だな。それ以外は完全な攻撃型……そして星河スバル。お前に関して注意すべきは、その光属性のバトルカードだけ……両者とも、今の実力で勝てるの」

は白雲と閃堂くらいか。他には勝てないな……」

スバルとソロは、敵の存在に気づかないまま全力で戦っていた。その結果、スバルもソロも手の内のほとんどを明かしてしまっている。コメットの仲間だと言う電波人間は2人の実力を見て、2人とモカイトと咲姫にしか勝てないと判断した。

「もう、コメットの邪魔はしない方が良い……全てが終わるまで、大人しくしている……」

「それはできない！ アンドロメダが復活したら大変なことになる……それだけは阻止しないと！」

「……お前は？ 引き続き邪魔をするのか、大人しくしているのか……」

電波人間はソロの方を向いて尋ねる。すると、ソロは剣を強く握って電波人間を睨みつけた。

「同じ、か……このまま帰るつもりだったが、実力の差を見せてやるのも良いな……俺は志場凶哉。この姿の名は、スコープオン・インフェルノ……さあ、どこからでも来い。お前達に攻撃の機会を与えた上で、なるべく一撃で終わらせる……」

凶哉と名乗る電波人間が放つ異様な殺気が増幅し始める。しかし凶哉は直立不動で構えたりもせず、とても今から戦う者の姿とは思えない。

『気をつけるよ、スバル……あんな意味のわからねえヤツには、迂闊に近づかない方が良い』

「わかってる。ソロも様子を見ながら……って、ソロ!？」

スバルの言葉を見無視し、ソロは凶哉がいる方へ走り出す。スバルと一緒に戦う気が無いというのは本当らしい。

「最初はお前が相手か……どんな手で来る？」

「黙れッ！」

ソロは高く跳び、凶哉の頭上から2つの剣を振り下ろす。この攻撃は凶哉に止められたばかりだが、それでもソロに迷いは無かった。

「ブライブレイクッ！」

「学習能力無し、か……戦場で真っ先に死ぬタイプだな……」

やはりと言うべきか、ソロの攻撃は凶哉に止められてしまった。今回は止めるだけでなく上空に放り投げ、後頭部のサソリの尻尾をソロに向ける。

「もう少し考える力を身につけて、出直してこい……」

尻尾で狙いを定めると、次に凶哉は両手をソロがいる方へ伸ばす。その直後、尻尾と両手の先に赤い光が集まり始めた。

「手加減はしない。実力の差を見せるのが目的だから……ダークネス・バニツシャー……!!」

「……ッ!?!？」

尻尾と両手の3つの光から細い光が伸びて三角形を形成し、次の瞬間にはそこから巨大なレーザーが放たれる。それは空に向かって一直線に伸び、僅か数秒でソロを飲み込んだ。

「ぐっ……あ……！」

「……狙いが甘かったか……？」

落下してウェーブロードに叩きつけられたソロが生きていることを確認した後、凶哉は地上にいるスバルの方を向く。

「まあ良い。しばらくは動けないだろう……どうした。お前は攻撃しないのか……？」

「……」

「地球を3度救ったといっても、心は小学生か……怖いなら変身を解け。今は見逃してやる……」

凶哉は、スバルの身体が小刻みに震えていることに気づいた。ソロを一瞬で戦闘不能に追い込んだ凶哉に、恐怖を感じているのだろう。

「あいつも生きています。一撃で殺せる相手では無かったらしい……だから、早く変身を解け。そうすれば、俺はコメント達の所に戻る」

「……僕は……お前達を、止めてみせる……！ 絶対に……！」

その後スバルは変身を解く。それを見て凶哉は溜め息を吐き、何

も言わずに村から去っていった。

「スバル君！」

「……ダメだ。今の僕じゃ、あの人には勝てない………ミソラちゃん、ソロの傷の手当てをお願い………」

「……うん」

ミソラは電波変換してハープ・ノートになり、ウエーブロード上で倒れているソロのもとへ向かった。

『スバル……』

「もう、大丈夫………さっきの赤いレーザーで、嫌なことを思い出しちゃったよ………ソロが生きてて、本当に良かった………」

第30話 実力の差（後書き）

凶哉の細かいキャラ設定にも変更点があります。

と言うより、ほとんどのオリキャラは設定変更を受けています。

次回からまた別の話に変わります。

第31話 久々の日常生活

咲姫との戦いから数日、コメット達は目立った行動を見せず、久々にスバルのもとに日常が戻ってきた。

しかし今までとは違い、毎日を笑って過ごせるわけでも無かった。

コダマ小学校の6年A組。この教室の自分の席に座り、スバルは1人静かに考え事をしていた。

『……………なあ、本当に大丈夫か？』

「うん……………ソロもミソラちゃんも無事だし、みんな帰ってこれたし……………ただ、ちょっと気になることがあって……………」

『……………暁か？』

ウォーロックが尋ねると、スバルは静かに頷く。凶哉がソロに放った赤いレーザーを見たスバルの頭には、ある人物の姿が浮かんでいた。

暁シドウ。サテラポリスのエースとも呼ばれた、うまい棒という菓子が好きな青髪の青年。彼はディーラーという犯罪組織を壊滅させるため、スバルとともに戦っていた。しかし、戦いの中で大きな

爆発に巻き込まれて行方不明となる。その後、彼の姿を見た者はいない。

『あの後、メールが送られてきただろ？ 信じたくねえのはわかるが、あいつは……』

「それは、そうだけど……」

シドウは自分が死んだ時に、特別なメールがスバルに自動で送られるようにしていた。そのメールがスバルのハンターV.Gに届いたということは、シドウが死んだということでもある。

「暁さんがいたから、僕はディーラーに勝てた……その暁さんがいない今、どうすればコメツト達に勝てるのかな……」

『お前自身が、強くなるしかねえな……あの凶哉ってヤツが言ったことも、嘘じゃなさそうだ……』

「僕やソロが、トーナメントで見た人と村で戦った人にしか勝てないってこと？ ……まあ、あれだけの力を見せられたらね。コメツトにも負けたし……」

スバルはカイトと咲姫以外にも薫と凶哉、そしてアリスの実力を見ている。その3人はカイトや咲姫とは比べものにならない強さだった。まだ戦う姿を見ていない薫とピスケスの実力も、その3人と同程度と考えると良いだろう。

『まあ、今考えても仕方ねえだろ？ 焦らず、少しずつ強くなっていけよ』

「そうだね……頑張ってみるよ」

「……あ、終わった？」

それから間もなく、隣の席に座る小鳥が話しかけてくる。どうやら、スバルとウォーロックの話が終わるまで待っていたようだ。

「どうしたの？ 宿題なら自分の力でやった方が良いよ？」

「えー、ちよつとくらい良いじゃん……って違うよっ！ 宿題は光ちゃんに押し付けたから大丈夫として、今は別のことで用があるのっ」

「だから宿題は自分の力で……まあ光さんなら良いか。それで、用って何？」

スバルが尋ねると小鳥は一度周りを見て、誰も話を聞いていないことを確認する。その後、顔をスバルの方に近づけて小声で話し始める。

「ふっふっふ、実はね……今度の土曜日、スバル君とお出かけしたいですよっ」

「小声で話すことかな……2人だけで？」

「あと光ちゃんも引っ張ってくよっ」

(どうやら光さんは強制連行らしい)

小鳥は、次の土曜日にスバルや光と一緒にどこかへ行きたいらし

い。小声で話すのは、スバルと光以外は連れて行きたくないからだろう。

「それで……スバル君。どう？ 空いてる？」

「うん、良いよ。どこに行くの？」

スバルが聞き返すと小鳥はスバルに近づけていた顔を離し、その後で再び口を開く。

「んー……まあ、ちょっと3人で気分転換したくて……ドリームアイランドって所に、ね……」

「ドリームアイランドか……あそこは良いよね。綺麗な花畑があるし、海も見えるし……」

ドリームアイランドには公園とゴミ集積所があり、公園では花畑や海を見ることが出来る。隣のゴミ集積所の音も聞こえてこないため、気分転換には最適な場所だ。

「えっと、じゃあ……楽しみにしてるね！」

「……？」

(そういえば……いきなり気分転換なんて、どうしたのかな……)

第32話 仕返しには……

そして、数日後の土曜日。約束通り、スバルは小鳥と光の家に向かっていた。

『結局、気分転換の理由は聞けなかったな』

「そうだね。あの小鳥ちゃんが気分転換なんて、何かあったのかな……」

『あいつとの会話の中で、自然に聞き出すしかねえか……？』

小鳥が自分の口から「気分転換したい」と言うことは少ない。そのため、スバルもウォーロックも小鳥のことを心配していた。

ただ単に出かけたいというだけなら特に問題は無いのだが、何か嫌なことがあったとしたら放ってはおけない。

そんなことを考えているうちに、スバルは小鳥と光の家の前に辿り着いた。中からバタバタと誰かが走り回る音が聞こえるような気もするが、スバルは気にせず呼び鈴を鳴らす。

「あっ、スバル君！」

しばらく待つと、小鳥が光を引っ張って家から出てきた。

「おはよう、小鳥ちゃん。あ、光さんも」

「だんだんボクの扱いが酷く」

「じゃあスバル君、早速行こうか！」

「……もう諦めよう」

それから光が抵抗することは無くなり、3人はウェーブライナーを使ってドリームアイランドへ向かった。

「……はいっ！ というわけで到着！ 初めてのドリームアイランドー」

「へえ……小鳥ちゃん、ドリームアイランドには来たこと無かったんだ」

「ボクも初めて来た……自然がいっぱい良い所だね」

ウェーブライナーから降り、スバル達はまっすぐ公園に向かった。このドリームアイランドに初めて来た小鳥と光は、目を輝かせながら辺りを見回している。

「スバル君！ とりあえず案内よろしくね！」

「案内するほどじゃないと思うけど……」

スバルは苦笑いしながら、小鳥と光の前を歩き始める。

「とりあえず、この辺が遊び場で……階段を上れば、花畑があるんだ」

「うわあ〜……！」

「綺麗……！」

スバルは花畑の間を通る道で立ち止まり、後ろにいる小鳥と光の方を見る。その目はより一層輝きを増していた。

「……2人とも、こっちに来て。向こうに座る場所があるから、そこで休憩しよう」

3人は再び歩き始め、間もなくその先にある広場に辿り着く。そこにあるベンチに小鳥と光を並んで座らせると、スバルは少し離れた場所で海の方を見る。

『……聞かないのか？』

「なかなか、難しいね……あんなに楽しそうにしてるのに、別の話なんてできないよ……」

『ここにいるのは、小鳥と特に仲が良いヤツだけ……聞けば答えてくれそうなんだけどな……』

それからしばらく、スバルは花畑を見る小鳥と光を遠くから見ている。ゴミ集積所が隣にあるというのに、聞こえてくるのは葉を付けた木々が風で揺れる音や波の音、そして楽しそうに話す2人の少女の声だけで、ゴミ集積所の方からは音が全く漏れてこない。

「……よしっ」

このままでは理由を聞けないまま終わってしまうと判断し、スバルは小鳥の側に歩み寄る。

「小鳥ちゃん。いきなり気分転換したいなんて言うけど……まさか、何か嫌なことでもあった？」

「えっ？ ……ううん、別に嫌なことなんて無いよ？ 一度、ここに来てみたかっただけ……」

「そう、なの……？」

「うん！ じゃあ私、向こうの広場にも行ってみるね！」

小鳥は満面の笑みを浮かべて質問に答え、その後で花畑の方へ走り去っていった。

「……小鳥、最近なんか変じゃない？」

「本人は何でも無いって言うてるけど……やっぱり、何かあるよね？」

「うん……でも、本当に何も嫌なことは無いみたいで……」

小鳥の異変には、スバルだけでなく光も気づいていた。しかし一緒に住んでいる光でさえ、その原因は今もわからないままだった。

「まあ、よくわからないヤツだし……今回も、きっと大丈夫だよ。」

何か飲む？ 向こうに自販機あったから、買ってくるよ」

「ありがとう。僕は何でも良いよ」

「小鳥は……」

「……一応、1人にさせておこう」

光は小さく頷き、飲み物を買ったために自販機がある方へ走り去っていった。

『女に奢らせるのか』

「そうだね、でも光さんだから良いんだよ」

(確かに扱いが酷くなってるな……)

「さうて、どれにしようかな……星河の好みとか知らないなあ……」

自販機の前で、光は何を買おうか迷っていた。その後の対応に困るため、「買ったものがスバルの口に合わなかった」という事態だけは何としても避けたい。

とは言ったものの、この自販機では20種類を超える数の飲み物が販売されている。光は自分が飲む分も、すぐには決められずにい

た。

「ん〜……にがりソーダ。まずそんな名前だな……ぶどうコーヒ〜。逆にどんな味か気になるな。他には……噛むヨーグルト。噛むものがなぜ売っている……よし、ボクの分は決めた！」

目に止まった飲み物に片っ端から突っ込んでいく中、光は自販機のボタンを押して自分が飲む分を買った。

「やっぱりこれだね……緑茶。普通すぎて逆に笑えない。星河には何を買ってやるうか。普通のじゃつまらないから……」

光は再び自販機のボタンを押し、スバルの分の飲み物を買う。自分は普通の緑茶を買ったのに、スバルには普通ではない飲み物を買った。

「なんだか扱いが酷くなってるからな、さりげなくく仕返ししてやる……ごめ〜ん変なの買ったあ〜！ そう可愛く言って渡すだけだ！ ふっふっふ、待ってるよ星河あ……！」

光はスバルの分にと買った「にがりソーダ」の缶を見て、スバルが苦しむ姿を妄想し始める。そして、悪そうな笑みを浮かべながら自販機から離れていった。

スバルの所に戻ると、光は予定通りスバルににがりソーダを渡した。光の妄想では、ここでスバルの顔が青ざめることになっている。

しかしスバルは顔が青ざめるどころか、笑顔を光に向けていた。

「ありがとう、光さん」

「う、うん……」

(なぜだ……なぜ嬉しそうなんだっ！)

「えっと……ご、ごめん。緑茶がラスト1本で、他にも普通のがあったんだけど……間違えて隣のボタン押しちゃってさ……緑茶と交換する？」

「いいよ。買ってきたのは光さんなんだし、光さんが飲みなよ。それに、これだったら僕も飲めるから」

「い、良い人すぎる……なんか、星河が良い人すぎるよおお……！！」

自販機の前で妄想を繰り広げていた時点では、光の心はスバルへの軽い恨みで満たされていた。しかし今はそれが全て消え、空いたスペースを罪悪感が埋めている。

「にがりソーダかぁ……これね、コダマタウンの自販機にも売ってるんだよ」

「そんな変なの、買う人いるのかな……」

「意外と人気らしいよ？ クセになる味みたいで……まあ、僕はあまり好きじゃないけどね」

「こっとなつたら飛ぶしか無いか……っ!!」

光はスバルに対する罪悪感がピークに達し、ついには落下防止の柵を上り始めた。それを見たスバルは光の服を掴み、無理やり自分の方へ引き戻す。

「冗談でも危ないから。柵には上らないでね」

「はい……すみません」

光はベンチに座って深呼吸を繰り返し、心を落ち着かせる。その後、隣に座るスバルと話しているうちに、時計は12時を回った。

「お昼か……小鳥、まだ戻らないね」

「向こうの広場に行くって言ってたよね？ ちょっと様子を見に行こうか」

スバルと光は立ち上がり、小鳥がいると思われる広場へ向かった。

第33話 確かめたい気持ち

「ドリームアイランド……ここは良い場所だね、マグナ」

『うん……ねえ、どうしてスバル君と光ちゃんだけを連れてきたの？ そろそろ、私にも教えてくれない？』

小鳥はドリームアイランドにスバルと光だけを連れてきた理由をマグナに話していなかった。これはスバルと光にも話していないことだ。

「……気分転換だよ」

「スバル君と光ちゃんは騙せても、私は騙せないよ？」

「だよね……わかった。スバル君も光ちゃんもいないことだし、正直に話すよ」

マグナはスバルや光よりも長い時間、小鳥と一緒にいた。だからこそ、小鳥が何かを隠していることも見抜くことができる。隠し通せそうに無いとわかった小鳥は、マグナだけに本当のことを話し始める。

「スバル君と光ちゃん、前より仲良しになってるの。休み時間に2人で話してたり……勉強でも、わからない所を教え合ったりして……とっても楽しそうにしてるの」

『うん……それで？』

「確かめてみたくて。スバル君は私と光ちゃん、本当はどっちが好きなのか……」

小鳥の様子がおかしい原因は、ほとんどスバルにあったようだ。小鳥の話聞いた後、マグナは静かに小鳥の身体を抱き寄せる。

『……話してくれて、ありがとう……確かに、あの2人がいる所じや話せないね……』

「私も、もっとスバル君を信じるべきだとは思っよ。でも、なんだか気になり出したら止まらなくなって……」

『そうだね、よくわかるよ……』

マグナも、過去にウォーロックに対して好意を抱いている時があった。だからこそ、今の小鳥の気持ちを理解することができた。

「私、どうすれば良いのかな……?」

『……今は、本当に気分転換が必要かも……ほら、横になって……』
「うん……」

マグナは小鳥を抱きしめたまま、身体を倒して寝そべる。広場には草が生えていて、寝心地は悪くなかった。

『目を閉じて……ちょっとだけ、お昼寝しよっか……』

マグナに言われるまま、小鳥はゆっくりと目を閉じる。晴れてい

て暖かいからか、小鳥はすぐに眠ってしまった。

『……………寝るの早いなあ』

マグナは小鳥から離れて上半身を起こし、小鳥の寝顔を見ながら微笑んでいた。

それからしばらくすると、小鳥達のいる広場にスバルと光が来た。

『あつ、スバル君……………ごめんなさい、小鳥ちゃんが寝てしまつて……………起きたら、戻るつもりだったのですが……………』

「そっか。戻つてこないから心配したよ……………小鳥ちゃんは大丈夫みたいだね」

「そうだね、良かった……………」

『む……………』

光と話すスバルを見て、マグナは一瞬だけ小鳥の方を見る。小鳥は今もぐっすりと眠っていた。

『……………スバル君、ちょっと良いですか？』

「？……………うん」

『光ちゃんには席を外していただきたいです』

「え？ あ、ああ、うん。わかったよ……」

光は戸惑いながらも、さっきまで休憩に使っていた場所へ向かった。

『……なぜ小鳥ちゃんの様子が変わったのか、わかりますか？』

「え？ ……やっぱり、何か悩み事か？」

『どうでしょうか……小鳥ちゃんは、あなたが考えている以上に深刻な悩みを抱えているんでしょうね……』

「小鳥ちゃん……」

スバルはマグナの隣に腰を下ろし、マグナと一緒に小鳥の寝顔を見つめる。無自覚なスバルを見ているうちに、マグナの機嫌も少しずつ悪くなっていった。

『……本当に、何もわかってないんですね』

「え……？」

『あなたのせいなんですよ……あなたが、小鳥ちゃん以外の女性とも平等に親しくしているから……小鳥ちゃんは落ち込んでいるんです……！』

マグナは立ち上がり、少し離れた場所でスバルを睨みつける。

『最近では、特に光ちゃんと仲が良いようですね……光ちゃんは小鳥ちゃんの親友だから、とてもシヨックだったでしょうね……奪われたんじゃないかと不安になっているかも……』

「……最近、光さんと仲が良いのは……理由があるんだ」

『む……理由とは？』

スバルは軽く頷き、立ち上がってから再び話し始める。

「光さんは、小鳥ちゃんと仲が良いから……よく、小鳥ちゃんの好きなものとかを聞いたりするんだ。何も知らないのは、まずいと思つて……」

『では、小鳥ちゃん以外の女性と平等に親しくしているのは？』

「あー……やっぱり、小鳥ちゃんとは特に仲良くするべきなのかな。なんか、今だに友達との区別の仕方がわからなくて」

『は、はあ……？』

悩むほどのことではなかった。スバルが光と2人で話しているのは、小鳥の好みや趣味などを聞くため。他の女性とも平等に親しくしているのは、ただ単に恋人とそれ以外との区別の仕方がわからなただけだった。

「今でも小鳥ちゃんのこととは好きだけど……これだけじゃ、やっぱりダメなのかな……」

『い、いえ……私は、良いと思いますけど……』

(あ、あれ？　そこまで深く悩むようなことじゃなかった……？)

『私ったら、なんて勘違いを……』

「ん？　何か言った？」

『い、いえっ！？　な、何でもありません！』

マグナはスバルから逃げるように、小鳥のハンターV.Gの中に戻る。その少し後、寝ていた小鳥が目を覚ました。

「うるさいなあ……あ、スバル君」

「小鳥ちゃん……」

小鳥はスバルがいることに気づくが、すぐに目を逸らしてしまう。

「どうしたの、スバル君……？　光ちゃんと一緒にじゃないの？」

『小鳥ちゃん。私達、ちょっと勘違いしてたみたいなの……』

マグナはハンターV.Gの中から小鳥に話しかける。その後、小鳥が寝ている間にスバルと話したことを全て、小鳥に話した。

「……あれ？」

『まあ、そんなわけで……ね？　悩むほどのことじゃなかったんだよ……』

小鳥は顔を上げ、ハンターV Gの画面に向けていた視線をスバルの方に向ける。するとスバルは、苦笑いしながら小さく頷いた。

「あー……えっと、なんか……ごめんなさい」

「謝るのは僕の方だよ、多分……ごめんね」

全て小鳥の勘違いから始まったことだった。しかし、勘違いさせるような行動を取るスバルも悪いということで、最後にはお互いに謝ることで全て解決した。

「スバル君、光ちゃんの所に戻ろうよ！ みんなでお昼食べよう！」

小鳥の顔には以前と同じ明るさが戻り、その足取りも軽くなっているように見えた。スバルはその後ろ姿を見て微笑み、ゆっくりと歩き出す。

第34話 魔法

「光ちゃんっ！」

花畑の間の道を通り、スバルと小鳥は光がいる広場に戻ってきた。

「小鳥……なんか、明るくなってる？」

「色々あったんだよ。ねー、スバルくん」

「そうだね、色々あったんだよね」

(あれ……もしかしてボク、知らないうちに仲間外れにされてる?)

「あ、ああ……色々、ね……」

その後も光は、小鳥が明るくなっている理由を聞こうとしたが、スバルも小鳥も理由を話すことは無かった。

「……そうだ。もうお昼なんだけど、昼食どうするの？」

「そうだった！ スバル君、どうする？」

「どこかに食べに行こうか。スピカモールとか、ヤシブタウンとか……」

スバルが場所の名前をいくつか挙げると、小鳥と光は2人で相談し始めた。

「なるほど……うん、良いんじゃない？ ボクは構わないけど」

「よしっ！ じゃあ決まりだね！ スバル君、話し合ったんだけどね？」

「うん」

小鳥はスバルの方を向き、光との話し合いで決めたことを笑顔でスバルに話す。

「お昼は、スバル君の家でご馳走になろうかなーと」

「……うん？」

「スバル君のお母さんの料理、一度で良いから食べてみたかったの。だからスバル君の家に、レッツゴー！」

「レッツゴー！」

スバルの返事も聞かずに、小鳥と光はウェーブライナー乗り場の方へ走り去っていった。

「ええー……？」

『な、なんて自分勝手なヤツらだ……』

「まあ、母さんなら断らないとは思っけど……一応メールで伝えておっじ……」

あかねにメールを送った後、スバルもウェーブライナー乗り場に向かって歩き出す。

「……………ん？」

『どうした？ 早くしねえと、あいつら勝手にウェーブライナー乗っちまうんじゃないかねえか？』

「いや……………なんか、いきなり寒くなってきたような……………辺りも薄暗くなってるし……………」

さっきまでは眠れるほど過ごしやすい暖かさだったのに、今は寒いと思うくらいに気温が下がっていた。さらに空は晴れているのに、辺りは曇り空の下のように薄暗い。

『……………ッ！！ スバル、上を見る！！』

「上、って……………ええ！？」

ウォーロックの指示通り、スバルは上を見る。その先にあるはずの太陽は、巨大な丸い何かの影に隠れていた。

「あ、あれは……………水？」

『多分な……………あれが太陽の熱を遮ってるから、寒くなったんだな。どう見ても自然現象じゃねえ。あれはFM星人の仕業だ。恐らく……………この前の水を操る女！』

空中に浮かぶ水を見て、ウォーロックは1人の電波体のことを思い出した。以前ドンブラー村でソコを追い詰めた、水を操る電波人

間の少女。現時点で、あんなことができると考えられるのは彼女じゃない。

「ロック、電流体の気配は!?!」

『待て! 光から電話だ!』

ウォーロックが電流体の気配を探ろうとした時、光から電話がかかってきた。

「もしもし、光さん?」

『ほ、星河! 大変だ! 小鳥が……なんか、水がバーツて来て、ボクを助けるために……えーと……なんかね、凄いことがね!?!』

「お、落ち着いて! 全く意味がわからないよ!」

画面に映る光は、かなり取り乱していた。スバルは一度光を落ち着かせた上で、再び喋らせる。

『ウェーブライナーを待つてたら、水が腕みたいになって! ボクに襲いかかってきたんだけど、それに気づいた小鳥がボクを突き飛ばして、代わりに水の中に!』

「小鳥ちゃんが……!?!? それで、その後どこに行ったの!?!」

『わからない! とりあえず、近くにはいないみたいだけど……』

「わかった! じゃあ僕が探すから、光さんはそこを動かさずに……いや、逃げて!?!」

『え……うわあっ!?!?』

スバルは大きな声で逃げるように言うが、少し遅かった。光も小鳥と同じように水の腕に捕まり、水中に引きずり込まれてしまう。

『スバル、海の方に電波体がいる！ やっぱり、あの時のFM星人で間違いねえぞ!?!?』

「FM星人め……!?!?」

スバルは電波変換してウェーブロードに乗り、海の方へ走り出す。

「こ、これは……!?!?」

スバルは海の真上を通るウェーブロードまで来て、言葉を失っていた。海の一部に、大きな円柱型の穴が空いているのだ。

『スバル、あの中に電波体がいるぜ』

「専用のバトルフィールド、って感じかな。向こうも少しずつ本気を出してきてるね……よし、行こう!?!?」

スバルは覚悟を決め、海に空いた穴の中へ飛び込んだ。

「凄いね……まるで見えない壁があるみたいだ」

『こんなにデカイ穴を空けられるようなヤツなら、けっこう楽しい
そうだな……!』

「ロツクが戦うわけじゃないでしょ……かなり深いね。50メートル以上あるかな……?」

穴の底は、水分を含んだ砂地になっていた。着地したスバルはそ
の中を歩き回り、色々と調べ始める。

側面の海水は凍っているわけではないが、見えない壁があるか
のように硬い。こうして見ているだけなら、水族館の大きな水槽とほ
とんど変わりは無かった。

『……にしても、妙だな……人間も電波体も見当たらねえ……確か
に電波体の気配は感じるんだが……』

「小鳥ちゃんと光さんもいないよ……一旦戻って、もう一度よく探
してみようか」

「その必要は無いよお、少年!」

スバルが穴の外に出ようとした、その時だった。側面の海水の壁
に穴が空き、その奥から1人の少女が姿を現す。

「自己紹介したっけ? 私は水野薫。ドンブラー村で会ってるけど、
覚えてるよね?」

「あの時の、水を操る人……」

「そう。今回は女の子2人を人質に取らせてもらった」

薫は右手の親指で自分の背後を指差す。その先の水中には、気を失っている小鳥と光が浮かんでいた。

「私達の手で、呼吸はできるようになってる。逆に、私達の手を解かない限り助けることはできない……ここまで言えば、大体わかるよね？」

「そうだね……僕が勝ったら、2人を解放してよ」

「ああ、もちろんさ……勝てたらの話だけだね」

スバルと薫の会話が終わる頃、薫のハンターV.GからFM星人のアクエリアスが出てきた。

『……お前がアクエリアスか？』

『そうでえ〜すっ！ 私がアクエリアスよん』

(な、なんか調子狂うな……)

場の雰囲気似合わない明るさのアクエリアスに若干引き気味のウォーロックだったが、なんとか平静を保って話を続ける。

『人質なんか使わなくても、俺達はいつだって相手になるぜ？』

「それだつつまらないでしょ？ 戦いは面白くないと！ 少年には邪魔されてばかりだからねえ、ここらでお仕置きが必要だ！ 覚悟しなァ！」

『フフツ、行くわよ』……!』

その後、アクエリアスがハンターV Gの中に戻った直後から、薫の足元に水が集まり始める。

「少年……魔法って信じるかい？」

「魔法……？」

「ああ、そうさ。MP消費で攻撃も回復もできる。さすがに蘇生魔法は無いけど……他は使える」

(どうやらあの人は、ゲームのやり過ぎで頭がおかしくなってるらしい)

薫がいきなり「魔法」などという非現実的な単語を連発し始めたために、スバルは苦笑いしていた。電波変換も非現実的だと言われればそれまでだが。

「笑うなよ？ 私だって最初にアクエリアスが魔法とか言い出した時は、こいつバカなんじゃないかって思った。さっちゃんにも魔法なんか無いなんて言ってた。でも最近気づいたんだ……この力は魔法なんだ、ってね」

(気づくまでの過程を知りたいんだけど、聞いちゃダメなのかな)

「……まあ、少年みたいな小学生の頭じゃ永遠に理解できないね。実際に見てみれば良い」

「なんだろう、戦う前から負けた気分だ」

「戦った後も、きつと少年が負けてるよ！ 電波変換！」

薫の足元に集まっていた水が薫の全身を包み、それが次第に青い光に変わる。その光が四方八方に弾け飛ぶと、そこにはドンブラー村で見た電波人間の姿があった。

「さあ少年、かかってきなよ。このアクエリアス・ウィッチが本気で相手になるよっ！」

『スバル。ここは相手に有利なフィールドだ。一瞬でも気を抜いたら負けだぜ？』

「わかってる。人質が2人もいるのに油断なんてできないよ……よし、行くよロック！」

スバルと薫の戦いが始まる……

第34話 魔法（後書き）

薫の言う「魔法」による技に、普通の技との大きな違いはありません

他のキャラが使わないような、少し特殊な技が多いだけです。

ちなみに水で太陽の熱を完全に遮ったりできるかは不明

海にできた丸い穴を「円柱型」と言っているのかも不明

第35話 水瓶の魔女

海に空いた穴の中で戦おうとするスバルと薫。その2人の様子を、遠くから静かに見守る電波人間が2人いた。

「志場君、もう少し近くで見ない？」

「ここが限界だ。これ以上近づくと戻れなくなるぞ……」

「た、確かに近づくのは危ないね……水野さん大丈夫かな……」

「どうだろうな……今の薫は、間違いなく星河よりも強いが……一瞬の油断も許されないほど小さな差に過ぎない……」

閃堂咲姫と志場凶哉。この2人は薫の戦いを見るため、本人には気づかれないように薫の後を追ってドリームアイランドに来た。離れた場所で見ているのは、薫の魔法の影響を受けないようにするためだ。

「志場君って、水野さんが戦う時は必ず見に行くよね。どうして？」

「俺には、あいつを守る義務がある」

「ほおー……！」

「……なんだ、その目は。気持ち悪いな」

咲姫の視線から逃れようと、凶哉は咲姫から離れる。しかし離れ

た分だけ咲姫が近づいてくるため、結果的に2人の距離は変わらない。
い。

「水野さんと志場君、なんだか怪しいにゃー」

「安心しろ。お前の妄想は永遠に当たらない」

「失礼なっ！ 守る義務があるとか聞いて自分なりに理由を考えて
みたら、なぜかラブな感じの妄想に至ってしまったただけなんだよっ
！」

「妄想と認めたな」

「星河君。ここに来て、何か気づいたことはある？ 空中に浮かぶ
海水、海に空いた大穴、2人の人質、私という敵の存在……それ以
外には？」

「魔法とか意味不明なことを言う変な人が目の前にいるってことか
な」

薫が電波変換した後も、話は終わらなかつた。スバルは今も、薫
の「魔法」という言葉を信じていない。

「クツ……ふつつつ、怒らないぞ？ 私は大人だからね、これく
らいでは怒らないのさあ……！」

『無理してるのは言うまでも無いわねっ』

「う、うるさい！ とにかく百聞は一見に如かずだ、早速見せてやるよー！」

アクエリアスがからかうと、薫は真つ赤な顔を隠すように、手に持つ水色の本を開く。ようやく戦闘開始らしい。

「ここに来た時点で、少年は既に私の魔法の影響下にある！ もう逃げられないよー！」

「逃げられない……？」

「……ナイト……」

スバルが聞き取れたのは、その一言だけだった。薫は他にも何か言っているようだが、少なくとも普通の日本語ではない。どの国の言語にも属さない「言葉」が、薫のすぐ側に集まる水の形状を変化させていった。

「……さあ、行け！」

しばらくすると、その水は剣と盾を持った騎士のような形になり、そのまま動き出す。

「意味がわからない……バトルカード、プラズマガン！」

「……アンチエレキ」

スバルが電気属性のプラズマガンで攻撃すると同時に、薫も本

の別のページを開いて呪文を唱える。すると、水の騎士はプラズマガンによる攻撃を盾で打ち消してしまった。

「水なのに、電気が効かない……!?!」

「属性の関係なんて、私には通用しないよ!」

「クツ……バトルカード、ブレイクサーベル!」

今度は左腕をブレイクサーベルに変化させ、物理攻撃で対抗する。普通なら、液体に物理攻撃は通用しない。しかし今は、その「普通」自体が通用しない。そんな状況でスバルが薫に勝つには、とにかく今のうちに何でも試してみるしか無い。

「これで、どうだっ!」

「エスケープ」

スバルは剣を振るが、それと同時に水の騎士は普通の水に戻って地面に染み込んでいく。

「あ、あれ?」

「ランス」

騎士を形成した後地面に染み込んでいった水は、数秒後には鋭い槍となって地面から突き出す。スバルは反応が遅れ、その攻撃を右肩に受けてしまった。

「なっ……!?!」

「水の形状を自由自在に操る……これは私自身の力じゃなくて、この呪文書の力なんだ。強い想いを込めて呪文を唱え、魔法により半径100メートル以内の全ての水を操る！ 操る水の多さは、私の想いの強さに比例する！ 何に対する想いなのかは恥ずかしくて言えないのさっ！」

「最後のは威張って言えることじゃない気がする……」

「こんな所で少年に邪魔されるわけにはいかないんだ！ この戦い、悪いけど勝たせてもらう！」

薫は別のページを開き、さらに呪文を唱える。1000ページ以上ある分厚い呪文書だが、薫は開きたいページを1発で開いている。

『スバル、この場所から逃げろ！ 今回ばかりは、さすがにヤバいぜ！』

「う、うん！」

海水が薫の周りに集まっているのを見て、ウォーロックはスバルに大穴の外へ出るように指示した。スバルは指示通り外へ逃げようと、海水の壁を蹴りながら海面を目指す。しかし、どれだけ上に行っても外に出ることができない。海面までの距離が全く縮まらないのだ。

「クツ……あ、あれ？ おかしいな……」

「無駄だよ……言ったよね？ ここに来た時点で既に、キミは私の魔法の影響下にある。もう逃げられないってさあ！」

「完全に先回りされてたみてえだな……」

「良いだろ、最後まで遊んでいきなよ！ トルネード！」

薫の周りに集まる水が、渦を巻きながらスバルに襲い掛かる。

「バトルカード、マジックウォール！」

「……！ 打ち消した!？」

スバルの目の前に壁が現れ、薫の攻撃を受け止める。その直後、渦を巻いていた水は普通の水となって地面に染み込んでいった。

「魔法って言っても、基本は普通の攻撃と変わらないみたいだ……」

「なるほど、マジックウォールね……メイクカウンター！」

薫は別のページを開いて呪文を唱えたが、周りの水に変化は無かった。

「失敗……?」

「そう思つかい？ さあ、どんどん行くよ！」

薫の頭上に水が集まり、いくつもの巨大な剣を形成する。ドンブラー村でソロを追い詰めたのと同じ魔法だ。

「スラッシュ！」

次々と作り出される巨大な剣が、絶えること無くスバルを襲う。海に空いた大穴の中という狭い範囲の中で、この攻撃を避け続けるのは困難だ。

「バトルカード、マジックウォール！」

避けられないなら防ぐしか無いと、スバルは再びバトルカードのマジックウォールを使う。これなら薫の魔法でも防げるだろうと、スバルも安心していった。しかし、その安心もすぐに消え去ることとなる。

「また同じ手で来たね。それで守るのかい？」

「さっきの攻撃は防いだし、今度も……ッ!？」

水の剣が当たった、その時だった。マジックウォールにヒビが入り、次の瞬間には砕け散ってしまう。

「そんな……どうして!？」

「メイクカウンター。対防御魔法さ！ この魔法の影響を受けた魔法攻撃は、防御カードを貫く！」

「なら防御以外で避ける！ バトルカード……ッ!！」

スバルはバトルカードのインビジブルを使おうとしたが、ここに来て右肩に受けた傷が痛み、バトルカードを落としてしまう。

「さっき刺された傷が……ッ!！」

スバルがバトルカードを拾おうとした時には、水の剣は既にスバルの目の前にあった。

（今の僕のカじゃ……勝てない……！？）

「クツ……」

「……！ エスケープ」

スバルが諦めかけた時、薫は魔法を解除する呪文を唱え、水の剣を普通の水に戻す。その後呪文書を閉じ、スバルの側に歩み寄る。

「あー、反撃しようなんて思わないように……なぜ攻撃を中止したか、わかるかい？」

「わかるわけ無いよ」

「生意気な小僧だねえ……ちょっと嫌なことを思い出したただけだよ。でも勝負は私の勝ちだ」

そこまで言うと、薫は後ろを振り向く。その視線の先には、人質となり気を失ったまま水中に浮かぶ小鳥と光がいる。

「人質の解放条件……私に勝つことだったね。でも少年、キミは私に勝てなかった。さあーて、あの2人をどうしようかなー……」

『まさか、殺すとか言わねえよな……？ そんなことしてみる、俺がテメエを殺してやる……！！』

「怖いねえ……大丈夫、殺しはしない。殺せないよ……決めた！」

薫はスバルから離れて再び小鳥と光の近くに行き、2人を水の中から出す。しかし、人質を解放するというわけではなかった。

「しばらく、この2人を預かるよ！ 次に戦う時、私に勝って見せな！ そしたら返してやる！ その時に勝てなければ……」

「勝てなければ……？」

「どっかの山奥に置いてくるっ！」

(うわっ、なんか地味に困る！)

薫は呪文書を実体化したアクエリアスに持たせ、小鳥と光を両脇に抱える。

「後日、WAXAのメールサービスを利用して夏のトーナメントのお知らせをするよ。私も出るから、頑張りなよ？」

そう言い残して、薫はドリームアイランドから去っていった。

「2人が誘拐された……いや、それ以上に！」

上を見ると、さっきまで空中に浮かんでいた海水が、薫の魔法から解放されて落下を始めていた。さらに、スバルが今いる大穴も形が崩れてきている。

「帰るなら、僕が外に出てからにしてよ……！」

その後、スバルは溺れそうになりながらも、なんとか地上に戻っ

た。

第35話 水瓶の魔女（後書き）

メール機能で書いてた物が全て消えたので、とりあえず今は本編最新話を更新です。

あとはデータ集更新分もサイト上で作るので、本編の更新スピードは遅くなります。

メール執筆が怖くて仕方ないw

第36話 見慣れない風景（前書き）

僕自身の他作品から持ってきた別のオリジナルキャラが出ます。

第36話 見慣れない風景

薫に連れ去られた小鳥と光の行方は、1週間経った今も掴めないままだった。

土曜日の今日、スバルは自分の部屋に籠っていた。

「みんな心配してた……探したいけど、何の手掛かりも無い……」

『こうなったら、あの女に勝って居場所を聞くしか無いか……だが問題は、どうやって勝つかだな……』

スバルはドリームアイランドで、傷1つ付けられないまま薫に負けている。そんな相手にどうすれば勝てるのか、さすがのウォーロツクも深く考え込んでいた。

そんな時、スバルのハンターV.Gに2件のメールが届く。一方はルナからだが、もう一方の差出人は不明となっている。

「委員長と……誰だろう？ ロツク、ちょっと読んでよ」

『ああ……まず委員長のメールだが、今すぐ家に来いってだけ書いてあるな。差出人不明のメールは……？』

ウォーロツクは、ルナのメールはすぐに読み上げたが、差出人不明のメールは最後まで読んでもスバルに伝えようとしなかった。

「……どうしたの？ 早く読んでみてよ」

『あ、ああ……今日という日が、お前の運命の分かれ道だ。人質2人を諦めるか、助けるか……諦めるなら普通に過ごすと良い。助けたいなら、俺達を探せ……』

「な、何それ……一体誰が……!？」

『わからねえ……だが今は、これに頼るしか無いな。メールを送ったヤツを探すぞ!』

「うん!」

スバルはメールの送信者を探すため、家を出ていった。1つ大きな問題があるのだが、どうやらスバルもウォーロックも気づいていないようだ。

『……コダマタウンにはいないな! 次はどこを探す?』

「うーん……じゃあドリームアイランド?」

『なるほど、隠れる場所が無いのが逆に怪しいな。よし、そこ行くぞ!』

スバルは電波変換してコダマタウンのウェーブロード全体を走り回り、地上とウェーブロードの両方を探した。しかし見掛けるのはコダマタウンの住人ばかりで、怪しい人物は見当たらない。

そんな中、ウォーロックの問いに対してドリームアイランドの名前を出した所で、走っていたスバルは足を止めた。

「……………」

『……………』

「……………ロックも気づいてるんでしょ？」

『その様子だと、お前も気づいてるみてえだな……………』

メールを読んでから、既に30分以上経過していた。スバル達は急ぎすぎて、そこまで考えていなかったのだ。

「ヒントが無い！」

『探せって言うなら、居場所のヒントくらい書けよ……………』

「もう1度、メールの文章を読んで考えてみよう……………」

スバルは差出人不明のメールを再び開き、その文章を読む。

「運命の分かれ道……………運命？」

『最近どこかで聞いたよな……………そうだ、幽霊のマグナが現れた時だ！あの時に、変なヤツらが来たじゃねえか！』

「そついえば……………じゃあ、その人を探せば良いのかな。でも、どこを探せば……………」

メールの差出人は簡単に予想できた。問題は、その差出人をどうやって見つけるかだ。

『とにかく、もう少しコダマタウンを探すぞ。もしかしたら電波変換して電脳世界の中にいるのかもしれないからね』

「わかった!」

スバルは来た道を戻り、今度はコダマタウンの電脳世界の中を探しに向かう。

「……?」

しかし、その足はすぐに止まってしまふ。その原因となるのはコダマタウンの風景。長く住み続けているからこそ、異変に気づくことができた。

「ロック……何か、変だよ……」

『変……って、何がだ?』

ウォーロックは、その異変には気づいていなかった。ウェーブロードにいたスバルは地上に下り、学校のすぐ横にある階段の前に来る。この階段を上げれば展望台があるのだが、スバルはその小さな変化も見逃さなかった。

「展望台に行く途中の階段が……新しいんだよ」

『新しい?』

「ほぼ毎日、展望台に行つてたからわかる……この階段、4段目と7段目は補修の跡があつた。でも今は無い」

『そう、なのか……？』

(全然気づかなかつた……つてか、普通見ないだろ……)

階段以外にも変化はあつた。まず、町に人の姿が無い。休日の昼間に人が1人もいないのは、コダマタウンではありえないことだ。他にも建物のほとんどが新しく、植木も減っている。コダマタウンで特に目立つ、波をイメージした青い屋根のカードショップも無い。

『……確かに、よく見ると変だな……何が起きた……？』

「お前達は今、コダマタウンにいる……お前が生まれる前の過去のコダマタウンに、な……」

「……！！」

今のコダマタウンには誰もいなかったはずなのだが、聞き慣れない少年の音がスバルの耳に入ってくる。声が聞こえてきた方を見ると、そこには姿のよく似た黒い少年と白い少女の2人が立っていた。

黒い少年は頭部や胴体や両腕、両足を覆う灰色の防具や、虹色の光を放つマントが特徴で、黄色いバイザーの奥から冷たい視線をスバルに向けている。

白い少女は腰から膝上約3センチまでを覆うスカートや、目を覆う赤いバイザー以外の外見は少年とほとんど同じで、右手には鳥の

頭や翼を模した装飾付きの杖を持っている。

「だ、誰だ!？」

「落ち着けよ、俺達は」

『どうせコメットの仲間なんだから!？ スバル、こいつらを倒して小鳥達の居場所を聞き出すぞ!』

「うん! さあ、僕と勝負だ!！」

「いや、だから……」

スバルが戦う気で見ているのを見て、少年は一瞬だけ戸惑うそぶりを見せる。しかしその後には溜め息を吐き、改めてスバルを睨みつけた。

「……はあ、仕方ねえな。勝つぞ、飛頼」

「運命の分かれ道……あなたは、どっちを選ぶの……? 手加減しようね、翔……」

第36話 見慣れない風景（後書き）

後の展開を考えて、この2人も出すことにしました。

ちなみに、リメイク前のコスモスの続編であるPAST FUTU REが初登場なのですが、やはりそちらでの設定を直接本編で使うことはありません。

次回からスバルVS兄妹となります。

第37話 白黒の栄光

「……それにしても、ずいぶん短気なヤツだな。出会ったばかりの俺達に勝負を挑むなんてよ」

「私達、強いんだよ？」

（確かに……こいつら、今までに戦ったヤツらとは何かが違うみてえだ……どうするんだ、スバル……？）

スバルの前に現れた見慣れない男女2人。少年は翔、少女は飛頼と言っらしい。その異様な雰囲気、ウォーロックは恐れを抱いていた。

「もう、負けるのは嫌なんだ……だから勝つ！ ロックバスター！」

スバルは、武器らしきものを持っていない翔に向かってロックバスターを撃つ。しかしスバルからは見えないだけで、翔は武器を所持していた。

「……無駄だな」

マントで隠されていた鎖が伸び、ロックバスターによる攻撃を防ぐ。その後、伸ばされた鎖は再び翔の背中の方へ戻っていった。

「俺は、背中に10本の鎖を隠し持っている。この情報1つでも、かなり大きなハンデになるな」

「それでも足りない……あなたは、私達に勝つことはできない……
これは変わらない運命なんだよ……？」

「くっ……！」

直立不動の翔と飛頼は、常に次の行動が読めない状態だった。スバルは反撃を恐れながらも、バトルカードを取り出す。

「バトルカード……」

「ブレイクサーベル。だが本命は、その裏のダミースパイダーか……
ブレイクサーベルを防がせてる間に、背後を狙うんだろ？」

「……ッ!？」

その時、バトルカードのブレイクサーベルとダミースパイダーを重ねて持つスバルの手が止まる。翔からはブレイクサーベルしか見えない状態なのだが、それでもスバルの考えは完全に見抜かれていた。

「……バトルカード、ブレイクサーベル！」

「と、見せかけてアイスメテオだろお!? 無駄なんだよ!! サ
バイバルチェーン・ハーフ!!」

翔の背中から不規則に動く5本の鎖が伸び、そのうちの3本は空から降ってくる3つの氷の塊を砕く。そして残りの2本は、スバルの両腕に1本ずつ巻き付いた。

「パラライズチェーン!!」

「ぐっ!!」

スバルの腕に巻き付いた鎖が電気を放出し、スバルを攻撃し始める。

「実力差を考慮。わからないなら挑むな」

「差なんて……関係無い……!!」

「おっ？」

スバルは2本の鎖を掴み、勢い良く引つ張って翔を自分の方へ引き寄せる。

「翔……!!」

「飛頼、サポートよろしくな。こいつ……なかなか面白いぞ!」

「エターナルブラック……!!」

飛頼はその場を動かさず、両手を上に伸ばす。すると、飛頼の頭上に巨大な黒い球体が現れた。

「鎖を掴んでくるとは思わなかったな……だが、その場合の対応も考えてあるのさ! エンドレスホワイト……!!」

翔の足元が白い光を放つ。その直後から、翔の身体は地面に固定されたように動かなくなる。

「俺の身体は動かない。お前は両腕に鎖が巻き付いて、動きが制限されている。そんな状態で、この攻撃を避けられるかな？」

翔の足元の白い光が強まり、周りに無数の鋭く細い槍を作り出した。そして、その槍は1本ずつスバルに襲い掛かる。

「バトルカード、リフレクトミラー！」

スバルはバトルカードのリフレクトミラーを2枚使い、自分の左右に攻撃を跳ね返す鏡を1つずつ設置する。こうすれば左右からの攻撃は跳ね返せる。前後や上からの攻撃も僅かな動きで避けられる。このように、翔の技は簡単に対処できた。

「問題は、こつちだ……」

光の槍による攻撃を避けながら、スバルは上を見る。そこには、飛頼が出した巨大な黒い球体があった。そのスピードは速くないが、動きを制限されている今の状況で、これを避けるのは不可能に近い。しかし、これは翔にも言えることだ。鎖を引っ張っても身体が動かないということは、翔も飛頼の攻撃から逃げることはできない。

「このままだと、道連れになるよ」

「私が、翔を傷つけるとしても？ 翔のエンドレスホワイトは、攻撃というより防御に近いの。結界で、攻撃から身を守る」

「ま、まさか……！？」

「エターナルブラックを受けるのは、お前だけだ……！」

その数秒後、巨大な黒い球体はスバルを飲み込み大爆発を起こす。結界に守られている翔と、その後ろにいる飛頼は、この大爆発の影響を全く受けなかった。

「終わったか…… ロックマンも大したこと無いな……」

翔は結界を消し、スバルの方に伸ばしていた鎖を戻す。そして、後ろにいる飛頼の方へ歩き出した。

（ヤツは邪魔になると思ったが…… 特に気にすることも無かったか……）

「……！」

その時、飛頼が翔の方へ走り出す。そして翔の背後まで来ると、杖を両手で持って前に出した。

「どうした、飛頼…… ツ!？」

「くう……!」

翔の後ろには飛頼ともう1人、スバルの姿があった。スバルがブレイクサーベルで攻撃を仕掛け、それを飛頼が杖で受け止めている。

「まだ動けるか……」

「か、翔…… ちょっと、キツいかも……」

「チェーンストライク!!」

飛頼を助けるため、翔はスバル目掛けて1本の鎖を伸ばす。さっきとは違い、滑らかな曲線を描きながら伸びている。鎖が迫っていることに気づいたスバルは、攻撃を中断して飛頼から離れた。

「……よし、少しだけ本気を出してみるか！」

「大丈夫かな……」

「俺の飛頼に手を出すヤツは許さん」

「いや、攻撃されたの翔だし。私は別に狙われてないし」

第38話 特殊な属性(2)

「俺の妹に手え出しといて、ただで済むと思うなよ?」

「うわぁ、まさかシスコン……?」

「そつだ悪いか!」

「翔、そこ威張る所じゃないよ……」

スバルはブレイクサーベルで翔を攻撃しようとした。しかし、あと少しの所で飛頼に防がれた。そして、それがなぜか翔達の本気を出すことに繋がってしまう。

「飛頼……あれ使つぞ」

「良いの?」

「相手は光の力に選ばれた戦士。むしろ使わないと完全勝利は難しい」

「……わかった」

その時、翔と飛頼の周りの空気が一変する。その原因は、恐らく2人が出したバトルカードにあるのだろう。一見ごく普通のバトルカードなのだが、それが何やら怪しい雰囲気醸し出しているようだ。

「星河スバル……光の力を使えよ。持つてるんだろ？」

「……バトルカード、セイントキャノン！」

翔の挑発に乗り、スバルはバトルカードを使って光属性のキャノン砲を装備する。

「お望み通り、使つてあげるよ！」

その後キャノン砲を翔に向け、一直線に伸びる光の攻撃を放つ。それを見た翔は、手に持つバトルカードを使った。

「バトルカード……カオスキャノン！」

「……ッ!？」

翔の腕が黒いキャノン砲に変化し、そこから撃ち出された黒い球体の攻撃がスバルの攻撃を飲み込み進む。その攻撃を簡単に避けたスバルだが、自分の攻撃が打ち消されて驚きを隠せずにいた。

「……あんなに、簡単に打ち消すなんて……」

「これくらいで驚くなよ。バトルカード、ダブルヘイト！」

「バトルカード、ウイングソード!!」

翔は続けてバトルカードを使い、今度は両腕を黒い剣に変化させた。スバルもバトルカードで両腕を剣に変化させて対抗する。

「どうだ？ こんなバトルカード、見たこと無いだろ？ 俺達しか

持っていないんだ。そのカードも、お前しか持っていない。光の力に選ばれたお前は、闇の力に選ばれた俺達と戦う！これは、誰にも変えることのできない運命なのさ！！」

「光の力に、闇の力……？ 意味がわからないよ……」

「光と闇は、交わることの無い力……そして強すぎる力は、使い方を誤れば悪い意味で世界を変える……だから、どちらかが滅びるまで潰し合う……そうすることで、バランスが保たれるの………バトルカード、ダークアロー！」

スバルが翔の攻撃を受け止めている間に、飛頼もバトルカードを使用する。腕を黒い弓に変化させると、同時に現れた黒い矢をスバル目掛けて放った。

「くっ……後ろ！？」

「ほおら、よっ！！」

「うわっ！？」

後ろからの矢の攻撃を受けてバランスを崩したスバルは、前からの剣の攻撃も受けてしまった。

「どうした、その程度なのか？ 地球を救ったヒーローの実力は？」

「まだまだ！ バトルカード、レイブレイド！」

「バトルカード、リベレートマリス！」

「バトルカード、カーズドシャドー」

スバルがバトルカードを使って光の剣を装備すると、翔と飛頼もバトルカードを使う。翔は黒いオーラを纏うようになったが、飛頼には変化は無かった。

「さあ、こいつを避けてみな！」

翔が手をスバルの方に伸ばすと、黒いオーラが手の形になってスバルに襲い掛かる。スバルが装備したのはレイブレイドで、振れば相手の攻撃を防ぐ残像が残る。スバルはこれを利用して攻撃を防ぐとしたが、その腕は動かなかった。腕だけでなく、全身が何かに固定されたように動かない。

「なっ……身体が動かない!？」

「カーズドシャドー……しばらくの間、相手の身動きを封じる……」

スバルの身体が動かない原因は、飛頼が使ったバトルカードにあった。それにより防御もできず、スバルは黒いオーラの攻撃を受けてしまった。

「ぐっ……」

「倒れる暇があるなら逃げろよ！バトルカード、ヘルスマッシュ
！」

翔は右手を闇のオーラを纏う黒い装甲で覆い、その状態でスバルの方に走り出す。

「バトルカード……フォトンロープ！」

「なっ……うおっ!？」

スバルはバトルカードで光るロープを出し、翔の足に巻き付けて勢いよく引つ張った。翔をつまく転ばせると、スバルは続けてバトルカードを使って反撃に出る。

「つてえ〜……こいつ、よくも……!!！」

「バトルカード、ライトアロー……!!！」

スバルは左腕を光る弓に変化させ、光の矢を引いて翔に向ける。

「まず1人……!!！」

「……選択を間違えたな」

「えっ……?」

その時、飛頼は特に翔を助けようとせず、ただ遠くで1枚のバトルカードを出して微笑んでいた。

「飛頼……それも使って良い」

「は〜い……ねえ星河君。私、さっき言ったよね……光と闇は交わることの無い力だつて……それって、1つになれないって意味じゃないんだよ? 交わることもできるけど、交わるうとしないだけ……じゃあ、交わったらどうなるのかな……気になるでしょ?」

『さつきから、何言ってるんだ……？』

「わからないけど、何か嫌な予感がする……」

動揺するスバルを見てくすくすと小さく笑いながら、飛頼は手に持つバトルカードを使う。その直後、スバルはバランスを崩してその場に座り込んでしまった。

『スバル……？』

「力が……入らない……！？」

「光と闇の2属性を持つ究極の力、リードナイトメア……近くにいる、闇のカードを持たない者全ての体力を約半分減らして、減らした分だけ闇のカード使用者全ての体力を回復する……この力から逃れる方法は、闇のカードに選ばれる以外には無いんだよ？」

飛頼が使ったバトルカード、リードナイトメアの効果によりスバルは体力を減らされ、翔と飛頼は体力を回復。不利な状況の中で得た攻撃のチャンスは、この一瞬で全て消え去った。

「このバトルカードは……光のカードに選ばれた星河君が使えば、光のカードを持たない者全ての体力を減らして、光のカード使用者が回復する効果になるよ……あげないけどね」

「ダメだ……勝てる気がしない……」

「やっと降参か……じゃあ俺達の話聞いてもらおうか……」

第39話 過去と未来

「…………え？ コメットの仲間じゃ……………ない!？」

「あーそうだよ。そのコメットとか言うヤツのことなんか全く知らない。それなのに、お前は俺達の話も聞かずに……………」

「返り討ち」

翔と飛頼は、自分達のことについて簡単に説明した。2人がコメットの仲間ではないと聞いて、スバルは驚いている。

「う、ごめん。友達が誘拐されて、かなり焦ってたみたいで……………」

「ああ、知ってる。俺達は過去や未来を見ることができからな」

「…………え?」

「ここで簡単に済ませるような話じゃないから、場所を移そうよ。変身を解いて、展望台で待ってるね」

その後、翔と飛頼はスバルを置いて地上へ戻っていった。しばらくして立てるようにになると、スバルも電波変換を解いて地上に戻る。

展望台に來ると、翔と飛頼は早速何から話そうか迷っていた。

「さて、何から話そうか……いや、何をどう話せば全て受け入れてくれるか、って言った方が正しいか」

「もう現実離れたことには慣れてるよ。話したいことを話して」

「……じゃあ、飛び切りのを話してあげるね」

そう言つと飛頼は1歩前に出て、微笑みながら続きを話す。

「私達……未来から來たの」

「……はい？」

「だから、未来から來たの。わかる？ み・ら・い」

(どうしよう……素直に受け入れることができない)

宇宙から電波体が侵略しに來たり、空中に巨大な大陸が浮かび上がったたり、巨大なノイズの流星の中で戦ったり、人間が電波体と合体して電波になったりなど、スバルの周りでは現実離れた出来事が数え切れないほど起きていた。しかし、人間が未来から來るといふ事例は1度も無い。だからこそスバルは、飛頼の言ったことを受け入れることができなかった。

「俺達は、お前が死んだ未来から來たんだ」

「僕が……？」

「私達のいた世界でも、あなたはクリムゾン・ドラゴンに勝利した。でも、その後にメテオGの爆発に巻き込まれて……」

それから翔と飛頼は、スバルが死んだという自分達の世界のことについて詳しく話し始めた。

その世界のスバルはクリムゾン・ドラゴンを倒し、父親の大吾とも再会できた。そこまでは、今のスバルがいる世界と変わらない。しかし、その後からは全く別の世界だった。

まず、ノイズの流星「メテオG」はディーラーのボス、キングが変身したクリムゾン・ドラゴンとともに自爆し、スバルと大吾はその爆発に巻き込まれて命を落とす。その10年後に、翔と飛頼が生まれた。さらに10年経つと、コメット達とは違う電波体が現れて地球侵略を始める。

スバルとシドウのいない世界で、残されたミソラ達は電波体と戦った。その時点で電波変換の力を得ていた翔と飛頼も協力し、なんとか侵略を防ぐことはできたようだ。しかし、その戦いの中で翔と飛頼以外の全員が命を落とし、とても完全勝利とは言えない形で戦いを終えることになってしまう。

より多くの犠牲を出してしまったことで、翔と飛頼は立ち直ることができなくなる。そんな中、自分達の力を応用すれば過去や未来に行けることに気づく。翔と飛頼は「まだスバルが死んでいない世界」に行き、スバルが死なない世界を作ろうと決めた。

「……要するに、私達はつらい現実から逃げ出した臆病者ってわけ……」

「最終的に、最後の敵を倒したのは俺達2人だった……だから、みんなは俺達に感謝していた。その言葉や笑顔が、俺達には苦痛だった……」

「僕が生きて帰ってなければ、ミソラちゃん達まで……それも気になるけど……」

スバルは自分が死んだ後のミソラ達の未来のことを気にしながら、翔と飛頼の心配もしていた。

「ああ、大丈夫だ。お前が生きている今の世界で、お前の仲間がすぐに命を落とすことは無い……俺達のことにも心配しなくて良い」

「さつき、光と闇は滅びるまで戦う運命にあるって言ったよね？でも、私達の考えは違うの。私達は協力した方が良い……私達で、侵略に来たコメットとかいうヤツを倒そうよ」

「協力してくれるの？」

「その方が良い。お前、既に2人に負けてるんだろ？コメットと、アクエリアスに。お前の戦いは全部見てたんだ」

翔と飛頼はスバルの戦いを全て見ていた。そこでスバルが勝てない相手がいることを知ったために、協力して勝とうと提案したのだ。

「ありがとう……心強いよ」

「あいつらのことは、本当に何も知らないんだ。過去や未来を見る力があっても、個人のデータを見ることはできないから……あいつらと戦うには、どうすれば良い？」

「コメットが乗っ取ったトーナメントがあるんだ。季節ごと開催する……そこなら、戦えるかも。春の大会には2人出たし、今回の夏の大会にはアクエリアスのオペレーターも出るって言うた。多分、コメットのオペレーターも出るよ」

「なるほど……それは参加するしか無いな……よし、帰るか。飛頼！」

翔が名前を呼ぶと、飛頼は右手に持ったハンターV Gを前に出す。すると、飛頼の目の前に大きな渦が現れた。渦の直径は飛頼の身長ほどで、その奥には見えているだけで気分が悪くなりそうな暗い紫色の空間が広がっている。

「これは？」

「この世界と、スバル君の世界とを繋ぐ道……ここを通れば、スバル君がいた世界に戻るよ。住み心地が良さそうだから、私達もしばらくはスバル君の世界にすることにしよう」

「いちいち道を開けるのも疲れるしな。よし、行くぞ」

3人は渦の中に入り、スバルが住む世界に戻っていった。

第40話 謎のウイルス

しばらく歩くと、何も無かった空間に白い渦が見えてくる。それをくぐり抜けると、そこには見慣れた景色があった。

「着いた。わからないかもしれないけど、ちゃんと元の世界に戻ってきてるからな」

「確かに、さっきのコダマタウンとは違うような……」

町には人の姿があり、スバル達が戦っていたコダマタウンには無かった派手なカードショップも存在する。

「……俺達、今度の月曜からコダマ小に転入するから。よろしくな」

「そうなの？　じゃあ、同じクラスになると良いね」

「校長を脅したから大丈夫だよ」

「え……」

それから間もなく、翔と飛頼はウェーブライナーがある方へ歩き出す。しかし翔がすぐに立ち止まり、その少し後で飛頼も足を止めた。そして、翔はスバルの方を振り向いてから口を開く。

「ああ、そつだ。まだまだ話すことが残ってるんだ」

「何？」

「暁シドウは、今も生きている」

「……ッ!」

翔の口から「暁シドウ」という単語を聞いて、スバルの表情が変わる。今まで死んだと思っていたシドウが生きていると言うのだから、驚くのも無理は無い。

「誘拐された灯小鳥と十一光を助けたのなら、そいつの協力も必要になるだろうな……だが、詳しい居場所はわからない。俺達の力は、それほど万能でもないんだ……また月曜日に会おう。行くぞ、飛頼」

「じゃあね、スバル君」

翔と飛頼は再びスバルに背を向け、ウェーブライナーに乗ってコダマタウンを去っていった。

「暁さんが……生きてる……!?!」

『至近距離で大爆発に巻き込まれたんだぞ……それなのに生きてるつてのか……!?!』

「あの2人の言葉は、妙に説得力がある……きっと、本当に生きてるんだよ……!」

『……とりあえず、今日は帰って休め。考えるのは明日にしようぜ』

「シドウちゃんが……生きてる？」

翌日、スバルはWAXA二ホン支部に来た。そこで、背がスバルより少し低い、白髪や眼鏡が特徴のヨイリーという研究者に会い、翔から聞いたことを話す。

「はい。なんだか、嘘を言っているようには思えなくて……」

「でもね、スバルちゃん？ WAXAの方でも世界中を隈無く探したけど、どこにもいなかったわ」

「で、でもっ……！」

「……わかったわ。そこまで言うなら、もう少し探してみるわ……」

そう言うと、ヨイリーは近くのパネルに触れ、複数のモニターを同時に操作し始める。

「すみません、僕の我が儘に付き合わせてしまって……」

「良いのよ。WAXAとしても、シドウちゃんを諦められない所もあるから……少し時間が掛かるわね、その辺で時間を潰してちょうだい」

「はい、よろしく願います」

スバルはヨイリーの後ろ姿に向かって軽く頭を下げると、研究室から出ていく。

『WAXAのヤツらも、暁を探してたんだな』

「ジャックとクインティア先生には、暁さんが必要なんだ……2人が釈放されるまでに、なんとか見つけたいな……」

『……よしっ！ 特訓も兼ねて、WAXAのウェーブロードの電波ウイルスを倒して回ろうぜ！』

「な、何でそうなるのさ……まあ良いか。よし、外に出て電波交換だね」

スバルは溜め息を吐きながら、WAXAの出入口の方へ歩き出した。

『それにしても、小鳥から貰ったバトルカードには驚かされっぱなしだな。光属性ってだけでも珍しいのに、使うとインビジブルが解除されたり、選ばれた人間にしか使えなかったり……あいつ、こんな物どうやって手に入れたんだろうな？』

スバルが持つ光属性のバトルカードは、小鳥からプレゼントされた物だ。しかし、それがかなり珍しいバトルカードだったと知って、ウォーロックは驚いている。

「今度、小鳥ちゃんに聞いてみようか。そのためにも、必ず次のトーナメントで水野さんに勝たないと……」

『翔や飛頼が倒してくれるかもな。あいつらなら、コメントにも勝てそうだぜ』

「だと、良いけどね……翔君と飛頼さんの目的がわからない以上、今あの2人を信じるのは危険だ……あんなに強い力を持っているのに、そう簡単に協力したいなんて思っかな……」

『お前も成長したな。昔のお前なら、すぐ信じてただらうよ』

ウォーロックと話している間に、スバルはWAXAの建物から出ていた。そこでスバルは電波変換し、頭上のウェーブロードに乗る。

『さあーで、どんどん倒して……って、おい……ちよつと待てよ。何なんだ、これは……？』

「わからない……でも、これは普通じゃないよね……？」

ウェーブロードに乗ってすぐに、スバルとウォーロックは揃って異変に気づいた。WAXAのウェーブロードは、数え切れないほどの電波ウイルスで満たされている。それもただの電波ウイルスではないようで、どの電波ウイルスも灰色のオーラを纏い、目は青い光を放っている。

『へっ、上等じゃねえか……俺も協力するぜ、スバル！』

「ありがとう、助かるよ！ バトルカード、レイブレイド！」

ウォーロックが隣に現れた後、スバルはバトルカードを使って左腕に白く光る剣を装備する。

『久々に暴れてやるぜー！』

「全部、デリートする……！」

第41話 エース生還

「こんな年寄りでも、まだ頼ってくれる子がいる……少しでも役に立てるなら、断るわけにはいかないわね……」

自分の研究室で、ヨイリーはシドウの居場所を調べていた。スバルの期待に応えようと位置の特定を急ぐが、やはりそう簡単にはいかなかった。

「シドウちゃんが戻ってきてくれたら、本当に嬉しいけど……どこにいるのかしらねえ……っ！」

その時、モニターを操作するヨイリーの手が止まる。モニターの一つに、シドウの位置を示す赤い点が表示されたのだ。

「ほ、本当に見つかった……でも、ここは……!？」

「ハアッ!！」

『オラアッ!！」』

WAXAのウェーブロード上に突如現れた、灰色のオーラと青い目を持つ大量の電波ウイルス。スバルとウオーロックは、それらを2人で倒し続けていた。しかし、倒しても倒しても新たな電波ウイ

ルスが現れ、その数が減ることは無い。

「クツ……………」

『どづいうことだ…………？ いくら倒しても、次々と湧いて出てきやがる…………全然減らねえぞ！』

「それに、ウイルス自体も普通のより少し強いみたいだ……………」

スバルとウォーロックの体力がどんどん減っていくのに対し、電波ウイルスは次々と新しく出現する。このままでは、スバルとウォーロックが負けるのは目に見えている。

しばらくすると、ついにスバルとウォーロックの攻撃が止まってしまう。電波ウイルス達はその一瞬の隙を見逃さず、一斉にスバル達に迫る。

『チイツ、ここまでか…………！？』

「身体が思うように動かない…………僕達の、負け…………！？」

スバル達が諦めかけた、その時だった。辺りの電波ウイルス達はほぼ同時に何者かの攻撃を受け、一気にデリートされてしまう。その後は電波ウイルスの増殖も止まり、付近で灰色のオーラと青い目を持つ電波ウイルスは見られなくなった。

『電波ウイルスが、全部消えた…………！？』

「い、今のは…………？」

「ウイルスの中にリーダーがいて、そいつを倒さない限りウイルスは増殖し続ける。だが、そのリーダーを見分けるのは不可能に近い」

スバルの背後から聞こえてくる青年の声。それはスバルもウォーロックも聞いたことがあり、最近は全く聞かなかった声だった。

「じゃあ、どうすれば良いか……簡単なことさ。全部一気にデリートすれば良い……そうだろ？ スバル」

「あ……暁さん……！」

振り向くと、やはりその姿があった。白い防具で顔や胴体を覆い、背中には薄い板のような翼、右手には灰色の大きな銃を持つ。

その姿の名はアシッド・エース。変身しているのはサテラポリスのエース、暁シドウだ。

「本物の暁さん……ですよね？」

「ああ……ジョーカーの自爆に巻き込まれたが、なんとか生きて戻ってこれたよ」

それから間もなく、スバルのハンターV.Gにヨイリーからの通信が入る。

『スバルちゃん、シドウちゃんの居場所がわかったわ！』

「博士！ 暁さん……ここにいますよ」

「なんとかか……戻ってきました」

『シドウちゃん……！とにかく、今すぐに私の所に来てくれるかしらっ。』

「わかりました」

ヨイリーとの通信を切ると、スバルは再びシドウの方を向く。

「博士の所に行きましょう、暁さん」

「あ、ああ……じゃあ、連れてってくれ……」

その直後にシドウの変身は解け、シドウは地面に向かって真つ逆さまに落下を始める。スバルは慌ててシドウを抱え、そのまま着地した。

「あ、暁さん！こんな大怪我してるのに、僕を助けてくれたんだ……」

変身が解けたシドウは、なぜ立っていられたのかと疑問に思ってしまうほどの大怪我を負っていた。身体の至る所に出血が見られ、全身を強く打ち付けているようだ。スバルは変身を解き、急いでWAXAの建物の中へ運び込む。

「……ッ……！……うっ、ぐ………！」

目を覚ますと、シドウはベッドの上に寝かされていた。誰かが怪我の手当てをしたようで、身体には包帯が巻かれている。足や腕は骨が折れているようで、添え木を当てる包帯を少し多めに巻いている。

「いてて……こんなに酷かったのか……そうだよな、爆発に巻き込まれたんだし……ん？」

その時、シドウは近くに誰かがいることに気づく。そこで、まだ痛む首をゆっくりと動かし、その人が誰なのかを確認した。

「……！」

そこには袖が無い白いワンピースを着た、紺色の長髪が印象的な10代後半くらいの女性の姿があった。ずっとシドウの側にいたのか、椅子に座って壁に寄り掛かり、そのまま寝てしまっている。

「まさか、こんなに早く会えるなんてな……」

シドウは軽く微笑みながら、その女性の頬を撫でる。するとその女性は目を覚まし、ゆっくりとシドウの方に顔を向ける。

「あつ……！」

「久しぶりだな……ティア」

「シドウ……！」

シドウの声を聞いて完全に目が覚めた女性は、シドウが怪我人であることを忘れて思わず抱き着いてしまう。

「うっ！！」

「あつ、ごめんなさい……嬉しくて、つい……」

「大丈夫だよ……元気そうだな」

「ええ……まだ釈放されたわけではないけど、シドウが戻ってきたからって……」

「一時的に、自由の身になったか……？ そうだな、俺から今日か明日にでも釈放してくれるように頼んでみるよ」

シドウに「ティア」と呼ばれた女性は、椅子から立ち上がり、棚から果物が入ったカゴとナイフを持ち出す。

「果物、食べる？ 私が切るわ……」

「ああ、頼むよ」

女性の名前はクインティア。ジャックという弟とともに犯罪組織「ディーラー」にいたがスバルに敗北し、サテラポリスの拘束を受けていた。しかしシドウが戻ってきたということで、一時的に拘束から解放されている。この場にジャックがないのは、他に用があるからだ。

「傷の手当ては誰が？」

「私とヨイリー博士。博士は今、出掛けるわ。シドウのために、うまい棒をたくさん買ってこるって」

「ハハハ、そいつは嬉しいね」

その後、クインティアは林檎をナイフで切り、皿にフォークも一緒に乗せてシドウに渡した。

「わ、私が食べさせた方が良かったら……?」

「さすがに恥ずかしいな……自分で食べられるから大丈夫だよ」

シドウは笑いながら皿を受け取り、切られた林檎をフォークで刺して口に運ぶ。

「俺さ……残ってた金で食料を集めながら戻ってきたんだ。全部使果たした時は本当に焦ったよ。水で飢えを凌いだりしてさ……果物なんて、何日ぶりだろうな……」

「そう……大変だったのね……」

「でも、ティアの顔を見たら元気出たよ。なんだか前より明るくなってるみたいだし」

「そ、そんな恥ずかしいこと、普通に言わないで……」

この部屋には、シドウのウィザードであるアシッドもいる。しかし2人の雰囲気を変えないために、ハンターV.Gの中から出ることは無かった。

第41話 エース生還（後書き）

各地を探し回る話を全てカットしてのシドウ登場回でした。

一応、流星3のエンディングに出たイラストの数分前を再現したつもりです。記憶が曖昧で完全に再現できているか心配ですが。

第42話 時の流れ

WAXAでシドウとクインティアが何やら良い雰囲気醸し出している頃、コダマタウンのルナの家にはスバル達が集まっていた。そこにはクインティアの弟で、鋭い目つきや逆立った髪などが特徴のジャックの姿もある。

「さあっ！ 今日ジャック釈放を記念して、楽しくパーティーよっ！」

「まだ決まったわけじゃねえんだが……」

「気にしない気にしない！ きつと大丈夫よ！」

ここにいるのはジャックとルナ以外に、スバル、ゴン太、キザマ口、ミソラの4人。ツカサは何か用事があるのか来ていない。

「はあ……なあスバル、こいつ一番うるさいぞ……」

「はは……まあ、委員長だからね。欠けていたクラスメイトが戻ってくるのが嬉しいんだよ。僕が不登校になってた時も、毎日しっかりと追い回してきたからね……」

ここがマンションであることを忘れて誰よりも騒いでいるルナを見て、スバルとジャックは揃って溜め息を吐く。

「まあ、今は楽しもうよ。せっかくみんなに会えたんだし」

「あ、ああ……そうだな……」

今のジャックにスバルに対する敵対心は無く、その表情も以前より明るくなっている。

「この日のために、スバル君のお母様に料理を教わったのよ！ さあ、どんどん食べなさい！」

「へえ、これ全部委員長が作ったの？」

「私もスバル君のお母さんに教わって、少しだけ手伝ったよ」

(委員長とミソラちゃん……いつ教わったんだろう……)

最近、スバルの家にルナやミソラが来た日は無い。2人が料理を教わった日がいつなのか、スバルは疑問に思っていた。しかし、それ以上に気になるのは味だ。見た目はそれほど悪くない。

「あれ……ゴン太、今日は食欲無いの？ まだ料理に手をつけてないみたいけど」

「お、おう……いや、まあ、その……」

ゴン太が料理に手を出そうか迷っていると、ルナは微笑みながらゴン太の肩に手を乗せる。

「ゴン太？ 私とミソラちゃんが頑張って作った料理よ？ 食べない、なんて……言わないわよね？」

「は、はい、いただきます……」

ルナが実は料理が下手だということを、ゴン太は知っていた。しかしルナのプレッシャーに耐え切れず、ついに料理を口に運ぶ。

「……ん？ んん！？」

「ど、どうしたゴン太！？ まさか、あいつの料理には毒が！？」

「ちょっと、ジャック！ 誰も毒なんか入れてないわよ！！ それで、ゴン太。感想は？」

「う……うまい……！！」

「……え？」

ゴン太の口から出た「うまい」の一言。その直後に、辺りは時間が止まったかのように静まり返る。そして、その沈黙を破るのもゴン太だった。

「な……なんだこれ！！ うめえぞ！？ あの委員長が作った料理とは思えねえ！！！」

「ちょっと！ それどどういう意味よお！！！」

「そのまんまの意味ですよ。委員長は料理が下手だったので、ゴン太君も驚いているんです」

「うぐっ……そ、そんなの、おいしくなるに決まってるじゃない！ 頑張つて、作ったんだし……」

同時にミソラが作った料理も大絶賛で、スバルは改めて自分の母親の料理と、その教え方の上手さを認識した。

「ジャック。釈放が決まったら、また学校に来るんだよね？」

「ああ。暁が校長に頼んでくれるみてえだ。姉ちゃんも、また教育実習生としてコダマ小に来れるかもしれないね」

「そしたら、紹介する人がたくさんいるんだ。ジャックが転入してきた頃に学校にいなかった友達もいるからね」

「そうか……」

ジャックがいない間に、まずツカサが戻ってきた。そして、次の登校日には翔と飛頼が転入してくる。小鳥や光も紹介したい所だが、この2人は薫に連れ去られているため学校には来ていない。

「ほらほら、もっと食べなさい」

「料理までできるようになるなんて、すげえ委員長！委員長として完璧すぎるぜ！」

「ふふん、褒めても料理しか出ないわよ？」

ルナは自分の料理を次々と平らげるゴン太を見て、かなり機嫌を良くしていた。

「それにしてもよ、なんで料理しようなんて思っただ？ ミソラちゃんも委員長も、あまり料理したこと無いんだよね？」

「えっ？　そ、それは……」

ルナは顔を赤らめ、一瞬だけスバルの方を見る。そしてすぐに視線をゴン太がいる方に戻した。

「う、うるさいわね！　女の子が、料理くらいできなくてどうするのよ！　私もミソラちゃんも、ちょうど良い機会だから習っただけよ！」

「そうなのか？　……まあ良いか」

ゴン太が再び料理を食べ始めると、ルナも再びスバルの方に顔を向ける。

「スバル君も食べてくれてるわね……良かった……」

『何が良かったんだ？』

「だって、スバル君に私の料理を食べさせる機会なんて滅多に無いじゃない。だから頑張っ……ん？　ちょ、ちょっと！　何勝手に人の独り言聞いているのよお……！」

ルナは独り言で終わらせるつもりだったが、後ろにいたウォー口ツクの問いに思わず答えてしまった。

『ほほお……？　この料理は、スバルに食べたいから頑張ったってか……？　お前も、なかなかやるじゃねえか』

「なっ、何よお！　この私をからかうなんて、良い度胸してるじゃない……！」

『おっ、そんな態度で良いのか？ 今の、スバルに言っちゃまうぜ？』

「ぐっ！ し、しまった……これじゃあウォーロックに勝てない……」

『へっへっへ……』

今のやり取りによって、ウォーロックはルナをからかうのと同様に、弱みを握ることに成功している。これで数日の間、ルナはウォーロックに逆らえないだろう。

『ウォーロック、ちよつと良いかしら？』

その時、誰かがウォーロックの名前を呼ぶ。ウォーロックの振り向いた先には、ミソラのウィザードのハーブがいた。

『ハーブか。どうしたんだ？』

『話があるのよ。表に出なさい』

『……？』

ウォーロックとハーブは、2人でルナの家を出ていった。

『……委員長さんから聞いたわよ。スバル君のお友達、誘拐された』

んですって?』

『小鳥と光のことか……俺達も助けようとしたが、相手が強くて負けちゃった……今度開かれるトーナメントに、そいつも参加するらしい。その時に勝てば2人は返してくれるって言うからな、もう負けられねえ』

『あなたが勝てないなんて……今度のFM星人は、強いヤツらばかりみたいね』

『ああ……』

ミソラとハーブも、咲姫と薫、そして凶哉の3人には会っているため、現在の地球で起きている異変は大体把握していた。小鳥と光が誘拐されたこともルナから聞き、その2人の心配もしている。

『暁さんの復帰も、そこまで早くないはず……私とミソラも、あなた達と一緒に戦うわ』

『俺達が勝てねえ相手だ、いても足手まといになるだけだぜ。お前達は、戦えないヤツらを守ってくれば良いんだよ』

『ごめんなさいね、こういう時に力になれなくて……』

『全くだ……と言いたい所だが、やめとくぜ……ヤツらは本当に強いからな、そこは仕方ねえさ』

スバルとウオーロックが変身するロックマンは、ゴン太とオックスが変身するオックス・ファイア、ツカサとジェミニが変身するジエミニ・スパーク、ミソラとハーブが変身するハーブ・ノートの、

どれよりも強い。そのロックマンが勝てない相手では、恐らく他の3人でも勝てないだろう。

『……戻ろうぜ。今は楽しむべきなんだろう？ 他の子の迷惑にならない程度に、お前とミソラの歌も聞かせてくれよ』

『はいはい、仕方ないわねえ。じゃあ戻りましょうか』

話を終えたウォーロックとハーブは、再び家の中へ戻っていった。

第43話 変な転入生

そして月曜日。スバル達は、いつものように学校へ向かっていた。いつもと違う所といえば、小鳥と光がいないことくらいか。今日はもう1人、最近になって加わった少女の姿も無い。

「スバル君、確か今日からよね？ 転入生が来るのって」

「翔君と飛頼さん。詳しいことは聞いてないけど、双子の兄妹らしいよ」

「へえ、双子……どんな子なのかしら」

「一言で言うと……変な人？」

「え……」

それから数分後、スバル達は学校の前に辿り着く。門をくぐってから教室へ向かう間、ルナの不安は高まっていった。

（変な人、って……？）

「突然だが、今日は転入生が2人来るぞー！」

本当に突然の知らせだった。スバル達のクラスの担任である育田道徳は、休み前の金曜日には何も話していなかったため、教室内はざわついている。

「金曜日、みんなが帰った後に転入の連絡が来てしまって、伝えることができなかったんだ。では、2人とも入ってきなさい」

その後に教室の扉が開き、そこから2人の転入生が入ってくる。

肩に掛かる程度の少し長めの黒髪や赤い瞳が特徴的な少年は、無地の黒い半袖シャツに暗い緑の長ズボンという服装で、腰には白いパーカーを巻いている。

後ろ髪を腋の下辺りまで伸ばした長い黒髪や赤い瞳が特徴的な少女は、無地の白い長袖シャツにプリーツ加工された黄色のスカートという服装で、スカートは膝に掛かるくらいの長さがある。

どちらも、つい先日スバルが戦った人物だ。

「えー……今日から転入しますー、夢幻翔です……」

「妹の飛頼です。よろしくお願いします」

怠そうに自己紹介した翔に対し、飛頼は真面目に自己紹介している。ぱっと見は普通の男女2人だったために、ルナの不安は少し和らいだ。

「2人は兄妹らしいから、席も隣り合わせにしておいた。そのの、星河の後ろの席に座ってくれ」

「星河？ …… おつ、本当だ」

「私達って運が良いね、知ってる人が同じクラスにいるなんて」

「ああ、そうだな」

（まあ、こうなるって知ってたけどな……）

自己紹介を終えると、翔と飛頼はスバルの後ろの空いている席に座る。スバルと同じ縦列の席には翔が、その左隣には飛頼が座った。

「よお、また会ったな」

「今日からよろしくね」

「よろしく。後で僕の友達も紹介するね」

それから道德が少しだけ連絡事項を話した後、ルナの号令で朝のホームルームは終わった。

「じゃあ、僕の友達を」

「私は白金ルナ。このクラスの委員長よっ！」

「委員長……なるほど、お前がこのクラスのトップか」

「トップ……ふふん、悪い響きではないわね」

スバルが話している途中にも関わらず、最初に自己紹介をしたのは委員長のルナ。翔が言った「トップ」という単語で機嫌を良くし

ている。

「委員長は、この学校の生徒会長でもあるんだぜ！俺は牛島ゴン太！好きなものは牛丼だぜ！」

「よろしくね、牛島君。ねえ、生徒会って確か先生に才能を評価された特別な生徒さんの集まりで、その会長は全学校を支配する凄い人なんだよね？ うわあ、委員長さん凄いなあ〜！」

(どうしよう、最初から最後まで全部違う……)

次に自己紹介したのはゴン太。やはり牛井大好物アピールは忘れない。飛頼はゴン太に向かって微笑むと、自分の中での生徒会のイメージを目を輝かせながら語り始めた。その全てが間違いなのだが、説明するのが面倒なスバルは黙って苦笑いしていた。

「僕は最小院キザマロです」

「最小院君ね。これからよろしく！」

「は、はい！」

飛頼は、次に自己紹介したキザマロにも笑顔を向ける。飛頼はキザマロの身長の高さを全く気にしていないようで、それを悟ったキザマロは機嫌を良くしていた。

「僕は双葉ツカサ。よろしくね」

「ああ、よろしくな。それにしても星河は良いよなあ、こんなに友達がいるなんて」

「今日から、みんな2人の友達だよ」

「……そうか、ありがとな」

ルナ達が自己紹介を終えて自分の席に戻った後、翔はスバルの隣の空いている席に目を向ける。

「……星河、暁シドウは見つかったか？」

「うん。昨日、暁さんの方から姿を現してくれたんだ。大怪我して、すぐには戦えそうにないけどね……」

「アシッド・エースが加われば心強い。だが、それ以上に戦力になるのはファイナライズ……お前の持つ、エースPGMの方だ」

翔は、スバルが持つエースPGMのことも知っていた。しかしエースPGMは、メテオGが存在しない現在ではあまり意味の無いプログラムだ。

「……エースPGMは、ただノイズの濃度を数値化するだけのプログラムだよ？」

「俺の力を使えば、一時的に過去のメテオGを現在に召喚することができる……」

「メテオGを、召喚って……！？ そんなことして、この世界や過去の世界に影響は……？」

「この世界にも、過去の世界にも影響は無い……ディーラーが本格

的に動き出す少し前、まだメテオGが地球から遠く離れた場所にある時間から持ってくるからな」

過去に干渉する能力を持つ翔の電波変換では、巨大なメテオGでさえも過去からの持ち出しが可能らしい。

「時間がある時に、EーSPGMの調整も頼んでおいた方が良いな」

「……わかった」

その数分後に、休み時間の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

「スバル君、ちょっと良いかしら」

「どうしたの？ 委員長……」

昼休みに、ルナはスバルを呼び出す。どうやら翔と飛頼のことで話があるようだ。

「あの2人って、本当に私達と同じ12歳よね……？」

「……？ そうだよ。それがどうかしたの？」

「どうかしたの、って……見てなかったの？ あの2人が黒板の前で算数や理科の問題を解く所！」

午前中の算数や理科の授業にはスバルも参加していたが、ルナがここまで騒ぐ理由がわからなかった。

「あー……考え事してたのかな、全然見てなかったよ」

「全く、あなたは……算数は翔君、理科は飛頼さん。みんながわからなかった問題を、あの2人は簡単に答えちゃったの」

そこまで話すと、ルナは席に座って話している翔と飛頼の方を見る。

「あの2人、確かに変ね……授業中ずっと2人で楽しそうに話しているのに、先生の話は全部聞いているし……なんか、いくら兄妹とはいえ仲が良すぎるような……」

「まあ、それは……お互いに大好きなんだよ……」

翔と飛頼の仲が良すぎる理由を知っているスバルは、ただ苦笑いするしか無かった。

「え……だ、ダメよ!? 兄妹で、そんなこと……まだ小学生なんだから、今のうちにダメだってことを教えなйтつ!」

「いや、言っても無駄なんじゃないかな……」

あの2人は、口で言っても効果は無い。少し話ただけで、スバルはそれを悟っていた。しかしルナは、スバルの忠告を無視して翔と飛頼のもとへ向かう。

「翔君、飛頼さん」

「聞こえてた。俺と飛頼は家族だから、あまり仲良し過ぎるのもダメだって言いたいんだろ？」

「そ、そうよ……あなた達の両親は、何も言わないの？」

ルナがそう問い掛けると、翔と飛頼は一瞬だけ互いの目を見る。その後、口を開いたのは翔だった。

「死んだよ」

「え……？」

「父さんは病気。母さんは、俺達を生んだ時に……だから俺達は、物心ついた時から父さんの元気な姿を見たことが無いし、母さんに至っては顔も見ることが無い」

「翔は、私のことをとても大切にしてくれてる。お父さんとお母さんがいなくて大変なのに、自分より私のことを優先してくれるの」

翔が取り分け飛頼に愛情を注ぐのは、幼くして両親を失ったことが原因であり、ただ妹が可愛いからというわけではなかったようだ。自分でシスコンと認めている辺り、それも間違いとは言えないが。

「ご、ごめんなさい……私ったら、そんなことも知らずに勝手なことを……それなら別に問題は無いのよ。本当に、ごめんなさい……」

「……まあ、たった1人の可愛い妹だからな。誰にも渡すつもりが無いのは確かだぜっ！」

「私はずっと翔だけのものだから、心配しなくて良いよ」

「前言撤回。やっぱり問題だらけだったわ！」

少し問題のある転入生2人を迎え入れて、6年A組はより一層賑やかになった。

第43話 変な転入生（後書き）

リメイク前の第1部全体と同じ話数まで来てますが、まだまだ終わ
りません。

今は大体中盤の少し前くらいの所ですね。

リメイクっぽくなるように、次はエースPGMに溜まったノイズが
暴走する辺りを書いていきます。

もはや「コスモスリメイク」よりも「小説3作の融合体」と呼ぶ方
が絶対合ってるが気にしてはいけない

第44話 影の正体

学校が終わると、スバルは翔と飛頼を連れてWAXAに来た。学校で翔と話したことを、シドウにも話しておかなければならない。

「暁さん」

「おっ、スバル……と、その2人は？」

ベッドの上で上半身だけ起こしていたシドウは、すぐに見知らぬ2人に気づいた。

「今日、学校に転入してきた翔君と飛頼さんです。ちょっと話があるって」

「話……？」

「……そんなことが可能なのか」

「ああ。過去や未来を操るのは危険なこと、少しでも間違えれば現在の世界に大きな影響が出る……だが俺達は、この世界に全く影響を与えずに、過去や未来を利用することができる」

「……お前達の存在は、この世界に影響を及ぼさないのか？」

「大丈夫です。この世界は、私達が生まれてこない世界だから……」

翔と飛頼が持つ能力のことから始まり、今日スバルと翔が学校で話した過去のメテオGを現在に持ち出す話まで、話せることは全て話した。あとは、シドウが信じるかどうかだ。

「……もし良ければ、お前達のウィザードを少し調べさせてくれな
いか」

「気が済むまで調べると良い。都合の悪いことは何も無いからな」

「じゃあ、ヨイリー博士の研究室に行ってくれ。そこで博士にハン
ターを預ければ良い」

「わかった。星河、案内してくれ」

スバルは翔と飛頼を連れて、ヨイリーの研究室へ向かった。それ
からしばらくすると、ウォーロックに近い外見の白いウィザードが
姿を現す。

『シドウ……あの2人は、信じて良いのでしょうか？』

「わからない……スバルが実際に見たって言うんだから、能力を疑
うことはできないが……本当に、あいつらは俺達の味方なのか？」

『私は、まだまだ警戒すべきと判断しましたが』

「俺もだ、アシッド……目的が見えてくるまで、油断できないな……」

……」

シドウのウィザードであるアシッドは、WAXAによって作られた人工バトルウィザード。この2人が変身するアシッド・エースは、とても高い戦闘能力を持っている。しかし、人工バトルウィザードとの電波変換はオペレーターの身体に掛かる負担も大きく、シドウは変身した状態を長く保つことができない。

「未来から来たせいかな、あいつらはWAXAの干渉を受けていない……今のうちに、ウィザードの能力を調べておかないとな……」

「……はい、終わり。データは保存したから、これは返すわね」

「早いな、まだ10分も経ってないのに……」

「ウィザードの能力データを保存するだけなら、そこまで時間は掛からないわ。あとはデータをシドウちゃんに見せるだけだから、あなた達もシドウちゃんの所に戻って良いわよ」

研究室に來ると、翔と飛頼はヨイリーにハンターVGを渡す。ヨイリーはウィザードの能力データの保存だけを済ませると、他には特に何も調べずに2人に返した。

「時間がある時に、未来のWAXAの話も聞いてみたいわねえ」

「俺達、WAXAとは関わりが無いから……」

「何も話せないです。ごめんなさい」

「あら、残念」

ヨイリーとの話を終わると、スバル達は研究室を出て再びシドウがいる部屋へ向かう。

「あの婆さん、なんでも信じてくれるから話しやすかった」

「まあ、ああいう性格の人だから……そういえば、まだ翔君と飛頼さんのウィザードを見たことが無かったような……？」

「あ、じゃあ見てみる？ 翔のウィザードはグローリー、私のはラスターって言うんだよ」

飛頼がハンターV.Gからウィザードを出すと、翔も同じようにして自分のウィザードを出した。

翔のウィザードであるグローリーは人型の黒い身体や黄色い瞳が特徴的で、灰色のアーマーを胴体と両腕に着けている。飛頼のウィザードであるラスターはグローリーと姿が似ていて、違いは白い身体と赤い瞳のみ。また、眠そうな目をしているグローリーに対し、ラスターは目をぱっちり開いている。

『……グローリー』

『私はラスター！ よろしくねー』

グローリーは静かに、ラスターは元気良く大きな声で、それぞれ自分の名前を言った。

「親が死んで、1ヶ月くらいだったかな……いきなり現れて、俺達に闇のカードをくれた……光と闇が敵対関係にあるってことも、その時に聞いたんだ。でも、こいつらは一言も戦えとは言わなかった」

『争うの……間違ってる……』

『光と闇は交わると危険……じゃあ、交わらないようにすれば良いんだよ。簡単でしょ？』

翔と飛頼に闇のバトルカードを渡したのはグローリーとラストーだった。当然、光と闇の関係についても知っている。しかし、この2人は光のバトルカードに選ばれた者を敵とは思っていなかった。

『……私達の目的は、光に選ばれた者を根絶やしにすることじゃない……光と闇の両方を持つとする、欲張りなヤツを止めることなんだよ』

「え……それって、一体誰のこと？」

「まだ気づかないのか。お前が光のカードを手に入れた頃から、お前に近づいてきたヤツがいただろう？」

翔の言葉の中には、疑問に思う部分があった。スバルが首を傾げていると、翔は溜め息を吐いてから話を続ける。

「お前は、灯小鳥から光のカードを受け取った。それは、お前が6年になってからだだよ」

「う、うん……」

「じゃあ今年になって、いきなりお前の近くに現れた人間は何人いる？」

スバルは、今年になって初めて出会った人の顔を頭の中に思い浮かべる。すると、やはり何人も浮かんできた。

「小鳥ちゃん、光さん、あとはFM星人のオペレーター……それに、翔君と飛頼さん」

「まだいるだろう。今出てきた誰よりも、お前に近い場所にいるヤツが」

「……え？ ま、まさか……」

翔が指摘するあと1人の名前は、すぐに浮かんできた。ある日、その少女は学校の前でスバルとぶつかり、後からスバルの家の隣に引越してきたことも判明した。その少女は少しも怪しまれずにスバルに近づき、今までスバルの持つ光のカードを狙っていたと言うのだ。

「信じたくないんだろうが、俺達は過去も未来も見ることができ。嘘は言っていない」

「だって、そんな様子は無かったよ！？ 強いウィザードを持った、普通の女の子で……」

「残念だが事実だ。ウィザードのステラは、この世界に光のカードを持ち込んだ張本人……オペレーターの波風ランは、光と闇の両方に選ばれた危険な存在……」

第45話 漆黒の閃光

しばらく話した後、スバル達は再びシドウのいる部屋に戻ってきた。

「おつ、戻ってきたか。俺のハンターに翔と飛頼のウィザードのデータが送られてきたから、見てた所なんだ」

「普通……じゃないかもしれないが、まあ変な所は無いだろ？」

「ああ、そうだな。一応バトルウィザードのようだが……ウィザード単体での戦闘能力は低いな」

「あまり自分だけの力で戦ったことが無いらしいんだ」

シドウはベッドの上でハンターV.Gを操作し、ヨイリーから送られてきたグローリーとラスターのデータを確認している所だった。

グローリーもラスターも、バトルウィザードながら単体での戦闘能力は低めで、バトルカードによるサポートを受けて戦うタイプらしい。しかし電波変換すれば、高い戦闘能力を持つクロス・ブラック、クロス・ホワイトになれる。変わった点と言えば、それと闇のカードの管理者であることぐらいだ。

「闇のカードってのが気になるが……それは後で聞くとしよう。お前達が俺の所に来たのは、ウィザードの能力を見せるためじゃないんだろ？」

「ああ。星河が持つてるエースPGMの調整というか、メンテナンスというか……不具合が無いが、確認してほしい」

「そうか……それは構わないんだが、どうしてスバルは元気が無いんだ？」

シドウは、翔と飛頼の後ろでスバルが下を向いていることに気づく。最初と比べると明らかに元気が無いのは、ランの話を聞いたからだろう。

「スバル！」

「は、はい……あの、お願いします……」

シドウに名前を呼ばれると、スバルは慌ててシドウの側に寄り、ハンターV Gを渡す。

「どうしたんだ？ 具合悪いのか？」

「い、いえ……大丈夫です……」

「そうか……？」

スバルのことを心配しながらも、シドウはエースPGMに不具合が無いか確認する。それが終わると、シドウはハンターV Gをスバルに返した。

「……見た感じ、特に不具合は無いみたいだな。まだ問題無く使えるぞ」

「そう、ですか……ありがとうございます。じゃあ、僕は帰ります……」

「お、おい待てよ!」

スバルはシドウからハンターV.Gを受け取ると、すぐに部屋を出ようと歩き出す。しかし翔に肩を掴まれて足を止めた。

「星河……俺……」

「教えてくれて、ありがとう……でも、少し考える時間が欲しいんだ」

「わかった……じゃあ、また明日な」

翔がスバルの肩から手を放すと、スバルは再び歩き出して部屋を出ていった。

「なあ、どうしてスバルは元気が無いんだ?」

「友達だと思ってた人が、実は敵だったから……今は、これだけしか言えないかな……」

シドウが問い掛けると、飛頼が出入口の扉の方を心配そうに見ながら答えた。

「余計に気になるけど……まあ、話せないって言うなら仕方ないか。お前達も、用が済んだら帰って休めよ。明日も学校だろ?」

「……怪我、早く治してくれよ」

「さようなら、暁さん」

翔と飛頼は、それぞれシドウに挨拶してから部屋を出ていった。

「……あいつら、住む場所あるのか？」

翔と飛頼に帰れと言っておきながら、シドウは自分の言葉に疑問を抱いていた。2人は未来から来たため、当然この世界に彼らの住む家は無い。

『あの2人が気掛かりなのはわかりますが……それよりも気にするべきことがあります』

しばらくすると、アシッドがシドウの隣に現れた。正体不明の、強い電波体の気配を感じ取ったようだ。

『強力な電波体……僅かながら殺気も感じられますので、恐らく敵でしょう……』

「敵は待つてくれない、か……！」

敵が近づいていても、怪我をした身体では戦えない。シドウもアシッドも、部屋に留まることしかできなかった。

その頃WAXAの外のウェーブロードでは、輝く翼を持った電波

人間が静かにWAXAの建物を見つめていた。

「……天使様、ここで合ってますか？」

『ええ……光のカードも、闇のカードも……ここにありません』

スバルと翔の話の中に出てきた、波風ランとステラだ。この2人は、やはり光と闇のバトルカードを追って来ていた。

「建物を破壊して取りに行きますか？」

『いいえ、今は私達が派手に動く必要はありません……面白いものを見つけました。先程ウイルスを操ったのと同じように、それも操ってみましょう』

「わかりました……」

ランは翼から羽根を1つ取り、手の平の上に乗せて息を吹き掛ける。その羽根は空中をふわふわと漂い、その後すぐに消えてしまった。

「まずは光のカード……あわよくば闇のカードも……！」

『……さて、これからどうする？』

「特に用事は無いし、帰ろうかな。考えることは家で考えよう」

特に用事の無いスバルは、コダマタウン行きของผู้ブライナーを待っていた。ランのことや光と闇のカードのことなど、とにかく今は考える時間が必要だった。

『このことは、委員長達に話すのか?』

「どうしよう……友達が増えたって、みんな喜んでたからね……」

ランがスバルの敵に近い存在だと知れば、ルナ達は間違いなく混乱する。混乱する以前に、その話自体を信じないということもある。どちらにせよ聞いて良い気分になる話ではないため、スバルは話そうか迷っていた。

『……? スバル、WAXAからメールだぜ?』

「不定期で配信されるメールサービスだね。内容は……夏期ウェーブバトルーナメント開催のお知らせ、って……」

そんな中、WAXAからスバルのハンターVGにメールが送られてくる。受信メールの件名には、スバルが読み上げたように「夏期ウェーブバトルーナメント開催のお知らせ」と書いてあった。これを見て、スバルは薫の話进行出す。

「水野さんが言った……WAXAのメールサービスで、トーナメントのことを伝えるって!」

『あれは本当だったのか……まさか、ハッキングでもしたか?』

「とにかく読んでみよう……」

メールは、最初に春期トーナメントで観客を危険な目に遭わせたことに対する謝罪文から始まり、その後に夏期トーナメントの開催日、時間、エントリー方法などの詳細が書かれている。

「次の土曜日、朝の10時からナイトシティのサイバースタジアム
つて所で開催するみたいだね」

『聞き慣れねえ名前が出てきたな。どこにあるんだ？』

「地図が添付されてる。コダマタウンから、ウェーブライナーで3
0分くらいかな。じゃあ、これからエントリーしに行こうか」

『おお、そうだな』

スバルは予定を変更して、ウェーブライナーでトーナメント会場
があるナイトシティへ向かおうとした。

「……………ん？」

ウェーブライナーが乗り場の前に止まった時、突然スバルのハン
ターV.Gに光る羽根が落ちてくる。羽根はハンターV.Gの中に取り
込まれるように消えていき、その直後にハンターV.Gは強い光を放
った。

「わっ！ な、何これ！？ ロックー！？」

『エースPGMの様子がおかしい……………スバル、気をつけるー！』

その後、強い光は球体のようになってハンターV.Gから離れ、ゆ

つくりと色や形を変えていく。

「あ、あれは……!!」

そこには、本来ならば存在するはずの無い電波人間の姿があった。身体には黒いアーマーを纏い、背中には赤いノイズの翼を持つ。他にも目を覆う赤いバイザーや胸の流星を模したマークなど、その電波人間はロックマンと共通の特徴をいくつも持っていた。

『おいおい……こいつは、またスゲエもんが出てきたな……!!』

「灰色の光と、青い目……この前の電波ウイルスと何か関係が……？ いや、それより気にするべきは……!!」

スバルはシドウに会う前、WAXAのウェーブロードで大量の電波ウイルスと戦った。その電波ウイルスは灰色のオーラや青く光る目という、通常の電波ウイルスには無い特徴を持っていたが、スバルの目の前にいる電波人間も同様の特徴を持っている。しかし、スバルはそれに驚いているわけではなかった。

「あの姿は……ブラックエース……!？」

まだメテオGが存在していた時、スバルはファイナライズという変身を武器に戦っていた。そして今スバルの目の前にいるのは、そのファイナライズでスバルが変身したブラックエースそのものだった。

『どつする、向こうは戦う気満々だぜ?』

「今回は1人だけだから、復活することは無いのかな……とにかく、

放っておくのは危険だから倒さないと！」

殺気を放つブラックエースを倒すため、スバルはロックマンに電波変換した。

第46話 敗北への恐怖

「どう見てもブラックエースだ……お前は何者だ!？」

「何者、って……わかるだろう？ 僕はブラックエース。エースPGMに蓄積されていたノイズから生み出された、キミの分身みたいな存在だね」

「僕の……分身？」

スバルの前に現れたブラックエースは、スバルの問いに対し「自分分はスバルの分身だ」と答える。エースPGMに蓄積されたノイズから生み出されたというが、今までエースPGMから何かが出てくること自体無かったため、スバルもすぐに信じることは無かった。

「ノイズから生み出されたって……一体どうやって？ その灰色の光も何か関係あるの？」

「これは……手下の証、とでも言おうかな？ その人の命令で、僕はキミを倒さなければならぬ。キミが持つ光のカード、渡してもらうよ?。」

「光のカード……ランさんだね？ 何が目的なのかは知らないけど、これは渡せないよ」

「……残念だよ。やっぱり、戦うしか無いみたいだね」

ブラックエースの赤いノイズの翼がさらに巨大化する。そのまま

空中に飛び上がり、そこで両手に電気のような青い光を纏う。

『ブラックエースの力、キミが一番良く知ってるだろう？ でも、キミは力を半分も使いこなせていない。本当のブラックエースの力、その身に受けて確かめると良い！』

『来るぜ、スバル』

「うん。バトルカード、レイブレイド！」

スバルが左手に光る剣を装備した直後、ブラックエースは空中に残像を残して姿を消した。

「あれは……本体じゃないな。一体どこに」

『後ろだ！』

「ッ！！」

スバルは後ろを向き、その勢いを利用して光る剣を振る。すると、その剣はブラックエースの黒いノイズの剣とぶつかった。ブラックエースは、今の一瞬でノイズの剣を形成して右手に装備、スバルの背後から攻撃を仕掛けてきていた。

『良い反応だ！ ロックがいなかったら斬られてたね？』

「ブラックエースのスピード……こんなに速かったっけ……」

『ほら、よそ見しない！ ノイズストーム！』

大きく広げられたブラックエースの翼から、針のような鋭く細長いノイズが無数に放たれる。スバルは一旦ブラックエースから離れて攻撃を避けるが、やはり避けきれず少しだけ当たってしまった。

「クツ……これはクリムゾン・ドラゴンの……!？」

『プラズマウェーブ!』

スバルに休む暇も与えず、ブラックエースはすぐに次の攻撃を繰り出す。電気のような青い光を纏う右手を地面に叩き付けると、その青い光は衝撃波となってスバルに襲い掛かる。

「バトルカード、インビジブル!」

『消えた……隠れても無駄だよ。僕からは逃げられない』

「わかってる。だから逃げない! バトルカード、フォトンロープ!」

スバルはブラックエースのすぐ後ろで姿を現し、光のロープをブラックエースに巻き付ける。

『ッ!? 身体が動かない……!』

「バトルカード、ブレイクサーベル!」

『クツ……クリムゾンシールド!!』

動けないブラックエースにブレイクサーベルで斬り掛かるスバルだったが、その攻撃は赤いノイズの集合体によって止められてしま

う。

『行動が単純すぎる。僕に勝とうとして、焦ってるのかな』

「焦ってる……!?!」

『FM星人達に勝てなくて、自分の実力に自信を持ってなくなっているようだね。そんな中で、人質を2人も取られた。次は勝たなければならぬと思っっているうちに、敗北に対して恐怖を抱く。負けたくないから、ひたすら攻撃を仕掛ける。単純すぎて、回避が簡単な攻撃を……』

「……」

ブラックエースの言うことのほとんどが正しかった。勝ちにこだわる余り、スバルは相手に強い攻撃を当てることしか考えていなかった。スバルは返す言葉も見つからず、武器を下ろして俯いてしまふ。

『そうだな……僕に勝ちたいなら、もっと味方を増やした方が良く。そう、例えば……そこで隠れてる2人とか、ね!!』

フォトンロープによる麻痺から解放されたブラックエースは、WAXA付近の物陰に黒いノイズの塊を投げ付けた。WAXAの建物の外壁や近くの岩壁が破壊されると、それにより立ち上った土煙の中から電波変換した翔と飛頼が姿を現した。

「気づいてたか……」

「強力な攻撃だね。ノイズを力に変える、ブラックエースそのもの

だよ」

『キミ達は……闇のカードを持っている上に、その管理者の力も使えるのか。ちょうど良かった、キミ達が持つ闇のカードも貰うよ……！』

「そいつは無理だな。俺達3人が集まった今、もうお前に勝ち目は無い。勝つぞ……飛頼、星河！！」

第47話 未来を変える何か

「スバル君！」

「飛頼さん、いつから隠れてたの？」

「スバル君がフォトンロープを使ってた辺りからかな。それより、これ持ってて！」

飛頼は1枚のバトルカードを出し、スバルに手渡す。それは闇のカードのダークアローだった。

「これは……闇のカード？ どうして僕に？」

「スバル君がそれを使わずに持っててくれれば、スバル君もリードナイトメアの影響を受けないから」

リードナイトメアとは、光属性と闇属性の両方を持つ特殊なバトルカードだ。これは使用者が光と闇のどちらのバトルカードを持っているかで効果が変わり、使用者が持っている方のカードを持っていない者から体力を約半分奪い、持っている者全員の体力を奪った分だけ回復させる。

そのまま使えばスバルの体力も減ってしまうため、飛頼は自分が持つ闇のカードのうちの1枚をスバルに渡したのだ。どうやらそれぞれの属性に選ばれている必要は無く、バトルカード自体を持っていれば回避できるらしい。

「これで準備完了！ 一気に決めちゃうよ！ バトルカード、リードナイトメア！」

『……ッ！？』

飛頼がリードナイトメアを使用した直後に、ブラックエースの表情が変わる。バランスを崩すこと無く立っているが、体力を半分近く減らす効果は受けたようだ。

『今のは……一体何を……？』

「よし、私の仕事は終了かな？ あとはスバル君と翔で頑張っただけ。私も援護するから」

「わかった。2人が味方だと本当に心強いよ！」

スバルは飛頼から預かったバトルカードを返すと、ブラックエースがいる方へ走り出す。

「バトルカード、ウイングソード！」

「バトルカード、ダブルヘイト……！」

スバルと翔は、バトルカードによりそれぞれ両手に剣を装備する。1人に対して2人が2本ずつ剣を装備して攻めれば、1人の方は対処が難しくなる。

『ノイズソード！ シャドーエース……！』

ブラックエースは両手にノイズを集めて大きな剣を形成すると同

時に、同じくノイズを集めて自分の分身を作り出す。ブラックエース自身は翔の攻撃を止め、分身はスバルの攻撃を止めた。

『わかったかい？ 2人掛かりでも無駄なんだ』

「いや……無駄じゃないな」

『何？ ……ッ！』

ブラックエースは翔の剣を止めながら後ろを振り向く。その視線の先には、右手に黒い電波を纏った飛頼がいた。

「さあ、チエックメイトだ」

『あれは一体……！？』

「飛頼とラスターの能力。小型のブラックホールを作り出す技だが溜め時間が長い。だが、その溜めている電波を直接撃ち込めば、そいつは一瞬でデリートだ」

『何ッ！？』

翔が説明を終える頃には、飛頼は既に走り出していた。ブラックエースは逃げようとするが、いつの間にか翔は背中の鎖をブラックエースの翼や手足に巻き付けていたため、ブラックエースは身動きが取れない。

『さっきの援護するという言葉は嘘だったのか……！』

「違うよ。本当に援護するだけの予定だった。でも、あなた自身が

翔の攻撃を止めてくれたからね。スバル君の攻撃を止めていれば、こんな展開に変わることは無かったんだよ！」

『クツ……僕の判断ミスか……！』

飛頼は足を止めること無く、ブラックエースの背中目掛けて黒い電波の塊を撃ち込む。

「イレイズアーム！」

『……フツ』

「……ツー！」

飛頼の即死技は、しっかりとブラックエースを捉えた。このままブラックエースはデリートされるはずだったが、その身体は攻撃が当たった直後に黒いノイズとなって四方八方に飛び散り、同時に分身のブラックエースも消滅してしまう。

「まさか……！？」

「どうした、飛頼？」

「違う……両方とも分身だった！」

『そう。キミ達は、最初から僕の分身と戦っていたんだ』

ブラックエースの声が頭上から聞こえてきたため、スバル達はほぼ同時に上を向く。そこには右手に黒いノイズの塊を持った、本物のブラックエースがいた。

『なかなか良い連携だね。本来なら敵であるはずの光と闇の所持者とは思えない。でも、このままで良いなんて甘い考えは捨てるべきだ！』

ブラックエースは上空からスバル達に、右手の黒いノイズの塊を投げ付ける。それは地上で巨大なブラックホールとなり、スバル達を飲み込んで身動きを封じた。

『ブラックエンドギャラクシー……！！』

次にブラックエースは右手に集めたノイズで大きな剣を形成し、急降下しながらブラックホールごとスバル達を斬り付ける。最後に、ブラックホールは強い光を放って大爆発を起こした。

「クッ……！！」

「さつきから、なんなんだよ……クソッ！」

「私達が見た未来と、違う……！？」

スバル達3人には、まだ戦う体力は残っている。しかし翔と飛頼は、予想外の展開に戸惑っていた。ブラックエースが分身とともにスバルと翔の攻撃を止めた辺りから、既に変化は始まっていたのだろう。

「俺達は、たった1つの不動の未来を見てきたはずだ……！」

『僕には関係無いけど……キミ達以外に、この世界には存在しない何か紛れ込んでしまったのかもね。それが、キミ達の言う不動の

未来を動かすことに繋がった……』

「なるほど、その可能性も否定できないな……だが考えるのは後だ。今の攻撃で、完全に目が覚めた」

「私達、まだまだ戦えるよ！」

「僕だって、まだ倒れない！」

『よし……続けよう』

第48話 完全妹主義

『さて、どうするか……最初の意味のわからないバトルカードと言
い、今の即死技と言い……この戦い、長引くほど危険だな……』

今までスバル達に対して有利な戦いを続けてきたように思えるブ
ラックエースだが、実際はリードナイトメアにより体力を大きく削
られ、飛頼の即死技を警戒する余り常にスバル達から離れた場所に
いる。これによりブラックエースの最大の武器である、スピードを
活かした接近戦ができない状態となってしまうた。

『闇のカードを持つ2人は特に危険だ……こうなったら、距離を取
りながら倒すしかないか……いや、それだと僕の体力が持つかどう
か……』

ブラックエースが次の行動を考えている間に、スバル達はそれぞ
れバトルカードを出す。

「バトルカード、ホーリーフェザー……！」

「イービルギフト……」

「イービルギフト！」

3人とも取り出した1枚のバトルカードで体力を回復する。ホー
リーフェザーは光属性特有のインビジブル解除効果がある代わりに
回復量が多い。イービルギフトは体力を完全に回復し、一定時間だ
け全くダメージを受けなくなる。どうやら光と闇では、闇のカード

の方が強力らしい。

「よし……考えてるな」

「不安定な状態……死に最も近い状態……」

「……」

（2人の目つきが変わった……初めて僕の前に現れた時と同じ、冷たい目……）

「……星河」

「な、何？」

その時、翔が静かにスバルの名前を呼ぶ。その目がスバルの方に向けられることは無く、ただ上空のブラックエースだけを見ている。

「ヤツは終わりだ。すぐにでも倒せる……だから、お前は何もしないで良い。あとは、飛頼だけで十分だな」

「うん、任せて！」

翔は飛頼の返事を聞くと近くの壁に寄り掛かり、再び上空のブラックエースに目を向ける。

「けっこう楽しめたな、あれがブラックエースか。星河、そこを動かすなよー」

「え？ う、うん……」

それから間もなく、飛頼は頭上のウェーブロードに飛び乗り、警戒するブラックエースに今日一番の笑顔を向ける。

「そういつわけだから……死んで」

「クツ……断るよ。主は光と闇を全て集めたいんだ。僕は、主のためにキミ達を……」

「うん、わかったから死んで」

「い、いや、だから……ツ!!」

その直後、飛頼はブラックエースの視界から姿を消した。ブラックエースは辺りを見回して飛頼を探すが、その姿はどこにも見られない。

「……後ろか!!」

飛頼はブラックエースのすぐ後ろにいた。その右手には黒い電波の塊があり、バチバチと音を立てている。

「バカな……いつの間に!?!」

「さあ死んで イレイズアーム!!」

「まだだあツ!!」

飛頼が伸ばした右手から逃れるため、ブラックエースは真上に向かつて勢い良く飛ぶ。しかし、飛び上がった先には黒い渦があった。

『な……に……!?!』

「イレイズアームは一時的に空間を破壊して、ブラックホールを作り出す技……その本来の使い方をしただけだよ。じゃあ死んで」

『クツ……主を敵に回したこと、必ず後悔するぞ!!!』

そう言い残して、ブラックエースはブラックホールの中へ消えていった。

「やったな、飛頼」

「今度こそ僕達の勝ちだね!」

翔とスバルは、地上に下りてきた飛頼を笑顔で迎える。しかし、飛頼は不満そうに表情を曇らせていた。

「飛頼……?」

「翔、ごめん……あれも分身だったかも」

「何? どうして分身だと思うんだ?」

飛頼は、ブラックホールの中に消えていったブラックエースが分身だったと言う。近くにブラックエースの姿は無く、強い電波体の

気配も感じられないが、それでも飛頼は倒したのは分身だと言いつ張る。

「なんか……手応えが無かったというか……とにかく、本物を倒したって感じがしないの」

「それは、ヤツの身体がノイズでできてるからじゃないのか？ 人間とは違うんだ」

『いや……その子の言う通りだよ』

その時、スバル達3人の頭上から少年の声が聞こえてくる。ウェーブロード上には、たった今ブラックホールに飲み込まれて消えたはずのブラックエースの姿があった。

『今キミが倒したのは分身だ。そして僕が真正正銘、本物のブラックエース。もう分身は1体も残っていないよ』

「ほら、やつぱり……なんで見抜けないんだろう。私、戦いには向いてないのかな……」

「……飛頼は休んでろ。イレイズアームを連発して疲れてるだろ？」

飛頼が自分を責めている中、翔がゆっくりと歩き出す。その冷たい視線は、まっすぐブラックエース1人に向けられていた。

「翔君、僕も……」

「星河も下がってる。巻き込まれるぞ……」

「え……?」

翔はスバルの返事も聞かずにウェーブロードに飛び乗り、無表情のまま改めてブラックエースの方を見る。

「捨て台詞吐いたら素直に消えるよ、ザコが。分身使って逃げるのが好きなのか?」

『キミ達が安心していている間に倒すつもりだった。不意打ちも立派な戦略の1つだからね』

「そうか。まあ、言われてみれば確かにそうだな……だが1つ、気に入らないことがある」

『気に入らないこと?』

ブラックエースが聞き返すと、翔はブラックエースを指差してから再び喋り出す。

「お前……よくも飛頼の完璧すぎる作戦を潰してくれたなあッ!？」

『……は?』

「本当なら、お前はブラックホールに飲まれて消えるはずだったが、お前は分身を使って逃げた! 見る、飛頼が落ち込んでるじゃねえか! 軽く泣きそうだぞ! もう謝っても許さねえ。絶ッ対に、許さねえ!！」

『ええー……?』

ここにきてシスコンの翔が目覚めます。飛頼が落ち込んでいるのを全てブラックエースのせいにして、大声で怒鳴り始めた。少なくとも今の翔の頭の中は飛頼への愛情で満たされていて、飛頼という存在が今の翔を動かしていると言っても過言ではないだろう。

『い、いきなり変わったね……そんなに、あの子のが好きなの？』

「愚問だな……俺は世界で一番、飛頼を愛してる。世界は飛頼を中心に回っていると本気で思ってる！ 飛頼のためなら死ぬる！ 飛頼を幸せにできるのは、俺だけだあッ！！！」

『な、なんだろう、この恐怖に近い感覚は……』

暴走状態の翔を見て、ブラックエースは怖いわけでもないのに震えていた。また、地上にいるスバルは苦笑いしていて、飛頼は顔を赤くしながら目を輝かせている。

「あ、あそこまで暴走するんだ、翔君……」

「はあ…… 私、翔に愛されてる……なんか幸せな気分」

「飛頼さんは……暴走することは無さそうだね」

飛頼の方も同様に翔のことが好きなのだが、よほどのことが無い限り今の翔のような暴走状態にはならない。

「お前、もう分身は残ってないって言ったよな」

『そうだよ。僕が本物のブラックエースだ』

「じゃあ、これで最後だ。俺がお前を倒す。飛頼を泣かした、お前が悪いんだぜ？ 飛頼に逆らうなら神でも容赦しない。俺が全て叩き潰す！！」

第48話 完全妹主義（後書き）

翔の本来の姿がはつきりと現れる回だったと思います。

次回、翔がシスコンパワーでブラックエースを圧倒しますw

第49話 過去を持ち出す力

「飛頼のために生き、飛頼のために戦い、飛頼のために勝つ……覚悟しろよ、飛頼の敵」

『闇のカード……渡してもらおうよ』

「嫌だね。飛頼が持つてるのと同じ物が、お前みたいなヤツの手に一瞬でも渡ると思うと不快で仕方ない……絶対に渡さねえからな。バトルカード、ダブルヘイト！ ブラックイメージ！！」

シスコン全開で軽く暴走状態の翔は、バトルカードを2枚続けて使用する。1枚目のダブルヘイトにより両手に闇の剣を装備し、それを2枚目のブラックイメージで強化した。ブラックイメージは翔だけが持っている闇のカードで、直前の闇のカードの威力を倍にし、攻撃を当てた相手の動きを一定時間封じる効果も与える。

『正面から向かって来るか……！』

ブラックエースも、右手に集めたノイズで巨大な剣を作り迎え撃つ。向かって来る翔を斬ろうと、ブラックエースは右手の黒い剣を大きく横に振った。

「今度は……こっちの番だ」

『な、何ッ！？』

ノイズから成る剣に重さは無く、大きいながらも素早く振り抜く

ことができる。しかし、その黒い刃が翔を捉えることは無かった。ブラックエースの目の前まで迫って来ていた翔は、黒い剣が当たった瞬間に白い煙となり消えていった。

『向こうも分身を作れるのか……？ 本物は一体どこに……ッ！』

「貰ったあッ！！」

『グッ！？』

翔はブラックエースの背後に現れ、右手に装備した闇の剣を振る。その刃は、ブラックエースの右翼を斬り落とした。

『しまった……！ これじゃあ飛べない！』

「まだまだ！」

ブラックエースが逃げる前に、翔は左手に装備した闇の剣で今度は本体を斬りつける。先に翼を狙ったのは、ブラックエースの行動範囲を制限して戦いやすくするためだ。片方の翼だけでは、ブラックエースは空を飛ぶことができないのだ。

『クッ……一体どうなってる？ キミも分身を作れるのか！？』

「過去を再生したのさ。今、お前が斬ったのは数分前の俺……分身に攻撃を止められた時の俺なんだよ」

『バカな……闇の管理者が、そんな力を！？』

「管理者とか、どうでも良いだろ？ 今は俺に力を与えてくれる、

少し無口な普通のウイザードだ」

両手に装備した闇の剣が消えると、翔は背中に隠していた全ての鎖を近くのウェーブロードに突き刺す。その直後、翔の足元が白く光り始めた。

「これで、どこまで体力を削ってやれるか…… エンドレスホワイト
！！」

翔の足元だけでなく、ウェーブロードに突き刺した鎖も白い光を纏う。その後、鎖から槍のように鋭く細い光が伸び、ブラックエースを襲う。

『なるほど、四方八方からの攻撃で少しずつ体力を削るのか……空を飛べないとなると、避けるのは難しいな……！ インビジブル！』

ブラックエースはインビジブルで身体を透明にし、翔の攻撃を避ける。それも簡単に予想できたことで、翔は次の行動に移っていた。

「そう来ると思ったぜ……再生、イレイズアーム！！」

その直後、2つの黒い渦が翔の左右に現れた。飛頼がイレイズアームによって作り出した、小型のブラックホールだ。

『な、何……！？』

「俺の力で、過去から飛頼のイレイズアームを持ち出した。さあて、姿を現してもらおうか？」

しばらくすると、透明だったブラックエースは姿を現す。

『これは……！？』

「イレイズアームは、近くにいる敵の補助効果を吸い込み無力化する。インビジブルもバリアもオーラも、飛頼の力の前ではただ消えゆくしか無いのさ！」

『厄介な力だな……こうなったら、やっぱり離れて少しずつ……』

「いや、もうバトルは終わりだ」

『……ッ！？』

翔から逃れようとした時には、ブラックエースは既に上下前後左右を小型のブラックホールで囲まれていた。

「こんな感じで、同じ物をコピーして持ち出すこともできる。設置する場所にも制限は無い。飛頼がイレイズアームを使った時点で、お前の負けは決まっていたんだよ」

『クッ……まさか、本当に負けるなんて……！』

逃げることもできず、ブラックエースは静かに深い闇の中へ消えていった。

「……ふう、今度こそ大丈夫だろ」

「翔〜!!」

戦いを終えた翔が電波変換を解除して地上に下りると、すぐに飛頼が駆け寄ってきた。

「飛頼！ お前の分まで頑張ってきたぞー！」

「始めに自分の力で遊ぶ辺り、なんか翔らしいよね〜」

最初から能力でイレイズアームを連発していれば、翔はもっと早く戦いを終わらせることができた。しかしバトルカードを使ったり、エンドレスホワイトという自分自身の技を使ったりなど、わざと戦いを長引かせていた。そこまでできるほどの余裕が、翔にはあったのだという。

「さて、これで一件落着だな。星河、今日は帰るのか？」

「今度の大会の参加登録を済ませたら帰るよ」

「参加登録なんて必要なのか？ じゃあ俺達も行くか！」

その後、3人はトーナメント参加登録のためにウエーブライナーでナイトシティへ向かった。

第50話 笑顔に隠された憎しみ

国内某所の大きな家の中、アリスは一人で自分の部屋にいた。電気は点けずカーテンも閉めてあるため、その部屋は薄暗くなっている。

「……………はあ」

『どうしたんだ、アリス。体調を崩したか？』

アリスは枕を抱きしめ、ベッドの上に横向きに寝ていた。浮かない顔で溜め息を吐いているアリスを見て、コメットはハンターV Gの外に出てアリスに話し掛ける。体調を崩したのかというコメットの問いに対し、アリスは首を横に振って返事をする。

「違うよ。違う、けど……………ちょっと、一人で考えたいことがあるの」

『そうか。では、私は外に出ているとしよう』

「ありがとう……………」

アリスが静かに礼を言うと、コメットは薄暗い部屋を出ていった。それを見送った後、アリスは出入口となる扉に背を向けるように身体の向きを変える。

「……………どうして、仲の良い親子がいるの……………？」

今から約10年前、アリスはアメリツパの小さな町で生まれた。住む人は少なく、水や食料も満足に得られない貧しい町だ。

アリスの親は生まれて間も無い彼女を知り合いに預け、その知り合いがさらに日本の育児施設に預けた。そこで8歳まで育てられたアリスは、親がいる子供を羨ましく思い、同時に妬ましく思うようにもなる。

金髪に青い瞳というニホン人とは掛け離れた容姿のせいで、施設の中にアリスの居場所は無かった。また、勇気を出して子供達に近づくと、必ず親がいないことについて尋ねられる。いつしかアリスは、他の子供達の中に混ざろうともしなくなった。

それから数日後……

アリスは誰にも気づかれず、一人で静かに施設を出ていった……

行く宛てがあるわけでもないが、アリスはひたすら歩き続けた。

空腹と疲れで倒れそうになっても歩き続ける。道を歩く人々は、そんな身も心もボロボロな少女を助けようともせず、ただ見て見ぬふりをした。薄汚れた服を着た幼い少女が裸足で歩いているという異様な光景を、「普通の生活」を送る人々は不気味に思ってしまった。

体力が少しずつ限界に近づく中、アリスは道端で1人の少女と出会う。茶髪や黄色い瞳が特徴の少女、椎名董は、倒れそうになったアリスに小さな手を差し延べた。

董も親に捨てられ、幼いながらも1人での生活を強いられていた。しかしアリスと違い、しっかりと家に住んでいる。1人で寂しい思いをしていた董は、アリスを笑顔で迎え入れた。

親がいないという同じ境遇を持つ2人は、この時から一緒に行動するようになる。生活費を少しでも抑えるために電気、ガス、水道を全く使わない毎日は決して楽なものでは無かったが、それでも2人は力を合わせて生活していた。

その後、アリスが10歳、董が9歳になった年に、2人の前に電波体が現れる。FM星人のコメットとピスケスだ。

『キミ達……我々とともに来ないか。その怒りや憎しみ、孤独から解放されたいだろうか?』

話を切り出したのはコメットだった。2人は、その質問に迷わず「はい」と答えを出す。この時の2人はそれぞれの親だけでなく、自分達の助けを求める声を聞こうとしない他の人々のことも恨んでいた。力さえあれば復讐してやりたいとも思っていた。

『では、我々のオペレーターとなれ。アリスは私の、董はピスケスのオペレーターに……我々は、キミ達に力を与えることができる……』

コメットは2人の少女を相手に、常に優しい口調を意識して話す。他人を憎むアリスと董は、2人揃って頷いた。

電波変換の力を得ると、アリスと董は毎日のように戦い続け、少しずつだが強くなっていった。そして2人が電波変換の力を自由に使いこなせるようになる、コメットとピスケスは2人から離れてFM星に帰り、1ヶ月後に再び戻ってきた。これはアリエスやサジタリウス等の仲間が、それぞれオペレーターを見つけたかどうかを確認するためだ。

こうしてアリスと董は、少数の仲間と、人並みの生活環境を得たのだった。

「……ちゃん」

「……ん？」

「お姉ちゃんっ！」

アリスはゆっくりと身体を起こし、ベッドの側にある人影の方に顔を向ける。もう夕方なのか、部屋はさらに暗くなっている。そのため、その人影が誰なのかを認識するのに時間が掛かってしまった。

「……………董ちゃん？」

「コメットから聞いたの。お姉ちゃん、なんかボーっとしてたって大丈夫？」

「心配してくれたんだ、董ちゃん。そっか、いつの間にか寝ちゃってたかぁ……………」

「お姉ちゃんね、寝ながら笑ってたよ。何か良い夢でも見てたの？」

「うん……………私達が出会った頃のことを、ね。本当に運命的なものを感じたよねー」

アリスは微笑み、董の頭を撫でた。その笑顔を見て安心したのか、董も笑顔を浮かべている。

「もうすぐ大会だね……………今回は電脳空間でバトルするから、観客に被害が及ぶことは無い……………でも、負のエネルギーを溜めてアンドロメダを復活させるのも大事だし……………」

「良いんじゃない？ トーナメントに乗っ取ったのには、他に目的があるわけだし。大会以外でも負のエネルギーは溜められるよ！」

リーダーであるコメットのオペレーターとして、アリスはアンド

ロメダ復活のためのエネルギーが溜められないことに不安を感じていた。そんなアリスを、董は笑顔で励ます。

「そうだね……アンドロメダは大事だけど、それよりも……」

そこまで言うと、アリスはベッドから降りて扉の方へ向かう。董もその後をついて行き、2人一緒に明るい廊下へ出る。

「優先順位ってヤツだね、董ちゃん」

「うん……みんなで、頑張ろうね」

第51話 殺気の無い敵

そして土曜日。この日は、待ちに待った夏期ウェーブバトルーナメントの開催日だ。スバルは少し早い朝の9時に、会場であるサイバースタジアムがあるナイトシティに来ていた。

ナイトシティには中心部に高さ300メートルを超える電波塔があり、その周りを囲うようにして民家やビルが数多く建てられている。スバルが住むコダマタウンとは全く異なる風景の、大都会とも呼べる町だ。そしてトーナメント会場となるサイバースタジアムは、電脳空間を利用してウェーブバトルや様々なスポーツを楽しむことができるという。

「必ず勝つ……勝って、小鳥ちゃんと光さんを連れ戻すんだ」

『スバル、とりあえず会場に行くぞ。参加者を確認しねえと』

「そうだね。コメントの仲間は何人参加するんだろう……？」

スバルは全く把握できていないトーナメント参加者を確認するため、サイバースタジアムへ向かう。今回のトーナメントは、少なくとも薫とアリスは参加する。薫はスバルとの再戦を約束し、アリスは前回優勝したために今大会のシード枠を獲得しているからだ。

『それにしてもデカイ町だよなー。迷子にならねえように気をつけろよ』

「大丈夫だよ。この前参加登録しに行った時に、会場までの道のり

は確認しておいたから」

ブラックエースとの戦いの後、スバルは翔や飛頼とともにトーナメントの参加登録のためにナイトシティに来た。一時は迷子になりかけたが、それでもウエーブライナー乗り場からサイバースタジアムまでの道のりはしっかりと覚えていた。

「目印になるものがあって助かったよ。ほら、あの大きな家。あの家の先の交差点を右に曲がると、スタジアムが見えてくるんだ」

道路沿いの歩道を歩いているうちに見えてくる、他の民家よりも大きな赤い屋根の家。その先にある交差点を右に曲がり、そこから道路沿いにまっすぐ進んでいけば、会場であるサイバースタジアムが見えてくる。このように目印となるものとセットで覚えておけば、目的地へは簡単に辿り着くことができる。

『なるほどな、他の建物も見とけば良いのか』

「歩き慣れない町を歩く時の基本だよ。さあ、見えてきた。今回は何人参加してるのかな……」

サイバースタジアムの近くを見ると、意外にも観客らしき人の姿があちこちに確認できた。WAXA名義のメールは信憑性が高いらしい。

スバルは参加者用の入口から入り、その奥の控室に張り出されて

いるトーナメント表を確認する。既に対戦者の組み合わせや対戦の順番は決められているようだ。

「うわあ、17人も参加してるよ……4回勝てば優勝か……」

トーナメント表は4人で1ブロックとして、AからDまで4つのブロックが存在する。その中のDブロックにはシード枠が設置されていて、2回戦で勝った者は準決勝戦の前にシード枠と戦う。ここで勝った者が準決勝進出ということになる。

スバルはAブロックの左端、つまり一番最初に対戦する枠にいた。前回優勝のアリスはDブロックのシード枠、薫はBブロックの右端にいる。つまりスバルは準決勝戦で薫と当たり、アリスとは決勝まで進まなければ戦えないということになる。

「僕の1回戦の相手は……白雲カイト。アリエスのオペレーター！」

『ほお、早速コメントの仲間が相手か。つと、よく見てみるよスバル。そのカイトってヤツだけじゃねえ、恐らく全員が参加してるぜ？』

トーナメント表には、コメントの仲間全員の名前があった。Aブロックの左から3番目には薫、Cブロックの左から3番目には咲姫、Dブロックの一番左には凶哉の名前がある。また、飛頼はBブロックの左から3番目、翔はCブロックの一番左にいる。

『それに……ランも参加してるみてえだ』

「Bブロックか。2回戦で飛頼さんか水野さんと当たるんだね」

さらにウォーロックは、トーナメント表の中に「波風ラン」という名前があることにも気づく。ランはBブロックの一番左にいて、2回戦で飛頼か薫のどちらか勝った方と戦うことになる。

「この董つて人、確か前回の大会で棄権してたよね」

『仲間の志場凶哉ってヤツと戦うことになったからじゃねえか？
そいつも棄権してたしな』

「2回戦で当たるけど、強いのかな……」

『油断できねえのは確かだな。全力で戦えよ』

それからしばらくすると、控室にトーナメント参加者が集まり出す。時計を見ると、トーナメント開始時刻である午前10時の10分前を指していた。

『もうすぐだな』

「うん……あ、翔君と飛頼さんだ」

参加者の中に混ざって、翔と飛頼も控室にやって来た。スバルがいることに気づいた2人は、早足でスバルの側に寄る。

「よお、星河。もう来てたか」

「トーナメント表を見ておきたくて。今日は頑張ろっね」

「そうだね……あっ、私と翔は決勝まで当たらないみたい。良かった」

その後、スバルは改めて控室全体を見渡す。すると、入口付近には薫と凶哉の姿があった。

「志場君と水野さんだ……」

「……敵だけど、一応挨拶ぐらいはしておいたらどうだ？」

「私達はそういうの得意じゃないから、ここで待ってるね」

翔の問いに頷くと、スバルは薫と凶哉がいる方へ歩き出した。

「……薫」

「ん？ ……おっ、少年……じゃなかった、星河君！ 久しぶりだねえ」

無表情な凶哉に対し、薫は笑みを浮かべている。その様子からは敵意を全く感じられない。

「偉いねえ、敵の私達に挨拶しに来てくれたんだ？」

「まあ、これから対戦するかもしれないだし……」

「へえ……でも、私達は敵だよ？ その気になれば、今ここで星河君を抹殺することだってできるわけだし……」

「なんか、殺意を感じないというか……そんなことをするようには見えないから」

「…………え？」

スバルの返答に驚いたのか、薫はしばらく口を開いたまま何も言わなくなった。その後、凶哉に背中を叩かれると再び喋り出す。

「あ…………ああ、そう？」

「油断は死を呼ぶ…………殺気の有無で判断しない方が良い」

「…………そういえば、他の人は？ まだまだいたよね、アリエスのオペレーターとかサジタリウスのオペレーターとか…………」

スバルは辺りを見回すが、控室にいるコメントの仲間も薫と凶哉だけだった。それを2人に尋ねると、凶哉が静かに答えた。

「白雲と閃堂は、寝坊して朝食抜きだったから店に買いに行ってる…………」

「仲良しって、こういう所にも影響するのかなあ…………はは…………」

「…………そ、それで、あと2人は？」

スバルが苦笑いしながら再び尋ねると、今度は薫が答えた。

「アリスちゃんと董ちゃんのこと？ あの2人は一応トーナメントの主催者みたいなものだから、各ブロックで司会を務めるウィザードに指示を出しに行ってるよ」

「なんのためにトーナメントに乗っ取ったんだ…………」

「今思えば、全く意味の無いことだな……」

その後、カイトと咲姫が小さな白いレジ袋を持って現れた。ここまで走って来たのか、2人とも息を切らしている。

「間に合った……」

「じゃあ……お腹減ったあ……」

「今のうちに食っておけ……白雲はAブロックの一番手らしいぞ」

「ええ……相手は？」

カイトが尋ねると、凶哉は無言でスバルがいる方を指差す。カイトと咲姫は、そこでようやくスバルがいることに気づいた。

「星河君……やっぱり参加してたか。しかも、僕の最初の相手とはね……前は力を上手く使えなくてアリエスに支配されてたけど、今は違う。僕自身の力で、キミと戦うからね」

「絶対負けないよ……今回はかりは負けられないんだ」

今回は勝たなければならぬ。もし負けてしまえば、人質となつた小鳥と光を助けることが難しくなってしまうのだ。

「良いよ。僕は手加減なんかしないから。全力で来なよ……」

そう言つと、カイトは店で買ってきたものと思われるメロンパンを急いで食べ始める。

「……メロンパンのせいで、ちつとも怖くない」

「こらあ、そういうこと言わない！ カイト君、本当に強くなったんだよ！ 私だって、強くなったし……今日は負ける気が……しな
いんだ……にやっ！」

咲姫は苦笑いするスバルに向かって怒鳴る。しかし、カイトと違って咲姫は買ってきたパンを食べながら喋っているため、スバルは全くと言って良いほど恐怖を感じていない。

「こっちはもつと怖くない……って、そんな一気に食べて大丈夫なの？」

「んむ？ むっ！ むぐつぐぐ！ むー！」

「いや、何言ってるかわからないよ？」

「え？ うん！ 任してよ！ にやー！ ……って言ってるよ」

「え、わかるの！？」

クリームパン、あんパン、チョコパンなどといった甘いパンを口
いっぱいに頬張る咲姫の言葉を、カイトは見事に通訳してみせた。

「最近仲が良くなったばかりなんだけどね、さっちゃんの言いたい
ことは表情とかで大体わかるんだ」

「そう、なんだ……じゃあ、僕はそろそろ失礼するよ。一応敵だし
……」

「そっか。まあ、お互い頑張ろうよ。じゃあね、星河君！」

最後に薫が手を振ってきたが、スバルは特に手を振り返したりもせず、早足でその場を離れていった。

「ふう……さて、気を引き締めて行くよ……！」

その後、薫の顔から笑みが消えたのは、スバルに向けて振っていた手を下ろした直後のことだった。

第51話 殺気の無い敵（後書き）

ブロックの意味を間違えているような気がしてならない。

文章から頑張つてトーナメント表を作ってみると、具体的な順番や名前不明の参加者の位置などがわかりやすくして良いと思います。

第52話 空の戦い

アナウンスによりトーナメントの進行に関する説明を聞いた後、Aブロックの一番手であるスバルとカイトはそれぞれ控室を出る。ブロックごとに別々の場所で同時に試合を行うため、他のブロックの第1試合に割り当てられている参加者も控室を出ていく。

「また観客を襲う気？」

「あれは何か違うって思ったよ。アリエスも反省してる。今回は電脳空間を利用してバトルするから、観客は襲えないよ」

スバルは控室を出た先の廊下を歩く間、今回も観客を攻撃するのではないかと、少し前を歩くカイトを疑っていた。しかし今回のトーナメントは電脳空間を利用するため、その疑いもすぐに晴れることとなる。

「だったら良いけど……コメットの目的が全く見えて来ないことについては、まだ話してくれないの？」

「コメット自身に話す気が無いなら、僕も話すことはできない。邪魔する可能性があるキミには、特に……」

さっきまでの和やかな空気からは想像もできないほど、その表情は険しいものだった。そこには、今だにはつきりしない「コメットの目的」が関わっているのかもしれない。

「さて、この先が会場だ。お互い、悔いの残らないように全力で戦

おう」

「もちろんだよ……」

その後、カイトが目の中の扉を開けると、そこには多くの観客が待つ試合会場があった。

「僕らが作ったWAXA名義のメール……これだけの人が信じたんだね。向こうにプロジェクターみたいなのが見えるよね？ 僕達は、あの中の電脳空間で戦うんだ」

大きな歓声に包まれながら、スバルとカイトは会場の中心へと足を進める。そして、その先にある大きな機械の前に向かい合うようにして足を止めた。

『私がAブロックの司会を務めるウィザードです。先程説明しましたが、試合は目の前にあるウェーブバトルマシンの電脳世界で行われます。また、試合を行う舞台も数種類の中からランダムに選ばれます。舞台によっては自分にとって有利にも、不利にもなります』

「僕は地上戦ができる舞台だと良いな……キミは？」

「どんな舞台でも大丈夫だと思う」

「へえ……有利にも不利にもならない。なんか面白みに欠けるね」

スバルは「別に良いじゃないか」と呟くが、当然それは歓声によって掻き消され、カイトの耳には届かない。

『えー、では試合を始めますので、両者とも電波変換して……』

Aブロックの試合が始まるうとした時、他のブロックで司会を務めるウィザードの声が聞こえてきた。

『し、試合終了！ Bブロック第1試合勝者、波風ランさん！』

『試合終了…… Dブロック第1試合勝者、志場凶哉……』

「え……？ まだ始まったばかりなのに……」

「志場君は強いからね……ランって人も強そうだね？ とにかく、僕達も始めよう。電波変換！」

「電波変換！」

カイトが電波変換して電脳空間に入ると、その後を追うようにスバルも電波変換し、電脳空間に入った。

「これは……！」

「……希望通りには、ならないものだね」

電脳空間は、よく見るウェーブロードが広がったような見た目ではなかった。

どうやら、最初の舞台は空中らしい。鮮やかな青い空が頭上に広

がり、辺りには大小様々な無数の白い雲が浮かんでいる。スバルとカイトは、そんなフワフワとした雲の上に立っていた。

「空を飛べる人は有利になって、高所恐怖症の人は不利になるのかな……落ちたら怪我じゃ済まないんだろうなあ……」

その時、スバルが下を見ているのに対し、カイトは上を見て空に向かって手を伸ばしていた。

「この上には宇宙が……手を伸ばせば届きそうだ……そうだ、大きな夢を持つことの何がおかしい？ 弱いから無理？ そんなのは理由になってない。適当なことを言うヤツらに、夢を否定されてたまるか！」

「白雲君……宇宙に憧れる、その気持ちは本当によくわかるよ。それを否定されるのがどれだけ辛いのかも想像できる……でも、だからと言って力に全て任せるのは良くないよ。強さを証明して認めさせるなんて、間違ってる！」

「キミだって同じだ。結局、最後は力によって人を救っている……それでも僕が間違っていると言いたいなら、キミの力が僕の言う力とは違うことを証明してみなよ！ さあ勝負だ、ロックマン！」

カイトは綿のような雲に足を取られること無く、すぐ上の雲に飛び移った。

この舞台でのスバルとカイトの戦いは、言わば「空中での地上戦」だ。限られた足場を利用して空中で戦うため、相手より上の場所にいるだけでも十分有利に戦える。スバルも頭上の雲に飛び移るが、カイトはさらに上の雲に飛び移る。

「この舞台では上にいる方が有利だ。出遅れた時点で、もうキミは僕より上には行けないんだよ！」

『スバル！ こうなったら仕方ねえ、このままヤツに攻撃を当てるんだ！』

「うん……バトルカード、セイントキャノン！」

スバルはバトルカードを使って左腕をキャノン砲に変化させ、頭上のカイトに向ける。しかし、ここで1つの問題が発生する。

「み、見えない……！」

この舞台は現実の空を忠実に再現しているようで、僅かながら風が吹いている。そのため周りの雲が動き、スバルの視界を遮ってしまふのだ。

「クツ……当たれ！」

スバルは、さっきまでカイトがいた場所目掛けて攻撃する。セイントキャノンによる光の攻撃は、雲を貫き上に伸びていった。

「どうだ……？」

「残念、外れだよ」

その時、カイトの声が背後から聞こえてきた。スバルは後ろを振り向くが、そこにカイトの姿は無い。

「今回のトーナメントは、どんな状況でも戦えるような適応力が試される……」

「ッ！！ど、どこにいるんだ……？」

次は頭上から聞こえてくる。しかし、やはりスバルの頭上にカイトの姿は無い。

「この空のステージでは、雲と風を上手く利用するんだ。相手より上にいることも重要だけど、こうやって相手を惑わせながら戦うことだってできる」

「チツ、あちこち動き回りやがって……」

次は前方から声が聞こえてきたが、やはり姿は見えない。これだけ大きく移動しているのに、カイトの姿が見えず音も無いことを、スバルは少しずつ怪しく思い始めた。

「ねえ、ロック……これは僕の考えに過ぎないんだけど……相手は、ほとんど移動してないんじゃないかな？」

「なんだって？」

「だって、どう考えても変だよ。雲以外には動くものは見えないし、何か風を切るような音も聞こえないんだ」

「確かに……だが、そしたらヤツはどこに行ったんだ？」

風によって雲が流れていき、再びカイトがいた場所を確認できるようになった。しかし、その場所にカイトはいない。

「わからない。だから、どうにかして雲を退かしたいんだよね……でも、そんなことができるバトルカードは持ってないし……ファイナライズができれば……」

「……そうだ。ファイナライズだ、スバル！」

スバルが小さな声で呟いた時、ウォーロックは翔の言葉を思い出す。翔はスバルが再びファイナライズできるように、過去からメテオGを持ち出すと言っていた。現在の世界に影響を及ぼさないよう、ディーラーに見られる前のメテオGを、宇宙の地球から遠く離れた場所に設置するというのだ。

メテオGの中には流星サーバーという、ファイナライズの全てのデータが保存されたサーバーがある。エースPGMを用いてそこにアクセスすることで、スバルはファイナライズによりブラックエースに変身できた。

このブラックエースに変身できれば空中戦が可能となり、スバルはかなり有利に戦えるのだ。

「できるかな……翔君がメテオGを持ってきてなければ変身できないし……」

『考えてる暇は無いだろ？ とにかくバトルカードで攻撃しまくって、ノイズを発生させろ！』

「わかった……バトルカード、インパクトキャノン！」

スバルはバトルカードで左腕をキャノン砲に変化させ、近くの雲

を攻撃する。さらに、ノイズを発生させるためにさらにバトルカードを使う。

「バトルカード、ヘビードーン！」

次は四角い石像を出し、それを落として雲を吹き飛ばす。このバトルカードの攻撃がカイトに当たれば良いのだが、カイトは今も姿を現さない。

「バトルカード、ブレイクサーベル！」

さらにバトルカードを使い、スバルは左腕をサーベルに変化させる。それで近くの雲を斬りつけようとした時、突然真下から地響きのような音が聞こえて来る。

「な、なんの音？」

『……！ スバル、下から何か来るぞ！ 隣の雲に移れ！！』

ウォーロックの指示に従い、スバルは隣に浮かぶ雲に飛び移る。その直後、さっきまでスバルが乗っていた雲は巨大な黄色い角に貫かれ、消滅してしまった。

「なっ……何これ！？」

「やあ、けっこう待たせたね」

巨大な角が消えた後、スバルが乗っている雲の隣に浮かぶ雲にカイトが飛び乗ってきた。今の攻撃はカイトによるものらしい。

「今のバベルホーンは、やっぱり避けられないとね。一応、戦う意味はありそうだ」

「いつから、僕より下にいたの？」

「キミが最初に攻撃した後だね。雲に気を取られすぎだよ」

スバルが「雲が邪魔で見えない」などと言っている間に、カイトはスバルより下にある雲に移っていたようだ。スバルは上にいる方が有利という言葉に騙され、カイトが自分より下にいるとは全く思っていないかった。

「何か妙なことをしてるからね、もう戦うことにしたよ。パワードランス！」

カイトは頭の角を大きく長い槍に変化させて両手に1本ずつ握り、スバルの方へ走り出す。

「バトルカード、ウイングソード！」

ブレイクサーベルではカイトの2本の槍を止められないと判断したスバルは、別のバトルカードで両手に剣を装備して対抗する。

「そんなんじゃ、これは止められないよ！」

「ッ！ うわっ！？」

攻撃自体は防ぐことができたがカイトの力が強く、スバルは後ろに大きく突き飛ばされてしまった。

「なんて力だ……とりあえず体勢を立て直さないと……」

「そうは行かないな！」

スバルは近くの雲の上に立とうとしたが、その雲はカイトの投げた槍が当たって消滅してしまふ。足場を失ったスバルは、地上に向かって真つ逆さまに落ちていく。

「近くに雲が、無い……！？」

『スバル！ もう迷ってる場合じゃねえぞ！』

「そうだ、何もせずには負けるなんてダメだ……一か八か、賭けに出る！ ファイナライズ、ブラックエース……」

その直後、スバルの身体は黒いノイズに包まれていった。

第53話 ファイナライズ

『試合終了。Cブロック第1試合勝者、夢幻翔さん』

「よし、まず1勝だな。次の相手は誰だろうなー」

『閃堂……咲姫……』

「ああ、そいつって確かFM星人のオペレーターだよな？ そいつが勝ち上がって来るって言いたいのか」

試合を終えた翔は、控室へ向かう廊下を歩きながらグロリーと話していた。事前にFM星人達のことを聞いていた翔とグロリーは同じブロックにいるサジタリウスのオペレーター、咲姫が次の相手だと予想している。

「そういえば、飛頼の1回戦の相手もFM星人のオペレーターだったな……まあ、飛頼なら楽勝か？」

『そうとも限らない……もしかしたら飛頼ちゃん……負けるかもしれないわ……』

「あの水野ってヤツ、そんなに強いのか？ ……まあ俺としては、飛頼には1回戦で負けてほしいんだけどな……」

飛頼が1回戦で勝ってしまうと、次の2回戦でランと当たってしまう。そうなればほとんど飛頼に勝ち目は無く、ランに闇のカードを回収されてしまうことも考えられる。

『あなたも……閃堂咲姫には勝てても、その次の志場凶哉かアリスに勝てるとは限らない……気をつけなさい……』

「はは、厳しいなあ。はい、気をつけますよー」

その後、控室の前に来た翔は、目の前にある扉を開けて控室に入る。そこには、同じく試合を終えて戻ってきた凶哉とラン、そして試合までにまだまだ時間があるアリスがいた。

「夢幻翔……さん」

「お前……波風ランだな？」

最初に翔の方を向いたのはランだった。自分が狙っている闇のカードを持っているのだから、当然と言えば当然だろう。

「……あの、私に何か用ですか？」

「何が目的だ。俺や飛頼が持つ闇のカードと、星河が持つ光のカード……お前は、これらのカードを使って何をするつもりなんだ？」

「それは……」

「それ、私達にも話してもらおうよ」

翔とランの話に、アリスと凶哉も割って入る。アリス達も、ランのことは知っているようだ。

「なんだよ。お前らは関係無いだろ？」

「黙れ。お前と話すことは何も無い」

「だ、黙れって、いきなり話に混ざってきたのはお前らだろ！」

「まあまあ、落ち着いて。凶哉君も、相手は年下なんだから……」

いきなり喧嘩を始める2人を落ち着かせると、アリスは改めてラ
ンの方を向く。

「さて、久しぶりだね。前回の決勝戦で当たったアリスだよ」

「よく覚えてます」

「ちょっと聞き捨てならないことを聞いちゃったね。光のカードと
闇のカード……あなた、本気で両方とも集める気？」

「光と闇のカードのこと……知ってるのか!？」

「ああ。俺達の中に使用できるヤツはいないがな」

翔はアリス達が光と闇のカードの存在を知っていることに驚いて
いた。この2つの属性のカードは一般人が入手できるものでは無く、
それぞれに選ばれた者以外は存在を知ることすら無いはずなのだ。
どちらの属性にも選ばれていないアリスと凶哉がその存在に気づい
ているのだから、翔が驚くのも無理は無い。

「はい。私は光と闇、両方の適合者ですから」

「違う……何か別の目的があるよね？ 例えば何かを呼び出す、と

か

「……………」

その時、僅かだがランの表情が変わった。それにはアリスだけでなく、凶哉と翔も気づいた。

「凶星だね」

「おい、なんだよ。何かあるのか？」

「…………私から話すつもりはありません。天使様に聞いてください」

その後、ランの隣にステラが現れる。ステラは光のカードの管理者であり、アリスと凶哉はそのことも調査済みだった。

『騒がしいですね……………なんですか、あなた達は』

「あなたがステラだね？ 私達は、あなたと話すためにトーナメントに参加してたんだよ」

『なら乗っ取る必要はありませんね』

「うっ……………まあ、それは良いんだよ！」

（ごまかしたな……………）

凶哉は溜め息を吐くだけで何も言わない。今は無駄なことを話している時ではないのだ。

「ただのバトルカードじゃないのは知ってる。でも、それを両方集めることの意味がわからないんだよ。あれって、両方集めたら大変なことになるんでしょ？」

『まあ、そうですね……別に詳しく話しても良いですよ？ 信じるか信じないかは、あなた達の勝手ですし』

「なら聞かせてもらおうか。こいつらだけじゃねえ、俺だって何も知らないんだよ」

翔は闇のカードの適合者として、ステラの話を書く義務があると判断し、アリスや凶哉の前に出る。

『まだ1回戦の2戦目がありますし、時間はありそうですね……良いでしょう。今話せることは全てお話しします……』

一方、Aブロック試合会場では、今もスバルとカイトの戦いは続いていた。その中でスバルは、カイトの攻撃により空から地上へ落とされそうになったが、今は姿を変えて空中に浮いている。

「な……なんだ、その姿は……!？」

「ファイナライズ……できた……!」

スバルはファイナライズにより、黒いアーマーや赤い翼が特徴のブラックエースに変身した。その姿を見たことが無いカイトは、当

然ながら驚いている。

「空を……飛んでる？」

「よし、これなら勝てる！ 本当の勝負はここからだ！！」

スバルは右手に集めたノイズを大きな黒い剣に変形させ、攻撃のためカイトの方へ向かって行く。

「物理攻撃か！ だったら僕には効かない！」

スバルが振った黒いノイズの剣を、カイトは右腕だけで受け止めてしまう。カイトが変身するアリエス・ブレイブは、物理攻撃だけでなく防御にも優れている。その防御力は、ランが変身するステラ・エンジェルの一撃でさえ耐え切るほどのものだ。

「止めた……！？」

「その程度のスピードなら、まだ目で追える！ ドリルホーン！」

カイトは頭上に円錐形のドリルを出し、それをスバル目掛けて投げつける。スバルはカイトから離れて攻撃を避けると、再びカイトに近づき攻撃を仕掛ける。

「バトルカード、ブレイクサーベル！」

「あれは片手じゃ難しいか……？ まだまだ止められる！」

ノイズの剣よりさらに威力の高いブレイクサーベルだが、カイトはそれも両腕で受け止めた。たとえガードを破る効果があっても無

駄らしい。

「いつまでも防御してるわけにはいかないんだ……バベルホーン！」

カイトは右手でスバルの左腕を掴み、その後で自身の左腕を上
伸ばして叫ぶ。すると突然、スバルの真下に巨大な角が現れ迫っ
て来る。

「クツ……ここにいると巻き込まれるんじゃないの？」

「僕の防御力を甘く見ない方がよい……ああ、そうそう。バベルホ
ーンは巨大な角を突き刺す技ではないよ。巨大な角が、相手を飲み
込む技だ！」

その時、巨大な角が真っ二つに割れた。そこは獣の口のようにな
っていて、無数の鋭く尖った牙が並んでいる。

「飲み込む！？ そしたら僕はどうなるのさ！？」

「まあ、消化されるんじゃないかな。入って確かめてみなよ！」

カイトはスバルを、大きく開いた角の口の中へ思いつ切り放り投
げる。スバルは逃げようとしたが、その前に巨大な角は口を閉じて
しまった。

「よし、これで僕の勝ち……？」

電腦空間を出ようとしたカイトだったが、すぐに動きを止めて巨
大な角の方を見る。

「何か……音が……？」

何かが割れるような小さな音が、カイトの耳に入ってきていた。それがなんなのかは不明だが、大体の予想はできた。

「まさか……！？？」

その直後、巨大な角は大きな音を立てて粉々に砕け散る。その残骸が地上に向かって落ちていく中、空中に浮かぶ1つの人影があった。

「いくらなんでも早すぎる……どうやって脱出した！？」

「見ての通り、内部から破壊したんだよ。消化されるのは嫌だからね……あの角、外部は硬そうでも内部は脆いみたいだね。少し電気を流したら崩れた」

「電気……！？ そんな力まで持つてるのか！？」

「そうみたいだね……これは今、初めて使ったんだ……プラズマシユート……！」

スバルは右手に青く光る電気を集め、球体を形成してカイト目掛けて投げつける。

「そんなの効かな……ッ！？」

カイトは再び右腕を出して防ごうとするが、電気の攻撃は当たった瞬間にカイトの全身に周りダメージを与える。

「な、なんで……」

「防御を無視するみたいだね。これも同じ。クリムゾンストーム！」

次に、スバルは空中で静止し両手を前に伸ばす。すると赤い翼が巨大化し、そこから無数の赤いノイズの塊が作り出されカイトに襲い掛かる。

「グツ……これはノイズ!? 電波体がノイズを操るなんて、聞いたこと無いぞ……!!」

「喰らえ……ブラックメテオレーザー!!」

さっきと同じように空中で両手を前に出すと、今度は巨大化した翼の近くに黒いノイズの渦を形成する。翼を覆い隠すほどの大きさになった渦は、怯んでいるカイト目掛けて黒いノイズのレーザーを放った。

「ホーンウォール!!」

突然、カイトの乗る雲から生えるように複数の角が現れ、スバルが放った2つのレーザーを受け止める。始めは完全に止めたようにも見たが、数秒後には角にヒビが入り、粉々に砕けてしまった。

「クソツ……この僕が、防ぎきれないだど!?」

カイトは2つの黒いレーザーに飲み込まれていった。

『……Aブロック1戦目終了！ スバルさんとカイトさんのウェーブバトル、勝ったのはスバルさん！』

Aブロックの司会が話している間に、スバルとカイトも電腦空間から戻っていた。

「まさか負けるなんて……僕も、まだまだみたいだね。次のトーナメントまでに、もっと強くならないといけないね、アリエス」

『急ぐことは無い。ゆっくり確実に強くなれ』

スバルの大技を受けても、カイトは平然としていた。しかし、戦えるほどの体力は残っていないようだ。

「星河君。キミは、電波変換の力を他人を救うために使っている……どうして、他人のために自分を犠牲にできるんだい？」

「こんな僕でも、誰かの役に立てるなら……誰かを救えるなら、何もしないわけにはいかないよ」

「……力をどう使うかは、その人の自由だ。やっぱり、僕も簡単に考えを変えることはできない……2回戦も頑張りなよ。次の相手は、きつと董だろっね」

カイトはスバルに背を向け、試合会場を出ていった。その姿が見えなくなっただけから、スバルもゆっくりと歩き出す。

「なんか……敵と戦ってるような感覚じゃないな……」

『そうやって油断させるのが狙いだろ。とりあえず控室で休もつぜ』

「うん……」

第54話 この世界に無い物

「……そういえば、翔君はもう終わったのかな」

『だろうな。会場を出る時に、2戦目を始めるって言う司会の声が聞こえたしな』

「じゃあ控室にいるかな……あれ？ あの子は……」

会場を出た先の廊下で、スバルは自分より背の低い少女が歩いてくるのに気づく。

鮮やかな黄色い瞳が特徴的な少女は、長い茶髪を白いリボンで縛ってポニーテールにし、袖が無い水色のワンピースを着ている。少し大きめの服を着ているようで、足首より少し高いくらいの位置にスカートの裾がある。

「ねえキミ、もしかして迷子か何か？」

「え？ 私もトーナメント参加者だよ？」

「そ、そんな小さいの？」

「小さくないもん！ これでも9歳だもん！ あなた星河君でしょ？ 私は椎名董、ピスケスのオペレーターなんだよ！」

その時、董と名乗る少女のハンターV.Gから魚のような姿のウィザードが出てきた。

『お前とは多分会ったことねえよな。お前がピスケスか?』

『そう。僕がピスケス……僕らは1回戦、必ず勝つよ。そうすれば次の2回戦はキミ達と戦える……カイトとアリエスを倒した力、実に興味深い。楽しみにしてるよ……』

「それじゃあ、もう時間だから行くよ。また後でね、星河君……」

ピスケスをハンターV.Gの中に戻すと、董はスバルの横を通って試合会場の方へ歩いていった。

「あれで、2つ年下……」

『身長だけだと、もっとガキに見えるよな』

「なんか普通に失礼なこと言ってる気もするけど……とりあえず控室に入るうか」

スバルはそこから少し歩いた先にある扉を開け、控室に入る。そこにはアリス、凶哉、翔、ランの4人がいた。

「あ、翔君……1回戦、勝った?」

「……え? あ、ああ、当たり前だろ……お前も勝つたみたいだな」

「苦戦してたけどね……ねえ、何かあったの? 翔君もそうだけど、他の3人も変だよ……」

控室に元々いた4人は特に何も話さずに険しい表情を浮かべてい

た。スバルは、いくら敵同士とはいえ、ここまで空気が重く感じるのは変だと考えていた。

「星河……あいつらに、光のカードは渡すな……絶対に渡すな！」

「ランさんに？ それはわかってるよ………それだけ？」

「おい、お前達。ちゃんと星河にも話せよ、さっきのこと……！」

翔がランの方に顔を向けると、ランのハンターV.Gからステラが出てきた。

『全く、また同じことを話さなくてはいけないのですか？』

「良いから話せよ………」

『怖いですね、言われなくとも話しますよ』

ランの隣にいたステラは、スバルの目の前まで来てから改めて口を開く。

『お久しぶりですね、スバル君……ウォーロックも、ご機嫌いかがですか？』

『最悪の気分だ。何か隠してるなら、今のうちに全部話せよ』

ステラが静かに微笑むと、ウォーロックはスバルの隣に現れてステラを睨みつける。しかしステラは、それに動じることも無く話を続ける。

『では、彼らに話したことをお話ししましょう……まず私達は、ある目的のために光と闇のカードを集めようとしています。そして、その目的ですが……その前にスバル君、あなたは神や天使の類いを信じますか？』

「神と……天使……？」

『神とは心の中で描くだけの存在ではない……天使も同じ。もはや空想の存在ではなくなっているのです』

にわかには信じがたい話だったが、ステラが嘘を言っているようには思えない。実際、スバルも神に近い存在に出会ったことはあるし、目の前にいるステラもランからは「天使様」と呼ばれている。

「仮に神や天使がいるとして……光と闇のカードと、どう関係があるの……？」

『それらのカードを使い、神や天使をこの世界に召喚しようかと』

「召喚、って……！？」

ステラの話から、彼女の言う神や天使は「この世界には」存在しないことがわかる。そしてステラは、その神や天使をスバル達がいるこの世界に召喚すると言った。さすがにそれを信じることはできず、スバルは反射的に聞き返していた。

『召喚と言っても、ただ呼び出すだけです。様々な神や天使の魂と、それを繋ぎ止める城を……』

「魂に……城……？」

『元々、光の管理者というものは存在しません。では、光のカードは誰が適合者に渡すのか……答えは、誰も渡さない。この世界には本来、闇のカードしか現れないはずだったのです』

特に詳しい説明を挟まないまま、ステラは光のカードについて話し始める。その話によると元々光の管理者は存在せず、光のカードも本来なら地球上に現れる物ではないらしい。しかし、それだと実際の状況とステラの話の間に矛盾が生じてしまう。

まず、地球上に光の適合者がいること自体はステラの話からも読み取れるが、光の管理者がないという所が実際とは異なる。話をしているステラ本人が光の管理者と言われているからだ。そして光のカードは本来地球上に現れる物ではないという所について、入手経路は今だに不明だが、小鳥が確かに地球上で光のカードを手に入れている。それを考えると、「なぜ光のカードは地球上に現れたのか」という疑問が生まれってくる。

『私の話によって生じる数々の疑問……それについては、彼らにも聞かれました。あなたも含めて、みなさんは何か勘違いをしているようですが……私は自分が光の管理者で、光のカードを持ってきたのも自分だ、とは言ってませんよ？』

「…………え？　そう、だっけ…………でも翔君はステラが光の管理者だった！？」

「ああ言ったさ。でもな、思い出してみるよ。WAXAで戦ったブラックエースの言葉…………」

「ブラックエース…………あつ、そういえば…………」

WAXAでブラックエースと戦った時、翔との会話の中でブラックエースは「この世界には存在しない何か」という考えを述べていた。ブラックエース自身は光のカードについて詳しくは知らないようだったが、それは光のカードのことを表しているのかもしれない。

「あの辺りから何か変だった。飛頼が見た未来とは、少し違う方向に進んでいるんだ……」

「翔君……」

「俺の飛頼が見た未来に、間違いは無いはずなんだが……」

「こんな時くらい真面目でいてよ……」

長々と会話を続けるスバルと翔をしばらく眺めた後、ステラは軽く咳払いをしてスバルの注意を引く。

『……まあ、そんな感じですよ。飛頼さんが見る未来は正しい時がほとんどですが、あまり当てにすぎない方が良いでしょう。では話を続けます』

ステラはそこで一旦話を区切り、少しだけ間を置いてから再び話し始める。

『光のカードは、どのようにして地球に来たのか……この地球上を漂う神や天使の魂に残った力が闇のカードに移り、闇の力を浄化することで光のカードに変わったのです。光と闇で似たようなバトルカードが存在するのは、それが原因です。この世界の闇の管理者は私がデリートし、その後で光のカードを作り出しました……そのせ

いで飛頼さんは、私を光の管理者と間違えたのでしょうか。光のカードを作ることは成功しましたが、その後に私は意識を失い、目を覚ました時には光のカードは消えていました。最後に見たのが、あのコダマタウンというわけです」

「小鳥ちゃんは、それを拾ったんだ……でも、そしたらステラにも気づくはずじゃ……？」

『それは私も疑問に思っていました。ですが、今となっては過ぎたこと。考えても仕方ありません……さて、次は魂を繋ぎ止める城のことでも話しましょうか……』

『1回戦の全ての試合が終了しました。5分の休憩の後、2回戦を行います。該当参加者は準備をお願いします』

ステラは話を続けようとしたが、1回戦の全ての試合が終わったために中断してしまう。

『……残念ながら時間切れですね。続きは後にしましょう……行きますよ、ラン』

「ああ、はいっ！」

ステラがハンターV.Gの中に戻ると、ランは早足で控室を出ていった。

「気になる所で中断されたな……そうだ、残りの試合は誰が残ったんだろうっ？」

しばらくすると、スバルも控室を出ていく。その後に続いて翔と

凶哉も控室を出るが、2回戦も戦わないシード枠のアリスは控室に残っていた。

第54話 この世界に無い物（後書き）

今回は少し時間を戻して1回戦2戦目の様子を書きます。

第55話 上には上がいる

控室でスバル達が話している頃、試合会場では1回戦の2戦目に割り当てられている参加者が戦っていた。

『Aブロック2戦目、勝者は椎名董さんです』

「……よしっ」

2戦目開始から約5分後、董とその対戦相手は電腦空間から試合会場に戻ってきた。廊下で宣言した通り、董とピスケスは勝利した。

『やっぱり僕らは、水中ステージなら無敵だね……董、控室に戻る？』

「水野さんの戦いを見たい。控室にはモニター無いから」

董は試合会場を出ずに、再び電波変換して大きく上に跳ぶ。そして、その先にあるウェーブロード上に座り、遠くにあるモニターの方を見る。そのモニターには、Bブロックの試合の様子が映し出されていた。全ブロックのモニターが同時に試合の様子を映すからか、音声は出ないようになっている。

「水野さんの相手は、闇のカードを持つてる人だね……」

『すぐには終わりそうに無い、かな……』

その後しばらくすると、試合を終えた咲姫が董の所に来た。

「薰ちゃんっ！」

「さっちゃん！ 1回戦どうだった？」

「得意な森のステージだから楽勝！ 薰ちゃんも勝ったみたいで良かったよ。次は星河君とだね」

「うん。頑張る！」

薰と話した後、咲姫もBブロックのモニターの方に目を向ける。

「水野さん……まだ戦ってるね」

「あのステージは……海辺、かな？」

「陸地と海があるから……水野さんの得意なステージだね」

薰の言う通り、砂浜と大量の海水がある海辺は薰が得意とするステージだった。それでもすぐに勝てないのは、それほどの実力を対戦相手の飛頼が持っているということだろう。しかし、薰が有利であることに変わりはない。

「なかなか良いじゃないか、お嬢ちゃん！ 私の攻撃を上手く避けて、自分の攻撃に繋げている！」

「褒められても嬉しくないよ……私の攻撃なんか全部防いでるくせに」

「狙いは良いんだけどねえ、私に傷を負わせるまでには至らないかな」

薫もカイトと同じで、始めは相手の攻撃を回避するばかりだった。飛頼は主にバトルカードを使って攻撃していたが、薫は全て避けたり防御したりしてダメージを受けていない。

「闇のカードのことは調査済みだよ。私自身がどんな状態であろうと、当たればダメージを受ける……でも、当たらなきゃ意味無いよね」

「むっ……じゃあ、これも防げる？ バトルカードのリードナイトメア」

飛頼は1枚のバトルカードを薫に見せる。飛頼が使えば闇のカードを持っていない者から体力を奪う効果になる、リードナイトメアというバトルカードだ。

「……さっちゃんに使ったヤツだね。面白い、使ってごらん？」

「余裕だね。じゃあ使ってやるもん！ バトルカード……」

飛頼がバトルカードを使おうとした時、薫は持っている大きな本を開いた。しかし飛頼は、それも気にせずバトルカードを使う。

「リードナイトメア！」

「ミラー!!」

「……!？」

リードナイトメア使用直後、変化があったのは薫ではなく飛頼だった。全身の力が抜けるような感覚に襲われた飛頼は、その場に座り込んでしまう。

「あ……あれ……!？」

「その効果は被害者から聞いたけど……私には通用しない」

飛頼は以前ドンブラー村で、咲姫に対してリードナイトメアを使っている。お陰で薫は今回、その対応策を用意できた。結果、薫の能力により効果を返され、バトルカードを使った飛頼自身が体力を奪われてしまった。

「バトルカード、イービルギフト……」

飛頼は回復カードのイービルギフトを使って体力を回復し、しばらくダメージを受けない追加効果を得て立ち上がる。

「初めてだよ、あれを回避した人……」

「私達も本気なんだ……こんな所で負けるわけにはいかないんだよ」

今の飛頼がダメージを受けない状態だと知っているのか、薫は全く攻撃してこない。飛頼も動揺して乱れた呼吸を整えるため、今は攻撃の手を止めている。

「……そういえば、人質は無事なんだよね？」

「無事だよ。拘束も何もしてない。でも逃げることは不可能だね。あの2人のハンターは私が持つてるから。それに……まず、逃げようとすら思わないだろうからね……」

「……？」

「さあ、お喋りは終わりだよ。今は私に勝つ方法だけを考えな！」

そうやって話している間に、飛頼のダメージを受けない効果は切れた。

第56話 1回戦終了

「逃げようと、思わない……?」

「なんだ、まだ気にしてたの?」

「人質を取った側が何言ってるの? あなたに小鳥さんと光さんの何がわかるの?」

薫は、人質として誘拐した小鳥と光が逃げることは無いと言った。何を根拠にそう言えるのかは不明だが、その言葉で飛頼は不機嫌そうな表情を浮かべている。

「もちろん、逃げる可能性だってある。でも、監禁場所を調べてるうちに逃げる必要性を感じなくなると思うんだよ」

「だから、そう言える根拠は?」

「私……私達は、実は星河君に嘘を言い続けてたんだ」

「……嘘、つて?」

どんどん変わる話に混乱しながらも、飛頼は落ち着いて薫の話を聞く。

「まず、コメットの本当の目的……地球侵略じゃないよ。むしろ地球を救うために来てるんだ」

「やっぱり、私が見た未来と違う……地球を救うって、どういうことなの？」

「そのまんまの意味さ。まあ、初めは本当に地球侵略が目的だったんだけど……あのステラってヤツが妙な動きをしたからね、わざわざ地球侵略をやめて地球を救うことを選んだんだ。コメットに感謝しなよ？」

飛頼は話の内容を上手く飲み込めず、言葉を失っていた。そうしている間に、薫は近くの海から海水を集める。

「でもね、星河君達と一緒に戦うことはできない。私達は、私達の絆を強くしすぎた……」

「ちよっ……待ってよ！一緒に戦えないからって、私達が戦う必要は無いでしょ!？」

「そうかもね。とりあえず、今はトーナメントだから……ポセイドン！」

薫の頭上に集まった海水が腕のような形に変化し、飛頼に襲いかかる。ドリームアイランドで小鳥と光を水中に引き込む時にも、この力が使われた。攻撃性能は無いに等しいが、捕らえた者を水中の一定の範囲内に閉じ込めたり、溺れさせたりすることが可能だ。

「さあ、我が想いに応えし全ての水よ、この舞台で自由自在に踊り狂え!!」

「これは、当たるとヤバいかも……!!」

飛頼は不規則に動く水の腕から逃げるとともに、薫の奇妙な力の数々の対処法を考える。水を操るといふ性質上、ほとんどの防御は意味を成さない。水は自由に姿形を変えるため、たとえ防御しても上手く突破されてしまう恐れがあるのだ。

「技を使う時、必ずあの大きな本を開く……じゃあ、あれを奪っちゃえば良いのかな？ ……良い奪い方が思いつかない、却下。どうしようかな……」

「どうしたどうしたあ！ 逃げてたら勝てないよ!？」

「くっ……邪魔ッ!!」

飛頼は追ってくる水の腕の方を向き、黒い電波を纏う右手を前に出す。そして、その直後に現れた小型のブラックホールで水の腕を吸い込み消し去った。

「チツ……！ そいつも厄介だよねえ、ブラックホールを作る力。確か、溜めてる途中の黒い電波を叩き込まれたら即死だよね？」

「な、なんで知ってるの？」

「ウチらも派手に動くばかりじゃない。お嬢ちゃん達双子のことも調査済みだよ！」

薫達は翔や飛頼のことも調べていた。未来から来た2人のことを調べるので、当然ながらサーバーのハッキングなどで個人情報を得ることはできない。そのため、気づかれないように翔達の戦いを見たりしてデータを集めていたのだという。

「とことん犯罪者だね……もう通報しても良いかな!？」

「それは全て終わってからだね。とにかく今は、私を殺す気で戦いなあ!！」

「殺す気で戦って……大丈夫なの？」

「……良いねえ、その殺意に満ちた目……殺せるなら殺せば良い。もちろん抵抗するけど」

その後、飛頼は何度か深呼吸を繰り返し、再びイレイズアームの発動準備に入る。今度は力を溜めながら、薫の方へ走り出した。

「主催者はあなたの仲間……じゃあ、あなたを殺してもサテラポリスには通報しない。できないよね……あなた達も犯罪者だから」

「まあねー」

「じゃあ死んで……!！」

薫の目の前まで来た飛頼は、黒い電波を纏う右手で薫の左胸に触れる。その直後に薫の全身に黒い電波が回ったが、薫の身体は水になって弾け飛んでしまった。

「……!？」

「素直で面白い子なんだね。そう簡単に殺せるわけ無いでしょ？」

「いつの間にか力を使ってたんだね」

「力じゃない、魔法だってば。何度言わせるのかな」

戦い始めた辺りから、薫は飛頼に自分の能力が魔法によるものだと言っていた。しかし飛頼は今だに信じようとしなない。

「痛い人がいる。あれが俗に言う中二病なんだね。あー怖い怖い」

「星河君も信じてなかったけど、そこまで酷いことは言わなかったよ……？ てか、あんただって痛い人でしょうが。あんなシスコンと一緒にいて楽しいか、このブラコンが」

「ぐっ……わ、私はブラコンじゃないもん……翔のことが好きなかだもん！」

「それをブラコンと呼ばずして何と呼ぶ……まあ良いや。もう話すことも無いだろうから、戦いに集中してもらおうよ！」

薫は呪文書を開き、小さな声で呪文を唱える。それが終わり、魔法名を叫ぶことで、実際に魔法が発動するのだ。

「レイランス！」

「バトルカード、ダブルヘイト！」

薫の周りに集まる海水が無数の槍を作り、飛頼に襲いかかる。飛頼はバトルカードで両腕に闇の剣を装備し、迫ってくる水の槍を斬って消滅させる。水の槍を全て消したことを確認すると、今度は狙いを薫に変えて走り出す。

「ダメか……よしつ。次は……ミラーボール！！」

薫は別のページを開いて呪文を唱え、魔法名を叫ぶ。すると、飛頼の目の前にカーテンのような薄い水の壁が現れた。

「こんなものっ！ ……あ、あれ？」

飛頼は水の槍と同じように水の壁も剣で斬って消滅させるが、その先にいるはずの薫は姿を消していた。しばらくすると、薫は飛頼の背後に姿を表した。

「後ろ……ッ!?」

「っしゃあ貰ったああッ!」

飛頼は薫が魔法を使って攻撃してくると思っていたが、その攻撃方法は魔法ではなかった。ここでの薫の攻撃方法は開いていた呪文書を閉じ、その背表紙で飛頼の頭を思いつ切り殴るという、地味だが意外に痛い物理攻撃だ。

「あうう……あ、頭があああ……」

「ふっふっふ、どうだあ……大きさ、重量、ページ数！ 全てにおいて大辞典をも遙かに上回る私の呪文書の、背表紙による打撃は！ めちゃくちゃ痛いだろう!？」

「く、首まで痛い……まさか、あんな原始的な攻撃が生き残ってたなんて……!」

「さあ、早く逃げな。敵は待ってくれないよあ……ブレイアーム!」

飛頼が頭を抱えて唸っている間に、薫は魔法によって左手に海水を纏わせ、大きな剣の形に変形させる。

「くっ、早く逃げなきゃ……あ、あれ？　なんか、ふらふらする……？」

「……！」

飛頼は薫から逃げるために立ち上がるが、その後すぐにバランスを崩して倒れかける。それを見た薫は魔法の効果を消してから走り出し、飛頼の身体を支えた。

「っと、未来の若者は弱いねえ。あんなので脳震盪起こしたの？」

「うう……」

重い呪文書で殴られたことにより、飛頼は立てなくなる程度の軽い脳震盪を起こしてしまったらしい。薫は飛頼を座らせ、その隣に自分も座った。

「いやあ参った。予想外の事態に私もビックリだ」

「なんで助けたの？　私を倒すチャンスだったのに……」

「……降参しな。その話は後にしよう」

「うん……？」

飛頼の脳震盪は本当に軽いものだったようで、電波変換を解除して現実世界に戻ってから数分後には、普通に立てるようになっていた。

『Bブロック2試合目は、飛頼さんが降参したことにより薫さんの勝利です!』

「はあ、悔しいなあ。絶対まだまだ戦えるもん。降参しなきゃ良かったよ!」

「あのまま続けるのは危険だったよ。一応病院には行きな」

「次に戦う時は絶対負けないもん……それで、私を助けた理由は話してくれるんだよね?」

「……ついて来な」

薫が歩き出すと、その後を追うようにして飛頼も歩き出す。試合会場を出て、廊下を歩いている間に話すようだ。

「私ね、中学校の水泳部で部長やってるんだ。泳ぎで一番速いタイム出してたから……」

「出して、た……?」

「そう、過去形。今は……全く泳げなくなってるさ」

薫は水泳部員の中で泳ぎのタイムが最も速く、部員からも信頼さ

れていたため、部長を務めている。しかし、速く泳げるのは過去の話。今はタイムが落ちたのではなく、水の中に入ることができないらしい。

「大会が近い頃、私は部活が終わった後も1人で練習してたんだ。もちろん私も一応女の子だからさ、薄暗い所で水着姿晒してるのは怖かったよ……だから、帰宅部だけど凶哉にも付き合ってもらってたんだ」

「あの、一緒にいた人？」

「そう。クラスメイトだからって、半ば強制的にだけど……それで大会の1週間前だったかな。練習しすぎたのか、足がつって溺れて……その時、凶哉は水泳部の顧問と話してたから気づかなくて……目を覚ましたら、保健室のベッドで寝てた」

大会の1週間前ということもあり、薫は焦って練習量を増やしていた。足がつったのは、それが原因だろう。今まで足がつることなど無かったため、薫は動揺して溺れてしまった。しかし一緒にいた凶哉は水泳部の顧問と話していたため、薫が気を失うまで気づくとは無かった。その後、凶哉が薫を引き上げて保健室に連れて行っただけだったものの、それ以来薫は水に浸かることができなくなってしまう。

「凶哉は必死で謝ってきたよ。使用時間を伸ばしてもらえないように話してって、頼んだ私が悪いのに……私が練習量を増やさなければ、こんなことには……私と凶哉は決めたんだ。溺れる以外のことも、危ない状態の人はできるだけ助けようって。誰かが助けないと、不幸になるかもしれないから……さっきの脳震盪だって、症状が軽いって知った時は本当に安心したよ……ごめんね」

「そんなことが……でも危ない状態の人を助けるなら、なんで戦うの？」

「私や凶哉も、最初はアクエリアス達FM星人に身体を乗っ取られてたよ。それで、知らないうちにコメット達と戦ってたんだ。もちろん、戦うのには反対だった。でも、アリスちゃんや薫ちゃんを見てたら……あんな小さい子、放っておけないでしょ……？」

「裏切っても、結局は不幸な毎日が待ってる。だったら戦うことになっても、コメット達と一緒にいた方が良い……？」

「そう……」

その後しばらく無言が続いたが、控室が見えてきた所で薫が口を開く。

「控室だ……良い？ ちゃんと病院で見てもらったよ？」

「わかってるよお。じゃあ、一応……この後も頑張って」

「おー、ありがとうございます」

飛頼が出口に向かって歩いていくのを見送った後、薫も控室に向かって歩き出す。その直後、控室にいたスバル達が一斉に控室から出てくる。ランは素通りしたが、他は薫の前で立ち止まった。

「凶哉だ。勝ってきたよー」

「……そうか」

「水野さん……飛頼さんは？」

「星河君も、夢幻兄もいるねえ。妹さん？ まあ、ちよいとトラブルがあつてね、病院に行つた。なーに、別に大したことは無いから安心しなよ」

スバルの問いに答えた後で、薫はアリスがいなことに気づく。この後、少しの休憩を挟んでから2回戦が始まるのだが、シード枠のアリスはDブロックの2回戦勝者と戦うため、まだ控室に残っている。

「アリスちゃんの良いねえ、試合が2回も少ないなんてさ」

「薫、すぐに2回戦だが大丈夫か？」

「そんなに消耗してないから大丈夫。まあ、勝てるかどうかは怪しいけどね……」

「相手は優勝候補の波風ランだ……危なくなつたら逃げる。水中ステージなら、すぐに降参して良い」

簡単なアドバイスをしてから、凶哉はDブロックの試合会場に向かつて歩き出す。その少し後に翔もCブロックの試合会場に向かうが、スバルは薫の前から動かない。

「……どうしたの、星河君？」

「……怯えてるよね」

「ははっ、何を言い出すかと思えば……私の心配なんかしなくて良いよ。それより自分の心配をしな。次、董ちゃんと試合らしいよ？」

薫は笑いながらスバルの肩を軽く叩くが、スバルは表情を変えない。隠しているつもりでも、スバルにはわかってしまうようだ。

「……あんなに強気な人だったのに」

「ああ……怖いよ。怖がって何が悪い？ とにかく私は全力で戦う。あんなヤツの好きにさせていられるかってんだ！」

話を終わると、薫はスバルに背を向けて再びBブロックの試合会場へ戻っていった。その後ろ姿を見送るスバルの口元には笑みが浮かんでいた。

「強気な水野さんに戻ったね」

『敵を応援するなんて、どうかしてるぜ……俺達も行くぞ。やっぱり次の相手はピスケスらしいな』

「よし……行こう！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7662u/>

流星のロックマン - Re : COSMOs -

2012年1月14日11時46分発行